
天の道を往き、総てを司る女

ハピ粉200%

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の道を往き、総てを司る女

【Nコード】

N5477S

【作者名】

ハピ粉200%

【あらすじ】

天の道を歩くなのはさんが見てみたい。

そう言う理由だけで始めた本作品は、魔法少女リリカルなのはと仮面ライダーカブトのクロスオーバー作品です。

『俺様』魔法少女が見たいと思った方は、是非ご一読頂ければ幸いです。

この作品はArcadia様にも投稿させて頂いております。

0話

いつも思い出すのはその光景だった。

彼女　　アリサ・バニングスは回想する。

時期は五月頃、場所は小学校の中庭だったか。

とても些細なことで喧嘩したのだ。

ちよつと彼女のヘアバンドがかわいかったから。

少しだけ貸してほしかったから。

彼女、月村すずかにヘアバンドを貸してくれと頼んだのだ。

しかし彼女は　　それを断った。

それが私にはひどくケチ臭く感じてしまって・・・ついつい大声を上げてしまった。

すずかはびくりと震え、そして更に頑なになった。

そこからは、「貸して!」、「貸さないっ・・・!」の言い争い。

すずかとはその頃、あまり親しくなかったこともあって、私の中ではおとなしい女の子でしかなかった。

それがこんなにも意地を張るので、余計に私に心には怒りが渦巻いた。

今にして思えばおかしな話だけど、当時の自分にはそれが大事なことだった。

それから意外に力の強いすずかと引つ張りあいになり、とうとう叩く為に手を振り上げたとき。

『彼女』が現れた。

『彼女』は振り上げた私の手をつかみ、そして振り解いた。

「おばあちゃんが言っていたの」

そして、私の目を見てそう言った。

「たとえ世界を敵に回しても、守るべきものがある………つてね」

真つ直ぐに私を見据える彼女の瞳には、戸惑う私の姿が見えた。

「な、なによ………」

「あなたにとつてはそれだけのこともかもしれない。でも彼女にとつてそれは大事なもの。」

「なんでしょ？」

「……え？」

『彼女』はずずかに振り向いて、言った。

「ずかには酷くびっくりした面持ちで『彼女』を見ていたけれど、慌てて首を縦にぶんぶん振った。」

「どうやら助けらしいと分かるまで、私と同じく呆けていたのかも知れない。」

「あ、あの………ありがとう」

そして、感謝の言葉。

「気にしないで。」

「人が気持ちよく昼寝してる時に、騒がれると私が困るからね」「え………?」「」

微笑を浮かべてそう言い放つ『彼女』に、すずかは差し出した手をびくりと止めた。

「……ち、ちよつとっ！いきなり横から入ってきて何なのよっ！これは私たちの問題だから邪魔しないでっ！！」

それを見てわれに返った私は、猛然とぶり返した怒りのまま『彼女』に突っかかっていった。

「近所迷惑だよ。騒ぐなら誰もいない森の中辺りがおすすめかな？」

「な……っな、なに言ってるのよあんたっ！

大体、あんた誰なのよっ！」

そう言うと、彼女は天を指差した。

釣られて空を見るが、何の変哲もない青空だ。

「おばあちゃんが言っていたの」

そして、『彼女』はまたそのフレーズを繰り返した。

「私は天の道を往き、総てを司る女だと」

そう言い切る『彼女』の顔はとても真剣で、茶化した様子はどこにもない。

でも、言っていることは滅茶苦茶だった。

「……はあ？」

一泊の後、彼女はようやく私の質問に答えた。

「高町、なのは
それが私の名前なの」

それが『彼女』、高町なのはとの最初の出会い。
そして今まで、そしてこれからも続く長い付き合いのプロローグだ
とはこのときは知る由もなかったのです。

天の道を往き、総てを司る女

「ふあ……ああ……」

私、アリサ・バニングスの朝は早い。

6：30に起床し、とにかく洗面と歯磨き。

執事 鮫島の厳しいしつけの賜物で、これだけは寝ぼけてても
体が勝手にやってしまう。

お手洗いを済ました後は、着替えて朝食となる。
白を基調とした制服、私立聖祥学園の制服は汚れがすぐ目立ってし
まう。

しかし私の執事は完璧な仕事をしてくれたようだ。

今日も糊の効いたしわ一つない制服に袖を通すと、なんともいえな
い爽快感が溢れてくる。

鮫島に感謝しながら、朝食のテーブルにつく。

今日は両親とも海外にいたので、鮫島と二人で朝食だ。

最も、彼はすでに朝食は済ませているので同じテーブルにつくこと
はないが。

いつも一緒に食べればいいのと思う。

でも、使用人が同じテーブルで食べるのは駄目なんだそうだ。

私にはよく分からないけど、大きくなれば分かると誤魔化されてしまった。

それはともかく、朝食を終えたら次は登校だ。
向かうは、私立聖祥学園。

登校にはいつもバスを使っている。

一年生までは車で鮫島に送ってもらっていたのだが、二年生に上がると同時にバスに変えた。

そして、三年生の今でもそれが続いている。

その理由はこれだ。

「おはよう、アリサちゃん」

「おはよ、すずか」

私はいつもの後部座席に腰掛けた友人、月村すずかの隣に腰を下ろして笑いかけた。

「ねえ、昨日のテレビ見た？」

「昨日って『田村どうぶつ帝国』？」

「そうそうっ！とつてもかわいい猫ちゃんがねえ……」

「すずかんちは猫ばっかりじゃない、飽きないの？」

「そんなことないよ。どの猫さんもみんな違うし」

「ふーん……まあ、かわいいことは認めるけど」

他愛もない話を進める私たちにの、いつもの朝の風景。

あれからいろいろあった私たちだけ、今では世間一般的は親友と呼べる間柄だ。

話してみると、彼女は結構、なんというか………遅しい子だった。

『おとなしい』なんて印象を抱いていた私だが、全然そんなことは

ないと後から気づいた。

「あ、そうだ」

パンと手を打ち鳴らし、さもいい事に気がついたと言わんばかりに目を輝かせるすずか。

「今度なのはちゃんもおうちに呼ぼうよ。きっと喜ぶよ」
「……」

すずかと対照的に、なんか黙ってしてしまう私。

内心はいつものごとく、「始まったか……」「とすでにあきらめモードだった。

「ねえ、アリサちゃん。なんて言えば来てくれるかな？」

「おうちの猫さんアルバムとか持ってきたら興味持ってくれるかな？」
「？」

「……さあね」

彼女、すずかはあの日以来「高町なのは」に憧れの眼差しを向けていた。

本人曰く、「とつてもカッコいい」んだそうだ。

私には意味不明なかつこつけ、いわゆる「ちゆうにびょー」にしか見えないが。

「あ、なのはちゃんきた……なのはちゃん！こつちこつち」

いち早く彼女に気づいたすずかが、大声で呼ぶ。

そこに、悠然と歩いて姿を現したのが、件の「高町なのは」だった。

「相変わらずよく通る声だね。

「ただ私の耳は健康だから、もう少し静かに呼んでもらっても構わないよ」

「うんうん！わかったよ！」

「……」

その姿は、小学三年生にあるまじき灰色の作務衣に雪駄。ランドセルを背負わずに、なぜか手で持って登校している。聖祥学園行きのバスの中で、制服ではない彼女はとても目立つ。

「……制服着てきなさいよ」

「今日はいい天気だからね。」

「家中の服を洗濯してたら、つい予備も含めて全部洗っちゃたよ」

「なのはちゃん、自分で洗濯するの？」

「勿論。」

「おばあちゃんが言っていたの、『服が汚い者は心も汚い』ってね」

「すごいね〜。わたしはまだやってもらってるよ」

いつものフレーズで語るなのはと、素直に感心するすずか。そしてどこかついていけないものを感じる私。あれ、もしかして3人の中で浮いてるのは私？

「どうしたのアリサちゃん？」

「ふくれてないでこっち向きなよ」

「……ほっといてよ。」

「驚愕の事実打ちのめされてるだけだから」

「なのはがどこか面白そうに、私に声をかける。そんな態度も気に入らない。」

「相変わらず、面白い子だね」

「だあ、もう、その態度がムカツクッ！」

そんな朝の日常。

今日も空が青かった。

「ジュエルシード、シリアル？

封印ッ！」

緑の光とともに、封印術式が起動。

僕の意思を載せて、帯状魔方陣が対象……青い石へ向かう。

『Error .

Necessary power doesn't suffice
』

手の中に持つ、「レイジングハート」が警告を放つと同時に魔方陣は消し飛んだ。

それは当初から予想された結末だった。

パワー不足……この『封印術式』自体の起動はできるが、空間を捻じ曲げ次元を引き裂く程のエネルギーを持つ、「ジュエルシード」に対してはあまりに無力だった。

「くそッ！」

何とか……何とかしないと……っ！」

焦る僕を尻目に、ジュエルシードは活性状態へと遷移しつつある。青い燐光が集まり、本来の形である『願いをかなえる』という概念が収束する。

このままでは、遠からずいずれかの形でジュエルシードは暴走してしまう。

「もう一度だっ！

レイジングハート、シーリングモード！」

『Power necessary for the change doesn't suffice .

The withdrawal is recommended』

インテリジェントデバイス、「レイジングハート」はまたも魔力不足を警告。

撤退を推奨してきた。

本来、僕はデバイスを用いない結界魔法を使う。

慣れない魔法に慣れないデバイス、更に魔力不足では現状どうすることもできなかった。

「でもこのままじゃ……

っ！」

そうこうしているうちに、ジュエルシードは発動、黒い塊へと変貌を遂げた。

ジュエルシード暴走体だ。

何の『願い』を叶えたのかはわからない。

毛むくじゃらで目と手と口があるからには、何かの生き物に間違いはないのだろう。

そして、獣はこちらを向いた。

「……シールドっ！」

一瞬怯みかけた体を抑え、僕は得意の防御結界を展開した。攻撃には向かない僕だが、これには自信がある。とっさに出た魔法は、体が覚えたこの魔法だった。しかし。

ビキリ

結界にひびが入る。

「え……っ!？」

見ると、暴走体は何か手のようなものを伸ばして結界を突いている。桐状に細長い触手が容易く結界を割り、中に侵入した。そして、その先端に集中する黒い魔力。

「バリアブレイク……?」

いや、これは……っ!」

数瞬後、僕は黒い光に体を貫かれた。

それは、射撃魔法。

次元世界で最もポピュラーな直射型の射撃魔法。誘導もない。とっさに急所を外す様体をひねりはしたものの、あまり意味はなかった。

「が……っ!げはっ……!」

激痛が身体を走る。

もう結界の維持などできなかつた。

どきりと大地に倒れこむと、ぬるりとした感触が出血量の多さを伝えてきた。

『Serious damage was owed .
The emergency evacuation treatment is executed』

レイジングハートが異常を察知し、自動的に蓄積された予備魔力駆動に切り替わる。

そして現状使える魔法の中から『転移』『回復』『変身』を選択して僕に発動を求めてきた。

インテリジェントデバイスは、ある程度術者の思考の肩代わりをする便利なデバイスだ。

危険地域から『転移』し、『回復』をかけた後に小型の動物に『変身』してエネルギー消費を抑えろと言うことだろう。

よくできた人工知能だ。

今までデバイスは使ってこなかったけど、こいつとならいい関係を気づけるかもしれない。

だけど、だからこそもったいなく思う。

僕なんかじゃなく、もっとうまく使える人に使ってもらったら。

そうしたら、ジュエルシールドも封印できるんじゃないか。

誰か、この世界にいるひと

「…助けて、ください」

転移の光と共に意識が薄れゆくなか、僕はつぶやいた。

「うん？誰か呼んだ？」

聖祥学園殻の帰り道。

今日も今日とてなのは、さすが、私ことアリサ・バニングスの三人での帰り道。

中央を歩くなのはが急に振り返った。

「どうしたの？なのはちゃん」

「……気のせい、かな」

「はぁ……またちゅうにびょー？」

訝しげにきよろきよろと辺りを見るのはと、素直に不思議がるすずか。

そしてまたなのはの奇行に呆れる私。

でも、三者三様の個性を持つ私たち いや、私は誓って普通だ

三人は、妙に馬が合う。

「誰かに呼ばれたような気がしたんだけどね。」

「気のせいだったみたい」

「そう……ねえ、なのはちゃん。」

「おなか空かない？」

「うん？」

「そうだね……少し空いてきたかも」

「じゃあ、アイスクリーム屋さんよってかない？」
「いいわね。」

「なのはもたまには付き合いなさいよ」

空気を呼んだのか、すずかのやや強引な話題転換で一行は一路アイスクリーム屋さんへ向かうことになった。

買い食いは一応戒められている私ではあるが、友達との同伴なら許可が下りている。

なんでも、『時間と友情は金には代えられない』が両親の口癖なのだ。

過去に何があつたか知らないけれど、おかげで『友達同伴』に限り買い食いが許可されている。

食べ盛りの小学三年生にとって、この制度を利用しない手はない。

というわけで、私はすずかの提案に一も二もなく手を上げたのであった。

「……………」

「なのは？なのは聞いている？」

しかし、道中なのはがまたも黙り込んでしまった。

なにやらランドセルの中身に目を落とし、考え込んでいる。

彼女はずっと置き勉だから、中身は空のはずだが。

「…………… やっとお目覚め？」

「待たせてくれるじゃない」

そうかと思うと、今度は何か呟きながら薄く笑う。

また奇行が始まったようだ。

「……………」
「どうしたの？なのはちゃん」

「…はあ」

「さすがが聞き、私が呆れる。
いつものパターンだ。」

「二人ともごめん。
ちよっとやることができちゃった」

「そう言うのが早いか、なのははきびすを返す。」

「今度うちに来て。
うまいものを食べさせてあげる」

「彼女の家は喫茶翠屋という店を経営している。
そのこのシュークリームは絶品で、このあたりでは有名なお店だった。」

「勿論、私が振舞うから。
楽しみにしてて」
「なのはちゃんが……っ！
料理もできるんだ」

「呆れるぐらい素直に喜ぶすずか。
その様子を見ると、なんだかモヤモヤしてしまう。
嫉妬？いや、ありえない。
あんな変人には私なりたくない。
確かに、いろんな才能があるのは認めるけど……。」

「アリサちゃんも。
洋菓子駄目なら和食でもいいよ」
「別に嫌いとは言っていないじゃない」

「じゃあ、シエフお任せで。

アイスクリームよりもうまいものを食べさせてあげる」

そう言い切るなのは、実に自信満々で、
とつても輝いて見えて。

「……あんた。いつも自分中心ね。

そんなんで疲れないの？」

だから、そんな嫌味が口から零れてしまった。
しまったと思つたらもう遅かった。

さすが、目を見開いてびっくりしている。

「アリサちゃん……っ!？」

失言は私の業なんだろうか。

あの日　二人とあった日も、たしか私の失言が発端だった。

「あ……その、ごめ　」

咄嗟に謝ろうとした私に、なのはは背を向けた。

「おばあちゃんが言っていたの」

そして、天を指差す。あの日のように。

「世界は自分を中心に回っている。

……そう思つたほうが楽しいってね」

そして呆れるほどに

なのはは真っ直ぐな目でそう言い切った。

「じゃあ、二人ともまた明日」

言うが早いのか、かなりの速度で駆け出してゆくのは。

彼女はなんでも家が道場もやっているそうで、剣術だかなんだかを
幼い頃から学んでいるそうだ。

運動神経抜群な上、何をやらせてもうまくこなす。

それが、高町なのはという人間だった。

「自分は世界の中心」と宣言するだけはある、ってことだろうか。
それに比べて私は

「はあ………」

駆けてゆく背中を見送りながら、私は深いため息をついたのだった。

0話（後書き）

『俺様』魔法少女、始まります。
目標：背中で語るなのはさん

01話

七年前のあの日。

宇宙がちっぽけな落し物をしたせいで、わたしは ひとりぼっちになった。

海鳴の町は、瓦礫の山になって……わたしの心にも、ちっぽけな穴が開いた。

でも、宇宙の落し物は 　それだけじゃなかったんだ。

天の道を往き、総てを司る女

『A小隊、3時方向に前進、フォーメーション。』

『B小隊は正面から侵入』

『了解』

黒ずくめの男達が、夜の倉庫で動いていた。

彼らは手に黒い杖 　　デバイスを持ち、緊張した面持ちであたりを搜索する。

『A小隊、ポイント2、クリア。』

『魔力障害なし』

『B小隊、A小隊を援護』

彼らの黒装は、バリアジャケットと呼ばれる特殊な防護服である。魔力や弾丸を弾く魔法の鎧だ。

『……警備員の遺体を発見』

『……状態は？』

『白い粘液のようなものに包まれている。』

『人がやったものとは考え難い』

『……全チーム、囲め』

『了解』

その様子をモニターしているのは、一台の大きな白いワゴンだった。見た目はただの車だが、その内部は各種通信機器が納められた指揮中枢である。

車内には、2つの名称でこの部隊を表す模様が印字されていた。

『時空管理局』

総ての次元を管理し、守護することを目的とした組織。そして、

『ZECT』

昆虫の羽を模した、文様があった。

何の前触れもなく、バコン、と天井が破られた。

直下にいた二人は、何もできずに、『それ』の下敷きになる。
『それ』は長くしなる鞭のような両手を振り上げ、二人に突き刺した。

「がっ………！」

「………ぐはっ！」

銃弾をも弾くはずのバリアジャケットを容易く貫通し、二人は一瞬でその生命の火を散らされた。

その『怪物』は、顔面が人の髑髏のような形をしている。全身は緑色で、体型は巨大なノミに酷似していた。

『魔力反応、固有波形確認。』

”ワーム”です！」

「全チーム。攻撃態勢に入れ」

黒づくめの男達は、一斉に攻撃を開始した。

手に持つ杖を構え、射撃魔法と砲撃魔法を集中させる。その物量は圧倒的だ。

通常の武装局員では、こっちはいかなかっただろう。

なぜなら、彼らは皆時空管理局の制定する『A』ランク魔導師で構成されている。

時空管理局、特務任務部隊『ZECT』。
それが彼らの小隊であった。

しかし。

『グルルウウイ………』

唸り声と共に、怪物は弾幕を振り切って突進してきた。その身体に、ダメージは少しも見られない。

「ぐわっ……！」

「助け……！」

一人、また一人と怪物に潰される男達。

「落ち着け。」

離れて顔面に攻撃を集中しろ」

乱れ始めた戦局を打破すべく、指示が飛ぶ。

男達は一旦離れて隊列を整えると、一斉に射撃魔法を集中させた。

さしもの怪物もこれには耐えられず、身体を乱打する魔法に身動きが取れない。

いけるか、と思われたとき、

怪物が2体、3体と現れた。

「ワームが増えました」

「……」

戦いは再び混乱の様相を呈した。

あまりの乱戦に指示も出せずにいると、一匹のワームが妙な動きをはじめた。

身体を赤く染め、苦しげにその身をうねらせている。

「ガンマレベル、95Kより上昇。

グラビティレベル、240。」

……脱皮します！」

外側の殻を脱ぎ捨て、そのワームは斑模様の『成虫』へと変わった。その姿は、先ほどよりも人に近い。

しかし、蜘蛛のような顔面と肩から伸びる触手があった。

「……クロツクアップする前に倒せ」

苦々しげに出された指示により、男達は攻撃を集中させた。

射撃魔法、砲撃魔法が入り乱れる。

誰が出したのか、無数のスフィアが生み出され毎分2000発を超える直射魔法がワームを叩いた。

だが、次の瞬間。

ワームが消えた。

そして、隊列を組んでいた男達が、次々に吹き飛ばされる。

「なっ……！！」

認識外の速度で、一人一人。

確実に潰されてゆく。

それを見た指揮車の男は、即座に判断した。

「待避だ、待避しろ」

しかし、その指示は遅すぎた。

男達は弾幕を張るが、まるで歯牙にかけない速度で男達は吹き飛ばされる。

男達は多大な犠牲を払いながら、スモークを張りつつ後退する。戦いは、完全に彼らの敗北に終わった。

「ワームの消息、途絶えました。

負傷者6、死亡……21」

報告を受けた男は、嘆息した。

黒ずくめの男達、『ゼクトルーパー』達は疲れきった様子で座り込んでいる。

「……………」

彼らは、時空管理局武装局員の中でも優秀な者を集めた特殊部隊だ。しかしこうもあっさりと敗北するとなると……もはや対抗手段を持つしかない。

あれを、そう、

「マスクドライダーシステム……………」

夜の他張りが落ちた倉庫街に、彼、『クロノ・ハラオウン』の眩きが木霊した。

「報告します！」

そのとき、オペレータが叫んだ。

「山林地区にて新たな魔力反応確認！」

「固有波形……ガンマ、ワームです！」

その報告は、彼らにとって凶報以外の何者でもなかった。すでに部隊は壊滅し、ワームには対抗不可能とわかっている。しかし、ここで見逃せば多大な被害が出るだろう。

みな視線が集まっているのを、クロノは感じていた。彼の一存で、皆の生死が決まると分かっているからだ。

「……全チーム、残存部隊は急行しろ。

ただし、絶対に個人で手を出すな。

距離をとり、固まって、市街地外れの廃棄ビルにおびき寄せさせるんだ」

「……了解っ！」

皆が、呪縛から解き放たれたように動き出す。

そして、クロノは指揮車に戻ると、本部に通信を繋げた。そこに映っているのは、彼の恩師とも言うべき人。ギル・グレアム提督であった。

「……提督、お願いがあります」

『何だね』

「僕に、マスクドライバーシステムを使わせてください」
『駄目だ』

無理と分かっていたが、即答の返事にクロノはたじろいだ。

「でも……このままじゃ悪戯に被害が広がるだけですっ！

もう、この力に頼るしかないんですっ！！

お願いしますっ！……！」

『ベルトをするべき資格者は、いずれ本部から送られる。』

そのときまで待て』

「それは何時なんですかっ！」

今起きている事態は、どうなっても構わないって仰るんですかっ！」

激昂するままに、コンソールを叩きつけるクロノ。

しかし、画面の中の提督は眉一つ動かすことはなかった。

『……健闘を祈る』

「提督、話はまだ……提督っ！」

ぶつんと、通信は一方的に断ち切られた。

電子機器が稼動する音しか響かない静寂の中、クロノは後ろを振り返った。

そこには厳重に保管された金庫がある。

魔導式と機械式の3重ロックを開けると、そのなかには『ライダーベルト』が入っていた。

「た、隊長。」

まだ本部の許可が下りていませんっ！」

「……だがこれ以上の放置はできない」

ベルトをしっかり握り締め、クロノは視線を山中へ向けた。

今度こそ、今度こそ。

『こんなはずじゃなかった』未来を変えてみせる。

このマスクドライバーシステムで。

決意を秘め、彼は飛び出していった。

黒い獣が猛っていた。

自らに宿った奇跡を確かめるように、それは辺りかまわず暴れ狂う。森の中だからこそそれは人の目には触れないが、いずれ人里に騒ぎを起こすだろう。

それは、『彼女』にとって、許容でないことだった。

「アイスクリームを断つて来てみれば……
とんだはずれを引いたみたいね」

灰色の作務衣に雪駄、ランドセルを担いだ少女が零す。

「最後の皿一枚をしまうまでが料理。
後始末のできない者は料理人じゃない」

少女は赤いランドセルから、一本の小刀を取り出す。
いまだ鞘を抜いていないにも関わらず、その姿には小学生とも思えぬ殺気が滲む。

黒い獣は思わぬ敵の出現に驚き、恐れ、そして喜んだ。

跳躍。

木々を縦横に飛び回る膂力は、すでに野生の獣すら大きく上回る。

鉄板すら軽々と突き破る豪腕が、振るわれた。

火花が散る。

少女は、恐れずしてその一撃を見抜き、そして小刀で捌く。獣の強大すぎる膂力は、自らの体勢を大きく崩す。

その隙を見逃さず、少女は逆手に持ち替えた小刀を振るう。

二戟、三戟。

両目と口腔。

人外の獣といえど、その分かり易い急所に振るわれた剣戟は獣を怯ませた。

だが、それだけだ。

傷はたちまち塞がり、更に怒りを滲ませた咆哮が少女の耳朵を打つ。

「固いな。」

やはり私には剣の才はないか」

少女は、回想する。

おそらく、祖母ならば今の三合で終わっていたであろう。

剣の才なき自分では、そこまでの力は出せない。

でも

「おばあちゃんが言っていた」

少女は立ち上がり、もう一度逆手に小刀を構える。

獣と、そして自らに言い聞かせるように彼女は独白する。

「お前に剣の才はない。」

でも、お前にはもつと別の、大きな道が見える。
薄汚れた『不破』ではなく、光り輝く『天』への道が」

獣が奔る。

怒りに任せての一撃か、先ほどよりも読み易い一撃。

しかしその分強く、速い。

小学生という身体では到底御しえぬ一撃。

逸らそうとして合わせた小刀は弾け飛び、重い一撃は少女の身体を木へ叩き付けた。

「……私は天の道を往く。

ならこの程度、軽々と飛び越えねばならない」

とつさに取った受身で、なんとか重症は免れる。

しかし、一撃を受けた脇腹からは激痛が走る。

木に激突した際に脳が揺さぶられたのか、眩暈が少女の足元をふらつかせる。

それでも、彼女の瞳は強く獣を見据える。

その中に迷いはない。

黒い獣が再び奔る。

それは先ほどと同じ、力任せの怒りの一撃。

「同じ手は、食わないよ」

先ほどよりも速いタイミングで身を逸らし、見事にその一撃を避わず少女。

その勢いを殺さぬまま、大地をしっかりと踏み抜き、腰の力で身をひねる。

獣に、少女の渾身の回し蹴りが入った。

走る勢いそのままに、今度は獣が木に衝突する。

「……………軽いね。」

やはりダメージは通らないか」

獣は更に身を滾らせ、少女に振り返る。

「なら、通るまで押し通す。」

それだけね」

不死身の怪物に、生身の少女。

たとえ武術の心得があるとして、状況は絶望的だった。

攻撃は通らず、また怪物は怪力。

今は持ち前の気力と身体能力で攻撃を避わしているが、

少女の集中力が切れたときが、戦いの終わりだろう。

絶望的な未来しか見えぬ状況で、しかし彼女は諦めなかった。

自分は祖母を信じている。

祖母が言ったことを信じている。

なら、天の道は開く。

必ず、運命は私の味方をする。

「お前の力が勝つか、私の運命が勝つか。

これは、そういう戦いだ」

少女は、拳を構える。

黒い獣が、再びその牙を少女に向けた。

助けが入ったのは、その数分後だった。
急に怪物は鼻をひくひくさせると、大きく跳躍した。

木々を渡り、あっという間に視界から消え去る。

「……逃げた？」

「いや」

危険を感じ、なのはは手近な茂みに身を隠す。
そこに、黒尽くめの男達が姿を現した。

手に妙な杖を持ち、警戒しながら小走りに森を駆ける者達。
どうやら、怪物はこいつらを見つけて逃げたのだろう。

男達は警戒しているが、周りの茂みには注意を払わずにそのまま通り過ぎる。

彼らは真っ直ぐ怪物の逃げた先を追う。

迷うそぶりがないのは、何らかの手段で怪物の居場所を察知しているからだろうか。

「だとしたら、好都合だな」

なのはは、投げ捨てたランドセルを拾うと、慎重に彼らの後を追う。
脇腹のダメージが大きかったが、気合でそれを無視する。

だから、ブオン、とランドセルの中から音が響いたのに、気づく事はなかった。

同時刻。

『……助けて、ください』

「今、誰か呼んだ？」

少女　　アリサ・バニングスは奇しくも、昼間になのはがつつぶやいた言葉を口にした。

運命は、もう一人の少女を誘う。

02話

「……今、誰か呼んだ？」

少女　　アリサ・バニングスは奇しくも、昼間になのはがつぶやいた言葉を口にした。

時は19:00。

夕食を済ませ、自室にて寛いでいる時だった。

今日も両親は海外に行っており、屋敷には鮫島しかいない。

鮫島は夕食の後片付けで忙しいだろう。

今私を呼ぶ人間はいない。

テレビやラジオも電源が切られたままだ。

なら

「……誰？誰か呼んだ？」

もう一度繰り返すと、今度は幾分はつきりした声が聞こえた。

『……助けて、ください』

「！……っ」

それは、確かに誰かの助けを呼ぶ声だった。

「あんだ……誰？どこにいるの？」

『僕の声が……聞こえてますか？』

「聞えてるわ。不本意ながらね。」

はやく場所と名前と状況と……あー、もう、とにかく場所を教え

てっ！」

突然現れた不思議な状況……頭の中に響く声。

そして助けを求める声。

まるで漫画やアニメのような状況に、私は動揺し、興奮し、そして恥ずかしくなった。

こういう奇行はなのはの専売特許なのに　となぜか心の中で彼女を責める。

『すぐ近くにいます。大きな家のそばの、林の中？』

「はつきりしなさい！」

大きな家って、まさかうちのこと？」

自慢ではないが、うちほど大きな家はさすがの家ぐらいしかない。

『わかりません、でも貴女がすぐ近く

そう、すぐ近くにいることは分かります』

「なによそれ、ワケわかんないっ！」

怒鳴りつつも、私は自室をこそっと抜け出した。

鮫島の様子を後ろから伺うと、いまだ皿洗いに没頭している様子が見える。

まだしばらくは大丈夫だろう。

「鮫島、ゴメン」

両手で拝みながら、そっと玄関を開ける。

外は、すでに夜の帳が落ちていた。

ほう、と吐く息が白く曇る。

冬の気配が迫る中、私は『声』のするほうへ向かった。

『こつちです……そう、そこを左へ向かって』

「何で分かるのよ。」

「どこかで私のこと見てんの?」

『申し訳ありません。』

貴女の魔力を逆探知させてもらっています。

違法行為は重々承知していますが、緊急時なのでどうか今だけは見逃してください。』

「魔力って……。」

うん。そう、か……あはは、魔法ね。魔法の力で私を見つけたっ

て?」

『はい。』

この件が終わったら何でもいたします。

だから、助けてください。

貴女の力が必要なんです。』

『声』のするほうに歩いていくと、それは私の屋敷を望む裏山の山中であった。

そこにいたのは人ではなかった。

「フェレット……?」

細長い身体に黄色い毛並みの動物。

イタチやオコジョ、フェレットの類に見えたが、正確な種は分からない。

赤い石を銜えたその動物は、自らを別世界からの人間だと語った。

「僕の名前はユーノ。」

ユーノ・スクライアと言います」

「私はアリサ・バニングス。」

……で、あんたは私に何してほしいわけ？」

内心は疑心と興奮でいっぱいだった。

動物が喋ったり、頭の中に声が聞えてきたり。

悟らせまいとしているけど、少し顔が火照っているかもしれない。

「僕が発掘したロストロギア ジュエルシードがこの町にはら撒かれました。」

これは『願い』に反応して奇跡を起こす魔道器です。

とても危険なものです。

すでに一個が現地の動物を取り込んで暴走しています」

「……」

「また、これを放置した場合、

最悪この世界ごと次元を引き裂かれて消滅する恐れがあります」

ユーノが語るのは、普段ならば鼻で笑ってしかるべきものだった。

魔道器？暴走？世界がなくなる？

今時小学生も騙せない様な、三文漫画のストーリーだ。

だからこそ私は

「面白いじゃない」

そう言つて、笑った。

「で、あるんでしょ？」

「え？」

「それを何とかする方法が。」

「そのために私を呼んだんでしょ？」

その力強い笑みに、一瞬見とれたユーノは慌てて言葉を紡いだ。

「あ……そうです。」

貴女にこれを　魔法の力を」

それは赤い石だった。

「これは魔法の使用を補助するデバイスです。」

これを使えば、貴女も魔法が使えるはずです。」

これで　ジュエルシードを封印してください」

「……そう。それが」

高鳴る胸を押さえ、それ　レイジングハートを見る。

透き通った赤い石。

受け取ると、微かにどくんと動いた気がした。

「今は予備魔力を使い果たして、スリープモードに入ってます。」

僕も魔力が回復してないから……アリサが回復させてください」

「どうやればいいの？」

「胸の内にある魔力……核のようなものを意識して。」

それをレイジングハートに重ねるイメージ、かな」

「……こ、ことう？」

その瞬間、赤い宝石に文字が流れた。

『The charge begins』

そして、英語の音声が流れた。

「喋った！」

「大丈夫、魔力がレイジングハートに流れ込むのを確認したよ。
間違いなく、君は魔力を持っている」
「そ、そう」

こっぴどかしいっいたらありやしない。
でも、悪い気分ではなかった。

「じゃあアリサ。起動のための魔力は10分程度でチャージできる。
その間に奴のところへ移動しよう」

「『奴』って？」

「ジユエルシード暴走体。
今またどこかで暴れているはず」

先ほどとは別の意味で、心臓が高鳴った。
そうだ、私は、そいつと戦わなくちゃいけない……。

「……」

「大まかな場所は魔力サーチで分かるから、
僕についてきて。」

くれぐれも僕が『いい』と言つまで、何もしないでね」

私は戦えるのだろうか。

今までの興奮が、さあつと冷めていくような感じを受けていた。

「僕が奴を何とか押さえ込むから、

奴が動けなくなったらアリサは封印をお願い」

「ユーノが……？」

そんなことできるの？」

「うん……。」

僕は魔力が少ないから封印はできないけど、動きを抑えるぐらい

は大丈夫だよ」

「ふーん……分かったわ」

私は少し気になっていた。

ずっと私の目を見て喋っていたユーノが、そのときだけ目を逸らしていたから。

もしかしたらこのフェレット、よくないことを考えているのかもしれない。

「じゃあ……」。

行こうか。よろしく、アリサ」

「よろしくね、ユーノ」

少しだけ冷えてきた空気の中、私の肩に乗るフェレットはとても暖かかった。

天の道を往き、総てを司る女

市街地外れにある、廃墟ビル。

ここでは、今黒づくめの男達と黒い獣との死闘の後が広がっていた。

それは、絨毯爆撃を受けたかのような地形だった。

木々はなぎ倒され、所々には力尽きた隊員の姿も見えた。

「……遅くなった。」

状況は？」

僕、『クロノ・ハラオウン』は一瞬だけ屍に向けて瞑目し、生き残りの隊員に聞いた。

『追い込みは完了しました。』

……後は、お願いします』

「ありがとう。」

後は安全距離から結界の維持に尽力してくれ」

『了解。』

……しかし人員の損耗が激しく、周囲総てを覆う結界はできません』

Aランク魔導師の防御魔法「プロテクション」すら易々と引き裂く
獣。

廃ビルに追い込むまでに、また多大な犠牲が発生してしまった。

そのため、奴を閉じ込められるレベルの結界はもはや無理。

できたとしても虫食いだらけのものになってしまっだろう、とこのことだった。

「止むを得ないな。」

市街地方面を集中して結界を展開してくれ」

『了解』

このワームを追い込むために、また半数の死傷者を出した。

どの道この戦いが終われば、ZECTは戦力の再編に追われるだろう。

だが、今は

「……奴を、倒す」

手にはベルト、そしてデバイス『S2U』。
後方で結界が広がるのを感じつつ、僕は一気に突入した。

私とユーノがたどり着いたのは、市街地外れにある廃ビルだった。
妙に寒々しい場所に、ぼつんと建てられたビルはどうにも私を落ち着かなくさせた。

あたり一面は穴ぼこ……木もなぎ倒されている。
まるで強力な台風にでもあったかのような惨状だった。
そんな中、肩に乗るユーノがぼつんと呟いた。

「え、まさか時空管理局……？」

走る速度は緩めずに、ユーノに訊く。

「何？時空管理局って」

「え、うん。」

次元世界の犯罪者を取り締まる警察みたいなもの、かな」

ユーノの話では、多数の魔導師を擁するその組織。

当初ここに連絡を取ろうとしたそうだけど、次元が遠すぎて伝えられなかったそうだ。

「ふーん……。」

で、そいつらがどうしたの？」

「うん、なんだかわからないけど……。」

ここにいてみたい」

啞然としているユーノに、私はなぜか少しイライラした。

「……そうなの？」

「うん。」

ちよっと待って」

そう言うと、ユーノは目を閉じて何事かを呟いた。

その瞬間。

きいん、と何か波のようなものが広がるのを感じた。

「なに？これ」

「……探索魔法。」

魔力をもつ存在に反応して反射する魔力の波、みたいなものかな
「私のときみたいに話しかければいいんじゃないの？」

「……そうするべき、なんだろうけどね」

言って、ユーノは顔を顰めた。

元も、フェレットが人間のように顔を顰めることはできない。
あくまでニュアンスの問題なのだ。

「何か、あやしい。」

この管理外世界に、時空管理局が関わってるって話は聞いたこと

がない」

「……」

「考えたくないけど……」。

次元犯罪者……達なのかも」

ユーノ曰く、この世界は『管理外世界』と言うらしい。

次元を渡る技術を持つ『時空管理局』の管理外にあるから管理外世界。

……うん。なんとなくカチンと来る響きなのは置いておいて。

とにかく、管理外世界において魔法を使用することは違法なんだそ
うだ。

「そう。で、この有様はその魔法によるものってわけ？」

「うん。」

ここで大規模な魔法戦が行われたのは間違いない」

んで、目の前の惨状に目を移すと。

これみんな魔法による爪痕なんだって。

「……なんとなく、小さいお子様の夢と希望をぶち壊すような話ね」

「魔法にどういふ幻想を抱いていたのかは知らないけど。」

悪いけど……現実はこちらの有様だよ」

私自身の感想はともかく、これがジュエルシードモンスターによる被害ならば捨ては置けない。

「さて、じゃーちゃっちゃと行きましょうか」

「……え？」

いや、どうも雲行きが怪しいからもう少し様子を見てから

「

とたんに及び腰になったユーノの首を絞める。

「い・く・の！」

こっちは鮫島に無断でしかもパジャマに上着一枚なのっ！！

寒いのに、暗いのに、怖いのにっ！！」

「ひっ！？」

き………キユウツッ！」

ぐるぐるに目を回したユーノに、私は決断を突きつけた。

「行くの？」

………行かないの？」

「行かない」の辺りできゅっと指に力を入れると、ユーノはこくこくと首を縦に振った。

「それは行かないってこと？」

「行きます行きます………っ！」

一緒に行かさせて頂きますっ！！」

「よろしい」

首を離してやると、ユーノは地面にへたり込んでゼーハー言った。

私たちは、こうして森を抜けて廃ビルへ向かった。

廃ビルはどうしてこんな閑散とした地に建てようと思ったのか疑問なほど大きい。

こんなところに商社ビルなんか建てないだろうから、観光目的のホテルだろうか。

それにしてもプールやテニスコートなどのレジャー施設は一切見当たらない。

まるで用途のわからない不気味なビルだ。
だからだろうか。

さつきからなぜか震えがとまらない。

ジュエルシードモンスターとやらはまだ影も形もないのだけれど。
戦いの前に、武者震いって奴？

「大丈夫、アリサ？」

「平気よ。」

それよりアンタこそちゃんと相手を探しなさいよ

言いつつ、ビルのエントランスに到着した。

ここからは、屋内となる。

中は当然証明もなく、薄暗い。

物陰からひょいっと何か出てきそうな……そんな雰囲気。

「……行くわよ」

「うん」

二人とも言葉少なめなのが、緊張度合いを示していた。

正面の粉々に粉碎された自動ドアを潜ると、そこはいかにもなロビ
ーだった。

平時は大量のお客を迎えるためのソファアが全部ひっくり返ってい
る。

ふとカウンターに目を向けると、書類や割れた食器、グラス。
あれやこれやが散乱している。

「……アリサ、あっちだ」

ユーノの声に振り向くと、『非常階段』の標識が目に入った。

「あつちから魔力反応がする……。
でも、なんでだろう、小さいな」

ユーノの訝しがる声。

私は答えずに、そちらに足を向けた。

「あ……慎重に。

気をつけて」

「分かつてるわよ。」

……でも、なんだかね。『これ』は大丈夫だと思うの」

答えになってない答えを返し、私は進む。

非常階段へのドアに手をかけ、一思いに開く。

赤い照明に一瞬目が眩む。

しばらくして目が慣れると、そこにあつたのは

「……………っ!？」

階段に横たわる、少年の死体だった。

手に杖のようなものを持っている。

肩口から袈裟にぱっくりとのぞく傷口が印象的だった。

夥しい血液が階段を伝ってぼたりぼたりと垂れて来る。

少年は黒い服なので目立たないが、明るいところで見るとかなりスプラッターな光景なのだろう。

啞然として動けない私に代わり、動いたのはユーノだった。

普段はぼけぼけな癖に、こんな時は素早いのかも知れない。

「まだ息はある。」

「天神の癒しと守りを与えよ」

きいん、と少年を中心に、球状のドームが発生した。

地面には魔方阵らしきものが描かれている。

はじめて見る、目に見える形での魔法だった。

「……………なにをしたの？」

「回復と防御。」

「この中にいれば傷の回復をしながら攻撃から守ってくれる」

「ふーん……………便利なもんね」

言うが早いか、うう、と少年から呻きが聞こえた。

本当に便利だ、これ。

「君……………たちは……………」

「大丈夫ですか？」

「ここで何があつたんですか？」

しばらく空ろな視線で私たちを見た少年は、やがて私に目を留めた。

「君は……………ZECT隊員なのか……………？」

「ぜくと……………？」

「い、いえ。違います」

「じゃあ……………どうしてここ……………！」

そこまで言っつて、ゲホゲホと血を吐いた。

魔法で傷は治つても、血の補充まではしてくれないかもしれない、

と不安になった。

「ユーノ、これで治るんでしょうね？」

「完全には、無理。」

基本的に自己治療能力を高めるものだから、輸血と栄養の補充がないと完治しないんだ」

あっさりと言うユーノに、ムカツと腹が立った。

「駄目じゃないっ！そんなこと先に言いなさいよ。」

「さあ、しゃべってないでさっさと病院に行くわよっ！」

少年を担ごうとしたが、当の本人に止められた。

「君は……魔導師か？」

少年の目は私の胸元に注がれていた。

一瞬目の前が真っ赤になったが、そこにあるものを思い出して冷静になった。

「……そうよ。勘違いさせないでよね」

「……？」

「まあ……いい、ならば、これを持って行け」

がちやりと何かを腰から外すと、少年は『それ』を私に渡した。銀色の、ごついベルトだった。

「……なに？これ」

「ライダーベルト……。」

「僕達の、希望だ」

少年は朦朧としながら、それを語った。

「……ワームと呼ばれる敵性生物に対して、僕達魔導師は今まで対抗する術がなかった。

人の認識外で行動する生物に対して魔力なんか無意味だ。

でも、ようやく。

それに対抗する術が開発された」

少年は勝手に私の腰に手を回し、それを取り付けた。

え、ちょ、困る。これかわいくないし。」

「マスクドライバーシステム。

ワームと同じ領域に立つために作られたもの。

……君のインテリジェントデバイスなら使いこなせるだろう」

結界の維持に手を焼いていたユーノが、口を挟んだ。

「インテリジェントデバイスでないと駄目なんですか？」

「ストレージではタスクを処理しきれない。

……僕のS2Uでは駄目だった」

語る少年の手には、黒い杖。

頭の部分にはベルのような装飾が乗っていたけれど、軋み、ひび割れている。

「……そのシステムはデバイスの機能追加オプション、と言つこと
でいいんですか？」

「……その認識で間違つてはいない。

ただ、そのシステムは自分で資格者を選定する」

「え？」

それじゃあ、わたしが付けてたって……」

困惑するわたしに、少年は必死の表情で告げた。

「勿論君が選ばれない可能性もある。

……でも、このままではワームに奪われる危険もある」

「……まさか」

「それを持って、どこでもいい。管理局に保護を受けてくれ。みすみす……ワームなんかに奪われでもしたら……っ……っ……っ！」

言い、また咳き込む少年。

喀血量はかなりのものだ。顔色が一気に青ざめてゆく。

このままでは本気でまずいかもしれない。

「しっかりしてくださいっ！」

……アリサ、こうなったら一旦引いて応援を

「嫌よ」

え？と不思議がるユーノを尻目に。

私はなんだか自分でもよく分からない衝動に突き動かされていた。

「そのワームってのは、管理局とか言うお巡りさんでも、どうしようもないものなんでしょう？」

「そつだ。だから早くどこかに保護を

「その人が言っただじゃない。

あれに対抗する手段はこれしかないんだって。

つまり、私が逃げても、その間誰かが必ず犠牲になるのよ」

私の言葉と表情に、ユーノはどうやら感づいたみたいだった。

だけでもう遅い。

私はもう、覚悟完了してしまったのだから。

「私が、ワームを倒すわ」

『It searches for a specified range』

私の願いに答え、レイジングハートが動く。さつき見たユーノの探索魔法を使う。

きいん、と赤い波が広がるイメージが浮かぶ。これが探索魔法か。

「……屋上、ね」

そこに浮かび上がる、魔力を持つ異形の姿。それは非常階段を昇った先にあった。

「安心なさい。

必ず私が倒してあげる」

「君は、君の……名前は……」

少年が呻くように言う。

私は彼に笑いかけながら言った。

「アリサ・バニングスよ。

あなたこそお名前は？」

訊き返すと、少年は答えた。

「……クロノ、ハラオウン……だ。
時空管理局…… 特務部隊 ZECT…… 第1チーム、隊長……」

朦朧としているのか、ぎこちない口調で少年は答えた。
私が上着を少年にかけてあげると、すうつと眠りに落ちていった。

「さあ、行くわよユーノ。」

ユーノはじつと私を見つめる。
いいとも悪いとも言わない。

「……ここには、確かにジュエルシード反応がある。
状況から見て、ワームが持っている可能性が高い」

「……そうね」
「危険な能力を持つワームに、大きな魔力を秘めたロストログア。
さっきは言わなかったけど、その人が負けたのは多分……ジュエ
ルシードのせいだよ」

クロノの意識がないのを確認してから、ユーノは言った。

「……つまり、そのシステムを使えたとしても……。
負ける可能性が高い」

そして、その可能性を口にした。

「そんな相手に……戦いを挑むの？」
「……っ！」

忘れていた恐怖を、呼び戻されたようだった。

ぞくりと背筋が泡立つ。
でも

「でも……」

だっ、と走り出す。
屋上へ向けて。

「でも……」

かんかんかん、と小気味いい音を立てて階を上がる。
恐怖を忘れようと、がむしゃらに身体を動かしているだけかもしれない。

「アリサっ!」

ユーノの制止も振り切り、私は屋上への扉を開いた。
月夜の空は高く澄んでいて、吐く白い息が満月を霞ませた。

そこに、『奴』がいた。

黒く、猛る黒い獣。

赤い異形の瞳がぎょろりとこちらを向く。
手に持っていた、管理局員と思しき骸をどしゃりと捨てた。

「グルルルウウウ」

低い唸り声の威嚇に、思わず足がすくむ。
でも、私はやらなきゃいけない。やらないと

パパ、ママは海外だから大丈夫だろう。
でも鯨島、それにすずか達は危ない。
なら

「やらせるわけには、いかないの……っ！」

叫び、右手を天に伸ばす。

「来なさいっ！」

カブトゼクターっ！！」

瞬間、月が滲んだ。

空間を裂き、一匹の赤いカブトムシが現れた。

これこそが、マスクドライダーシステムの中核。

『ゼクター』と呼ばれる虫型のデバイス強化オプションである。

インテリジェントデバイスと同じくAIを搭載しており、擬似リンカーコアによる単独魔法行使も可能。

術者が念じればどこにいても次元転移魔法により、駆けつけることができる。

「……っで、ええ！？」

飛んでくるカブトゼクターを掴もうとして、つんのめる。

カブトゼクターは、私の手前で急反転した。

そのままの勢いでワームに一撃体当たりを入れると、急上昇し給水塔の先に向かう。

その先の、人影に

「あ、アンタは……」

カブトゼクターは、人影の右手に収まった。
ここが、私の居場所であると言っかのように。

「選ばれし者は、私だ」

月を背負い、『高町なのは』は言った。

その腰には、ライダーベルト。

アリサがしているものと、まったく同じデザインである。

「……ま、待ちなさいっ！

どうしてなの……っ！」

答えず、なのははカブトゼクターを腰に装着した。

「変身」

『Henshin』

ゼクターから音声が流れ、光と膨大な魔力が噴出した。

「きゃあっ！」

暴力的な魔力は、突風のごとく私に襲い掛かってきた。

私は木の葉のように吹き飛ばされ、頭を強かに打ちつけた。

まずい、と思うまもなく意識に霞がかかってくる。

朦朧とする意識の中、なのはの身体が赤と白の装甲に覆われてゆく
のを見つめ続けていた……。

02話（後書き）

アツリーサの活躍にご期待ください。

「選ばれし者は、私だ」

月を背負い、『高町なのは』は言った。

その腰には、ライダーベルト。

アリスがしているものと、まったく同じデザインである。

「……ま、待ちなさいっ！」

どうしてなのはが……っ！」

アリスの問いには答えず、なのははカブトゼクターを腰に装着した。

「変身」

『Henshin』

ゼクターから音声が流れ、光と膨大な魔力が噴出した。

その輝きは、ただただ圧巻。

静かな夜空を引き裂き、『太陽』が現出したかのような光景だった。

その輝きの中、なのはの身体は赤と白の装甲に覆われてゆく。

黒装束のZECT隊員達のような『服』ではない。

メタリックな輝きを放つ『装甲』である。

白い胸甲と頭部。

そして、顔面を大きく縁取る青い複眼が印象的である。

額に取り付けられたV字の装飾は、どこか鎧兜を思い起こさせる姿だった。

「……高いな」

なのは カブトは、以前よりも高くなった視界から屋上を見渡した。

その身体は、大きな成長を遂げていた。

身長は優に160センチオーバー。

成人男性並の身長になっていた。

だが、それはなのはが急激に成長したわけではない。

なのははまだ知らない事であったが、その鎧は『ヒヒイロノカネ』
と言われる魔力伝導素材で作られた装甲である。

純粋な魔力で構成する魔導師の『バリアジャケット』では不足する
防御力を補うために、ZECTが独自に開発した新素材『ヒヒイロ
ノカネ』。

この金属は、魔力で励起させると分子間力を数倍に引き上げる性質
を持つ。

単純な魔力のみであるバリアジャケットを遥かに超える防御力を獲
得出来るのだ。

だが、勿論欠点もある。

単純に金属である故に、服のような柔軟性がないこと。

バリアジャケットならばどのような身長、体格に合わせたサイズも
思いのままだ。

だが、金属ではそうはいかない。

あらかじめ設定された、身長・体格から容易に変更できないのだ。だがそれでは使うほうが困ってしまう。必ずしも、望む体格の者が資格者であることなどありえないのだから。

そして、その問題の回答が、今のカブトであった。

「成長したのか？」

「……いや、そう見えているだけか」

ぐっと握り締めるこぶしは、最早小学生のそれではない。

しかし、この姿はあくまで『システムに適合できる身長・体格』になる、と言う『未来』の姿を映しているだけ。あくまでなのはの身体は小学三年生のままだ。

では、なぜこんなことができるのか。

それはカブトゼクターが放つ『タキオン粒子』が『未来』の身体情報を写し取っているからだ。

光速を超える速度で運動するタキオン粒子は、時間を越える。

未来から放たれたタキオン粒子は、光速を超え過去へと向かう。

『未来』のなのはの身体情報を受け取り、上書きすることで擬似的にカブトは18才の身体となったのだ。

『グルルルウウウ………』

突然の展開に、困惑したように獣が呻く。

その獣に向け、構えずカブトは一步踏み出した。

カブトは、この身に宿る魔力をしっかりと知覚する。今までは僅かしか感じ取れなかった力だ。

それが今、はつきりと感じ取れる。

相手との差も、それが唯一無二ものである事も。

「さあ。

太陽の輝きを教えてやる」

そう告げ、カブトは給水塔からその身を躍らせた。

天の道を往き、総てを司る女

着地したカブトに、先手を取ったのは黒い獣だった。

先ほどの困惑もいざ知らず、先の戦いの再現のような重く、速い右鉤爪の一撃を打ち込む。

その速さは更に冴え渡り、既に獣と言うよりは弾丸のような突進。

それに対し、カブトは両手を下げ、構えすら取っていない。

狙い変わらず青い複眼にその鉤爪が当たると思った瞬間

カブト

は掻き消えた。
素早く上体を沈ませ、獣の右外側に躍り出るとそのまま肩を掴んで足払いをかけたのだ。

勢いの付いてた獣は、面白いようにくるりと回転して硬い鉄筋コンクリートの地面に身体を打ち据えた。

獣の自重と運動エネルギーは打ち捨てられたビルを鳴動させ、深刻なひび割れを作った。

『グガ……ッ！』

『グルルウウ！！』

廃ビルに深刻なダメージを刻んだ一撃はしかし、獣に対してはあまり効果はなかった。

先ほどと同じく、急速に傷は回復してゆく。

「それが『ジュエルシールド』とやらの効果か、厄介だな。

しかし……」

馬鹿の一つ覚えのような突撃が来るが、これも簡単にいなす。

既に、獣の攻撃は完全にカブトに見切られていた。

「こいつ、本当に『ワーム』か？」

あまりにも、単純すぎる。

威力が大きいとはえ、ZECTとやらがこんな相手に梃子搦るとは思えない。

単なる猪武者など罨にかけてしまえば済む事だ。
なら

「……ッ！！」

殺気を感じ、咄嗟に地面を転がる。
先ほどまでいた場所に、大量の魔力弾が着弾していた。

「お前は……」

「……」

そこには、先ほどまで獣に銜えられていた男が杖を構えて立っていた。

ZECTのマークが付いた、黒装束の男である。

あちこちに裂傷が見えるが、まるで痛みなど存在しないかのように男は無表情だった。

「……お前か。」

『ワーム』は「

告げると。

男は口の端を吊り上げ、『擬態』を解いた。

男の姿は空間に溶け込むように消え去り、緑色のサナギ体ワームが姿を表した。

「最初から『ジュエルシード』は囷だったんだね。」

あの獣に引き寄せられた魔導師に擬態し、仲間を密かに狩り回っていたのか」

通りで、圧倒的に数に勝る奴らが負けるわけだ。と、なのはは理解した。

『ワーム』は、人に『擬態』する。

顔、身体、服、そして記憶でさえも。

『グルルルウウウ』

更に、倒れていた者達が立ち上がり、その身をワームへと変じてゆく。

最初から、複数体のワームにより囲まれていたのだ。

正に、絶体絶命。

しかし、カブトに焦りはなかった。

「丁度いい。」

この姿でどこまでできるか試してやる」

そう告げ、カブトは左手に銃を構えた。

『カブトクナイガン』、ガンモードである。

キシュン、キシュン、と軽い発砲音。

それに対し、威力は絶大であった。

大量の魔力弾を跳ね除けてきたワームの身体に、無数の風穴が開く。悲鳴さえ上げず、一体のワームが爆散した。

更にもう一体。

間髪空けずに連射されるイオンビームはワームを吹き飛ばした。

この兵装は手強いと見たのか、ワーム達が散開してカブトを囲む。そして接近戦にもつれ込もうと各々に飛び込んだ。

「だが甘いね」

カブトはクナイガンをひよいと放り、バレル部を掴む。

すると、今まで銃のグリップエンドであった部分が赤熱した。

『カブトクナイガン』、アックスモードである。

「…………ふっ！」

大振りで突っ込んできたワームを避わずと、その背から唐竹割りにクナイガンを振り下ろした。

ワームは頭から真っ二つになり、やがて爆散。

「どうしたの、こんなもの？」

次々に飛び込んでくるワームを避わしては、一撃を入れてゆく。

魔力と超高温の刃を持つアックスモードの『アバランチブレイク』は一撃でワームを葬る威力を持つ。

大量に居たはずのワームは、徐々にその姿を減らしていった。

『グルルウウ…………ウウーッ!!』

そして、一体にまで減ったワームは終にその身を脱皮させた。

肩から蜘蛛の足のような触手を生やし、より人に近い形になったワーム。

ワーム成虫体、アラクネワームであった。

その姿を見やり、カブトが向き直った瞬間

ワームの姿が消えた。

「…………なにっ!?!」

初めて動揺らしい動揺を示すカブトに、認識外の速度からの攻撃が加わった。

一撃、二撃、三撃。

倒れ伏す事すらままならない速度で、攻撃はカブトの身体を捕らえる。

幸いな事に、カブトの装甲は厚い。

『ヒビイロノカネ』の装甲を持つ『マスクドフォーム』は、コンクリートの壁を粉々に粉砕する攻撃を受けても持ち堪える。だが、完全に衝撃を殺せはしない。

その攻撃は頭を打ち、骨を軋ませ、内臓を揺らした。

更に頭上からの攻撃を受け、ひび割れていた屋上は終に崩壊。大量の建材と共に、階下へと落ちた。

「……なかなかやるね。」

その速度、おばあちゃん以外でお目にかかれるとは思わなかった
「よ」

建材を押し退け、立ち上がるカブト。

相変わらず、構えずにだらりと両手を下げたままである。

「だが、おばあちゃんほどじゃない。」

おばあちゃんなら 「

素早くクナイガンガンモードに持ち返ると、すぐさま乱射した。狙いを付けている訳ではない。

あたり構わず打ち出されるイオンビーム。

しかし、その威力は先ほどより遥かに低い。

なぜなら、今は崩壊の衝撃で噴煙が舞っているから。

空気中の粉塵により拡散し、減衰するイオンビーム。

それは言い換えると、イオン粒子が粉塵に反応しきらきらと輝くことだ。

辺り一面に舞う粉塵が輝き、逆に輝かないものを浮き彫りにさせる。

それは、高速移動を行う物体の巻き起こすトレイル（航跡）など。

視認できない移動速度で移動したとしても、『移動した』跡は見る
ことができる。

ならば、後は『読み』である。

こいつならここから攻める、と言う読み。

「　　こんな簡単な罠に掛かったりはしない」

カブトはクナイガンをストックスモードにし、逆手に持ち変える。

そして、思い切り後ろへと突き出した。

『グギヤアアアアアアッ！！』

果たして、ワームの胸部にはクナイガンが突き刺さっていた。

カブトの『背後から来る』と言う予想は、現実のものとなった。

それは致命傷となり、ワームは爆散。

フロアに佇むカブトに、久方ぶりの静寂が舞い戻ってきた。

だが、すぐさまその静寂は破られる。

どこかどか、と黒装束の男達が踏み込んできたのだ。
先頭には、肩を貸された格好の若い男がいた。

顔色が悪いが、男達の誰よりも腕が立つことをカブトは見抜いた。

「やるじゃないか、アリサ」

その男は、カブトを見るなりそう言った。
しかし、勿論カブトは答えない。

「……お前、アリサじゃないな」

不審に思った男は、僅かにカブトの発する魔力光を見て別人と気づいたようだった。

男達が散開し、カブトを包囲にかかる。

しかし、その動きは鈍い。

彼らは先の戦いで消耗しきっており、魔力が残っていない。
普段魔法で戦う彼らにとって、それは致命的な隙であった。

カブトは迷わず駆けると、窓ガラスを割って外へと躍り出た。

3階の高さがあったが、マスクドアーマーを持つカブトには何の問題もない高さである。

綺麗に着地すると、そのまま森林中への駆けて行った。

男達は追おうとするが、その機敏に動きにまったく付いていけなか

った。

「……ターゲット、ロスト」

その報告と同時に、男　クロノは倒れているアリサを見つけた。手を口に当て呼吸を確認すると、ちゃんと息はある。ただ単に気絶しているだけのようだ。

「……この娘を、ZECT医療施設に運んでくれ」

「よろしいのですか？

見た感じでは現地住民のようですが　「
構わない。」

ワームのことを知ったのなら今後のことを訊く必要がある。

それにどうやら魔導師のようだ。ならばその辺の事情も聞いてみたい」

「成る程。

了解しました」

運ばれてゆくアリサを見やり、ふとクロノは気づいた。

もう一匹、いる。

「僕達は時空管理局、特務部隊ZECT・第一部隊。

隊長のクロノ・ハラオウンだ。

「……できれば、大人しく出て来てくれると嬉しいのだが」
「……」

そこにいたのは、一匹のフェレット　ユーノであった。警戒した表情でクロノ達を見ていたが、やがて大きなため息をついて柱の影から出てきた。

「……分かりました。」

しかし、ボクは貴方達が時空管理局員だと言う証明が欲しい」
「ほう？」

それはどういう意味かな」

「この管理外世界で大規模な魔法行使をするだけでは飽き足らず、
外の乗り物や君が腰に下げている通信機器を見ると、この世界に
かなり干渉していることが分かる

……それは、重大な管理局法違反だよ」
「……」

クロノが腰に下げたトランシーバに目をやり、ユーノは言った。
魔導師同士ならばこれは要らないのだが、ZECTと言う組織には
一般人も存在する。

そして、現地住民 特にとある企業と取引し密接な協力関係を
結んでいる以上これは必要なものだった。

「特務部隊ZECT……とか言う組織にも聞き覚えがない。」

本当に管理局ならばそれを証明して欲しい、って言うのは無理な
要求でしょうか？」

「……いや、君の要求は理に適っている。」

そしてそれを説明するには、あの敵性体『ワーム』を説明しな
ければならない」

「……『ワーム』」

ユーノは先程垣間見た、あの化け物を思い出す。

人の認識外の速度で移動し、人の姿に擬態する怪物。

どうやら、あちらの事情も根が深そうだ。

しかし、『こちらの事情』も今現在進行形で危ない。

なにせ、『ジュエルシードモンスター』は倒されていない。
あの時どさくさに紛れて脱出した黒い獣 ジュエルシードモン
スターは現在も逃走中だ。

だいぶダメージは負ったようだから、暫くは回復に努めるかもしれない。

でも、事態が一刻を争うのは間違いなかった。

「分かりました。」

「こちらも事情をお話します」

不審を飲み込み、ユーノはその言葉を搾り出した。

「感謝する。」

僕が言うのもなんだが……客観的に見て僕達は怪しいだろう。
その点は否定できない。

だが、君達に危害は加えない。それは約束する」

「はい。」

それと、僕にはアリサを巻き込んだ責任があります。

アリサの連れて行かれた場所と同じところに連れて行ってくださ
い」

「……そうか。」

分かった」

ユーノの態度に苦笑し、クロノは頷いた。

彼は全くこちらを信用してはいない。

しかし、それ以上に大切なことが彼を妥協させたのだろう。

その心意気に敬意を表しつつ、クロノは今後を思いを馳せた。

これからライダーの出現や逃走などの、報告書と始末書の嵐になるだろう。

もしかしたら現職を退かされるかもしれない。

それだけ1号ライダー『カブト』失踪の責任は重い。

だが、なぜ変身できたのかが分からない。

ライダーベルトは相変わらずアリサの腰にあった。
なら、どうやって……

「……とりあえず、帰還するぞ」
『了解』

彼らは、長らく続いた戦いで更に朽ちたビルを後にした。
後日魔法で周辺の修復が行われるが、このビルは適用されないだろう。

ちらりと聳え立つ廃墟を見やったクロノは、その哀愁に満ちた姿を
目に焼き付けたのだった。

市街地に戻り変身を解いたのはは、虚空に消えるカブトゼクター
を見やった。

その身体は、その途端小学三年生へと戻っていた。

そして、先程覚えた『魔法』の力を使用する。
それはピンク色の光を発し、なのはの身体を癒した。

「……便利だね。」

『魔法』つてやつは」

それは、途中見たユーノの回復魔法　その劣化版である。
見様見真似なため、その性能は自己回復力を1・5倍程度に高める
力しかない。

しかし、いかに劣化版とはいえ一目見た魔法をコピーできるのは才能に他ならない。

その力を正しく伸ばせば、一体どこまで届くのか。

「まあ、そんなことよりお腹が空いたね」

くぅ、と可愛らしくなのはのお腹が鳴る。

既に時刻は21時を回っている。

早く帰らなければ、お腹を空かせた姉が倒れているかもしれない。
まさか、自分で作るなどと言う暴挙に出る可能性も

「……急いで帰るか。」

お姉ちゃんが待ってるしね」

愛する『たった一人』の家族のため、そして何より自分のお腹のため。
めに。

なのはは家に駆け戻って行ったのであった。

*
*
*
*
*

03話(後書き)

なのはさんごじゅうはっさい。

04話

アリサ・バニングスは自らの寝室で目を覚ました。

目を開けて真っ先に飛び込んできたのは、見慣れた鮫島の心配そうな表情。

だが、瞳の奥に近年まれに見る懊惱が垣間見えるのは気になった。

「……鮫島？」

「おはようございます、お嬢様。

皆様、お嬢様がお目覚めでございます」

「え？」

問う暇もなく、アリサは顔を鮫島の目線の先に向けると。

そこには一匹のフェレット、そして先の黒装束の少年がいた。

「え？」

「……ええっ!？」

慌てて自分の身体を見下ろす。

うん、いつものパジャマ姿だ。

さっきまでと柄が違うのは、汚れたほうを鮫島が取り替えてくれたのだらう。

「先程は済まなかった、アリサ。

もう身体のほうは大丈夫か？」

そう問いかけてくる少年

クロノにはもう傷一つ見当たらない。

顔色こそ良くないが、それはどちらかと言つと過労とかそういう類のものに見えるには彼が苦勞人だからだろうか。

「え？……ええ、大丈夫、みたい、ね。不本意ながら。
アンタこそ。肩からぱつさり切られたみたいな痕があったけど、
大丈夫なの？」

「傷自体は、直ったよ。その点は心配ない。
ただ、強引に身体を修復したただだから少し疲れてはいるけどね」

そう言うクロノの目の下には、濃い隈があった。
もしかしたら、睡眠すら十分にとってないかもしれない。

「……ちゃんと休みなさいよ」

「分かってる。」

「ちゃんと事情を説明したら、休ませて貰う事にするよ」
「事情？」

それを訊く前に、ユーノがぴよこんとベッドに飛び乗ってきた。

「大丈夫？アリサ」

「ええ、おかげさまで。」

「それよりどうなったの？あの後」

ユーノはなぜか鮫島を見やると、鮫島は分かったとばかりに頷いた。
何があったのだろうか？

「あの後、僕らは彼ら ZECTの医療施設に運ばれて魔法治
療を受けたんだ。」

「身体にはもう傷一つないから心配しなくていい。」

「そして、そこで僕は事情を総て説明したんだ」 『ジュエルシ

ード』のことをね」

「ああ。話は総て聞かせてもらった」

クロノが、ユーノの言葉を肯定した。

「まったく厄介なものをばら撒いてくれたものだ。

ワームだけでも対処に困るのに、この上ロストロギアの搜索なんかやっている余裕はないと言うのに」

ため息をつきながらぼやくクロノ。

「そう、そして次に彼ら ZECTの事情を聞くためにここに来てもらったんだ」

ユーノがそう言うと、クロノは徐にプロジェクターを立ち上げた。いつの間にかプレゼンテーションの用意がされていたようだ。

私がベッドは居住まいを正した。

なんとなく、パジャマでいるのが恥ずかしくなってくる。

なんか真面目な話をしているのに、一人だけ場違いみたいだ。

しかし、そつと鮫島がカーディガンをかけてくれると、それは少し解消された。

ありがと、と呟くと同時に部屋の照明が落ちた。

白い壁面に、映像が灯る。

「まずはこれから説明しよう。

七年前にこの地に落ちた、『海鳴隕石』について

そこには、巨大な隕石が落ちた跡が、映されていた。

天の道を往き、総てを司る女

「なのは、おっはよ」
「おはよう、お姉ちゃん」

高町美由希は、今日も居間で妹と朝の挨拶を交わした。
高町家、毎朝の光景である。
姉である私こと高町美由希は、私立風芽丘学園に通う高校二年生。
御神流と言つ剣術を継ぐ私は、毎朝早くから家の道場で稽古をしている。
7時に稽古を終えてシャワーを浴び、居間に戻るとなのはが丁度朝食をテーブルに運んでいる時間となるのだ。

「お稽古は終わった？」
「うん。なのはもやればいいのに。
せつかく運動神経いいんだし」
「私はいいよ。
それに運動神経がいい訳じゃないしね」
「そう？」
「でもあれだけ動けるじゃない」
「それはお姉ちゃんが料理できるようになってから言ってもらいた
いね」
「う……」

妹の高町なのは。

私立聖祥大学付属小学校に通う、小学三年生。

齡9歳にして家事一般を得意とし、自称『プロ以上』と豪語している。

料理がまったく出来ない私の代わりに、朝と夕食は専らなのは役割だった。

「おばあちゃんが言っていたよ。

『病は飯から。食べると言う字は人が良くなると書く』ってね。

たった一人の姉を病気にさせる訳にはいかないよ」

「また出た……。」

なのはのおばあちゃんっ子」

なのはがおばあちゃんっ子になったのは、7年前に起因する。

7年前、海鳴の地に隕石が落ちてきた。

偶々修学旅行で海鳴を離れていた私は無事だったのだが、父さんと母さん、それに恭ちゃんは助からなかった。

その日は、2歳になる幼いなのはも連れて家族総出で買い物に出ていたらしい。

比較的着地点から離れた場所にあったデパートだったけど、着の余波で倒壊した。

瓦礫の下から助け出されたのは、なのは一人だった。

なのはは、父さんと母さんに抱かれた状態から奇跡的に生還した。全く、死んでもなのはを守りきるとはあの父さん母さんらしい。

結局、恭ちゃんの遺体は見つからなかった。

いや、かなり多くの行方不明者が出た大惨事の中、遺体が見つかっただけでも行幸と言うべきなんだろう。

実際多くの人たちがまだ行方不明と言う扱いである。

もう見つかることはないと分かっているにしても、確認することも出来

ない悲しさは筆舌に尽くし難いものがあった。

「いただきまーす。うん、今日もなのはのご飯はおいしい！
お出汁、変えた？」

そんな感傷的な思い出はさておいて、なのはの作ってくれた朝食に箸を通す。

今日の朝食はおかずに鰹の開き、ふっくらご飯に味噌汁と漬物と言
うスタンダードなメニューだった。

味噌汁を啜ると、いつもと違う風味が鼻を擽った。

「うん、味噌汁は具によって出汁を変えるのがポイントだよ」

「はあ……。出来のいい妹を持つと姉は苦労するよ。」

なのはは将来お店開くのは決定だね」

「お店も、翠屋も継ぐ気はないよ。」

「最も翠屋はもうただのオーナーと言っただけだしね」

「翠屋ねえ」

両親が開いた喫茶翠屋は、その両親がいなくなっても健在だった。

当然父さんたちが死んだ後は災害の事もあって放棄されていた。

しかし、母さんの海外時代の知り合いと言う方が二人を偲んでまた
ここで翠屋を開きたいと言ってきたのだ。

私は翠屋の経営なんて無理だし、料理もてんで駄目なので断るうと
した。

そこに待ったをかけたのが、なのはと『おばあちゃん』だった。

当時、幼かった私たちは別々に預けられていた。

私は血縁上の母、美沙斗の元に。

そして、なのはは祖母である不破美影さんの元に。

なのはは、もう一度父と母の思い出があるここで暮らしたい、と言ったそうだ。

それには私も大賛成なのだが、当時二歳のなのはが両親の顔を覚えていたとは思えない。

そこまで固執する思いは何なのか、と訊いてみたらなのははこう言った。

『顔は覚えていない。目も耳も頭もその姿形を覚えておくには幼すぎた。』

でも、確かに覚えている。厨房に入ったときの、砂糖の甘いにおい。

柱にぶつかったときの、固い感触と痛み。それに、家族と共に居るって言う『空気』を。

多分、それが私の一番古い記憶だから』

そう言われた時、私は涙が止まらなかった。

そして、翠屋の復活と共に私たちはここで暮らし始めた。

もう一度、『家族』として。

「でも色々メニューに口出してるって話じゃない。

なのはが作ったメニューが一番おいしいって話しも訊いたよ」

「それは当然だよ。

だって私は天の道を往き、総てを司る女だからね」

右手で天を指差し、何時ものフレーズを口にするなのは。

なのはは、おばあちゃんに預けられている間相当色んなことを教わったそうだ。

家事一般に学問、スポーツ、それに『御神流』に至るまで。

総てにおいてプロ以上のものを持っているが、剣術の才能はなかったそうだ。

「その『俺様』ぶりさえなかつたらねえ……」

なのはは、私が食事をするのを満足そうに見ると新聞を広げて見始めた。

つくづく小学生か疑いそうになる所作である。

「ここまで何もないとすると、奴らもそれなりの組織力があるって事が……」

「ん、何か言った？」

「……別に。」

今度株でも始めてみようかなって、思ってね」

ボソツと何か言ったなのはに聞いてみると、また何やらとんでもない事を言い始めた。

でも、なのはが言うと思議と説得力があるのはなぜなんだろうか。

「その姿がすごく似合ってる、って思っちゃうのは何かおかしいのかも……」

「本当？」

じゃあ、お姉ちゃんの通っている学校でも買い占めて私が校長でもやろうかな」

高町家、朝の光景はこんな風に何時も通り過ぎてゆくのだった。

「じゃあ、変身したのはアリサじゃないって言うことだな。
誰なんだ？」

ワームと時空管理局対ワーム特殊部隊『ZECT』の話を知った私
たちは、次に昨日の状況説明に移っていた。

「あー……えー、と。その、変な奴よ。

一度だけ、見たことあるような、ないような……」

「出来ればはつきり思い出してくれ。」

マスクドライダーシステムは僕たちの切り札だ。

素性のはつきりしない者に渡すことは出来ない」

「……う、うん」

馬鹿正直に『高町なのはです』って言えば楽なんだけど、そうは
いかない。

なにせ『あの』高町なのはだ。

簡単に人の言うことを聞くとは思えないし、無理やり取り返そうと
しても抵抗されるだろう。

聞く限りこの世界の組織ではない『ZECT』には、ワームを倒す
ためならばある程度の犠牲は厭わないという風潮もありそうだ。

なら、最悪なのはを抹殺してでもゼクターを取り返すとか言い出し
かねない。

そんな相手に、まさか私の友達ですとは言えなかった。

「ごめんなさい。」

色々気が動転して……はつきり思い出せないの。

顔を見たのも一瞬だけだったし」

「……そうか。」

いや、気にする必要はない。君はとにかくジュエルシードの件に

「尽力してくれ」
「分かったわ」

ジユエルシードの件については、捜査協力をZECTが行うことが決定した。

しかし、封印については人員と高度なデバイスが必要なため割く余裕はないそうだ。

そこでZECTが搜索し、安全を確保した上でアリサが封印を行うことになった。

扱的には、管理局の民間協力者である。

鮫島は勿論いい顔をしなかったが、パパからはなんと許可が下りたらしい。

なんとまあ、娘を信頼していると言っかなんと言っか……。

パパも色々と豪快な人なので、またわははと笑って許可を出した光景が目に見えかぶようだった。

……ママは、どうなんだろう。

ここ最近、目にしていないママは色々心配性なところがあった。それだけが少し心残りだった。

『クロノ君、本部から連絡があったよ。』

「ようやくライダーベルトの資格者が送られてくるって」

「……そうか。」

「どうでもいいが、今は職務中だ。公私混同は慎んでくれ」

『申し訳ありません、クロノ隊長。』

「それと、明日ポイントE3に向かってください。」

『エクステンダー』の引渡しを行いたいそうです』

「了解した。」

「13:00にポイントE3に向かう」

そこに現れたのは、空中に浮かぶウィンドウ。その中でクロノの副官とか言う人が、何やら報告をしていた。この目で見ると、かなり異常な光景だ。現代日本の科学力では空中に浮かぶウィンドウなんかまだ実用化出来ていない。

「と、言うわけで。君はこれから小学校とか言うのがあるんだろう？
僕たちは少し休ませて貰う」

「ええ。」

私はこれからどうすればいいの？」

「ジュエルシードの搜索は、こちらで進める。」

封印作業を依頼する場合は、基本的に15:00以降に君にお願いすることにしよう」

放課後から、私の出番が来ると言うわけだ。

私はレイジングハートを握り締めた。

「……分かったわ」

「気を付けてくれ。」

ワームはどこに居るか分からないからな」

そう言い残し、クロノは立ち去っていった。

足元がふらついていたから、だいぶ疲れているんだろう。

「それではお嬢様。」

お着替えとご朝食がごきます」

「ありがとう、鮫島」

クロノを見送った私は、急いでパジャマを脱ぎ着替え始めた。

何せ、この説明会で時間を食ったからもう始業まであまり時間がな

い。
がばつと上着を脱ぎ捨てると、なぜかユーノが飛び上がって後ろを向いた。

「どうしたの？」

「い、いや、何でもないよ。」

ただ、その、僕は何も見ていないっていつか……」

「照れてるの？」

ユーノの癖に可愛いところあるじゃない」

なんとなくがばつと抱きついて、頬をすりすりしてみる。

ユーノはフェレットの癖に全然獣臭くないので、家の犬よりも触っ
ていて嫌じゃない。

「あ、あ、あ、あの、その、僕はこんな姿してるけど、僕も男だっ
て言うか……」。

とにかく早く服を着てっ！」

「可愛い」

ふさふさの毛並みを撫でたりほお擦りしたりしていると、そのうちユ
ーノが真っ赤になった。

ずっとこうしていたいけど、残念ながら時間があまりない。

小学校に遅れるわけには行かない。

それに、彼女 『高町なのは』に訊きたい事もある。

「そうね。早く学校に行かなきゃね」

「言ってることとやってることが違うよっ！」

早く服着てよ！擦らないでよ！舐めないでっばー！」

とか思いながら、朝の残り少ない時間を過ごしたのです。

*
*
*
*
*

05話

「おはよう、皆」

「おはよう、アリサちゃん」

「遅いよ。」

始業五分前には着席してるものだよ」

さて、時間は朝のHR直前。

私は息を切らせながら、教室に飛び込んだ。

同時に、始業のチャイムが鳴り響く。危ないところだった。

クロノとの話が長引いたせいで、いつものバスには乗れず鮫島に車で送ってもらったのだった。

鮫島には悪いが、こういう時はほんとに便利だ。

「……何よ。間に合ってるからいいじゃない」

「心構えの問題だよ。」

何事においても大切なのは下拵えと手際の良さだからね」

そうやって憎まれ口を叩くのは、例によって高町なのは。

昨日の今日で少しは神妙な顔でもするかと思っただが、そんなことは全くなかった。

高町なのは、何時もの調子で私をからかってくる。

……全く、これでは到着するまであれこれ悩んだ私が馬鹿みたいだ。

せめてもの憂さ晴らしにランドセルを机に勢いよく叩きつけてやった。

『バンッ！』と、想像以上に大きな音が鳴り響き、隣のすずかがびくうつつと身体を竦めた。

……ごめん、すずかに対してじゃないのに。

「あ、アリサちゃん。今日はどこか機嫌悪いの……?」

「ごめん、すずかにじゃなくなつて……。」

そこで足組んで悠々と座つてるバーカにちよつと、ね」

キツと睨んでやると、なのはは何故か何かを思いついたとばかりの顔で私にとんでもないことを口走りやがった。

「そうだ、丁度いい。」

アリサに聞きたいことがあつたの」

「……何よ」

何故か嫌な予感がした。

なのはを前にして感じた嫌な予感は、大抵現実のものになるから。

「『ZECT』とか言う組織について、知っている事を話してもら

」

「あーっ! あっ! あっ! ……ゲフンツ! ゲフンツ! !」

おなかの調子が痛くて頭が悪いから保健室に行つてきますっ! !」

「アリサちゃん、文法間違つてるよ?」

「いいの! 帰国子女だから許されるのっ! !」

「関係ないし、アリサちゃん生まれてからずっと日本じゃない」

「とにかく、保健室っ! !」

「アンタも来るのっ! !」

冷静な突っ込みを返すすずかを放って置き、私はなのはの手をとつた。

案の定嫌そうな面をして立ち上がらないのは。全くもっつ!

「私は健康だよ。」

保健室に行くんだったら一人でーっ！」

私は嫌がるなのはの頭をわしっと両手で固定し、強制的に正面を向けると思いつきり咳き込んでやった。

「げふんっげふんっげふんっ！」

「く、あ、何するのっ！」

「あー、あー、ごっめーん。これでうつったかも。

これはうがいして、保健室でマスクもらって、皆にうつらない様にしないといけないなー」

無然とした表情で、私の唾まみれの顔をひくひくさせるのは。

「……………いいよ。」

好きなだけ付き合っよ」

がたんと席を立ち、つかつかと勝手に歩み去るなのは。

なのはを連れ出す事は、どうやら成功したようだった。

しかし、後日クラスの皆の私の評価が『高町なのはと並ぶ変人』認定されている事を知るのはもっと後の事なのでした。

天の道を往き、総てを司る女

「七年前に落ちた『海鳴隕石』、それが総ての始まりだった。

未曾有の大惨事を引き起こしたその隕石は、その中にあるいくつもの卵を内包していたの」

「それが『ワーム』、ね」

「そう。人に擬態し、人を遙かに超える速度で行動する地球外生命体よ」

私たちは水道で顔を洗うと、保健室には向かわずそのまま屋上へと出た。

私立聖祥学園の屋上は落下防止用の高いフェンスに囲まれているが、施設はされていない。

する必要がないからだ。

小高い丘に立つ私立聖祥学園は、屋上から海鳴市が一望できる。

それだけならば心地よい景観で人気のスポットになっただろうが、実際にはここに来る人間は稀だ。

なぜなら、そこから見えるのはある種の地獄なのだ。

中央に残る、瓦礫の山。

七年たった今も、海鳴市の中心部 海鳴隕石の落着ポイントは

封鎖されたまま手付かずの状態だった。

復興資金がないとか言う訳ではないだろう。

しかし今も落着ポイントは嚴重な監視下に置かれ、一般人の立ち入りは禁じられている。

「ZECTとはその『ワーム』に対抗するために、別の次元からやってきた『時空管理局』の特殊部隊よ。

彼らは魔法を使い、ワームを殲滅するためにこの世界で戦い続けてくれているわ」

私はなのはに、今日の朝習った『ZECT』について話していた。

「気に入らないね」

一通り喋った私に、なのはは瓦礫の山　　落着ポイントを見ながら口を開いた。

「何が？」

「総て。」

まず、なぜ『時空管理局』とやらは私たちを助けてくれるの？」

背を向けて話すなのはは、何故かいつもより大きく見えた。からからとフェンスを撫でるように歩きながら、私は答える。

「え？私たちだけじゃ『ワーム』と戦えないからでしょ？」

「それは違う。」

本当に私たちを助けたいのなら、やつらの本隊を呼べばいい。

この世界ごと消し飛ばすことが出来る戦力もあるんでしょう？なぜそれを使わない」

「だってそれじゃ……。」

「私たちも死んじゃうじゃない」

「それで『時空管理局』の連中が何か困るの？」

「この世界は『管理外世界』とか言うそうだけど、奴らには関係のない世界なんでしょう？」

「……それは」

確かに、それは少し引つかかった。

『ZECT』はこの世界の人たちを助けるために戦ってくれている。それはいい。単純明快だ。

でも、彼らは話ではもっと大規模な戦力もあっていった。

じゃあ、なぜそれを使わないんだろう。何人も犠牲者が出ているのに。

「そもそも。」

奴らはなんで『ワーム』なんか発見したの？」

「え？」

「『管理外世界』は奴らには辺境なんでしょう？」

私たちにしてみればアフリカの奥地が変わった動物がいる、程度の事だよ。

たとえ発見しても、アフリカなら何れ人里にその動物が出てきて騒ぎになるかもしれない。

でも、次元を隔てている彼らにその心配は皆無なの。」

ワームが次元航行技術を持っているという話は訊いたことがない。

ならば、最悪時空管理局は『見てみぬフリ』をしていれば、何の損害もない。

ならば、なぜ彼らは私たちを助けてくれるのか？

「見つけちゃったんなら、しょうがないじゃない。

……それに、あれよ。」

困っている人がいたら、助けないといけないじゃない。」

私は、彼らの立場を自分に置き換えて考えてみた。

自分が、あの生物に襲われている人がいたとして、見てみぬフリが出来るだろうか？

いや、答えは『NO』だ。

たとえ魔法の力がなかったとしても、彼らの前に立ち塞がるだろう。

「……アリサは優しいね。」

「ただ、戦士には向かない性分だね」
「なんですって?」

その答えに、なのはは微笑んだ。

一瞬蔑まれているのかと思っただが、その笑顔に邪気はなかった。

「それよりなのは、答えただからこつちからも質問。

何であなたがライダーベルトを持つてるの?」

「それは答えられない」

「なっ……っ!」

「じゃあ、せめて私たちの仲間になりなさい」

「嫌だね」

一通り話し終え、なのはへの質問に変わった途端彼女は一転して嫌味な表情になった。

そして一人、つかつかと屋上の扉へ向かって歩き始めた。

こ、こいつ……っ!」

「さっきも言った通り、『ZECT』は怪しすぎる。

そして私はそんな良く分からないものを信用したりはしない」

「とにかく、私たちの仲間になつて。

「お願い、この通りっ!」

私は、滾る彼女へのイライラを封じ込め、彼女の背に頭を下げた。

思い起こすのは、クロノたちの燦燦たる光景。

あれを再び起こすわけには、いかない。

その思いは、彼ら『ZECT』のほうが強いだろっ。

そんな時、ようやくできた切り札を横から搔っ攫われたとなつたら

「……分かったよ」

「……え、本当？」

「ただしっ！」

そんな思いで頭を下げたのが功を奏したのか、なのははそれを引き受けた。

しかし、彼女はこう続けた。

「私の下の付きなさい」

なのはが向き直ると、その自信にあふれた表情で言い切った。

「……なに？」

「当然でしょ。」

「一番強いのは私だからね」

何時ものように、天を指し答えるなのは。

さつきまで押さえ込んでいたイライラがまた噴出してきた。
こいつめっ！

「あなたのためを思って言ってるのが分からないのっ！」

「へえ、その必死さで一つ分かったよ。」

逆らえば私は追われる。下手をすれば、殺される。

『ZECT』とはそう言う組織だと言うことだね

そう言い、くるりと背を向けなのはは屋上を後にした。
対して、私は何も言えなかった。

あのクロノは、そう言うことを明言はしていない。
しかし、彼らの必死さと犠牲の多さは本物だ。

それにそう言う暴挙に出ても、彼らは日本の警察に捕まえること
出来ない存在だ。
それを考えると、『そんなことはないっ！』とはどうしても言える
はずもなかった。

時は少し過ぎ去り、午後一時丁度。

海鳴市のとある橋の下で、クロノが橋げたに身体を預けて待ってい
た。

暫くして、『グオオオオオオン』という、激しいエキゾーストノ
ートが響く。

回転数が高いことを示す甲高い金属音に似たその音は、F1の排気
音を想像させる。

それは、『スーパースポーツ』と呼ばれる1000ccの排気量を
持つ市販オートバイの一つの頂点。

その中のホンダ『CBR1000RR』と言う車種をベースに開発
された、『マスキュライダー』専用の特殊強化バイク。

『カブトエクステンダー』がそこにはあった。

「お渡しします」

「ご苦労」

短い言葉で、引渡しは終わった。

『エクステンダー』はカブト専用開発されているため、その姿は

カブトに良く似ている。

真っ赤な車体と、カウル前面に伸びるカブトの角が特徴的だった。

クロノは『エクステンダー』に跨り、アクセルを吹かして発進。

足つきの良いCBR1000RRをベースにしているため、やや身長の高いクロノでも問題なく取り回せる。

そのまま、クロノは資格者との待ち合わせ場所に向かって『エクステンダー』で向かう。

だが、待ち合わせ時刻は15:00。

まだ時間があったので、クロノは少し市内を流してみることにした。

「……凄いな」

この世界のバイクはほとんど知らないクロノだったが、このバイクは素直なハンドリング特性で直ぐに順応することが出来た。

それは搭載された電子制御ステアリングダンパー（HESD）が、常に最適な減衰特性を実現しているからである。

低速走行時には軽快な取り回しを、高速走行時には路面からの外乱や振動を抑えて安定したハンドリングを。

途方もない出力と、素直なハンドリングという相反する特性を持つバイクであった。

そんな『エクステンダー』で向かった先は、海鳴駅。

海鳴市周辺を走るURの最寄り駅である。ユナイテッド・レールウェイズ

駅周辺には名店街や映画館などが立ち並んでおり、平日にもかかわらず多くの人が集まっていた。

駅の市営駐車場に『エクステンダー』を停めたクロノは、待ち合わせの場所で携帯を取り出した。

時刻は丁度15:00。

時間通りに待ち合わせ場所にいないのはいいとしても、何の連絡もないのは気にかかる。
電話をかけてみるが、反応はない。

「……………」

10コールぐらいしたところで、クロノの耳がどこかで響くコール音を捕らえた。

丁度こちらのコール音に続く形で響く、コール音。

不審に思っただけで音源を捜すと、それは男子トイレの中から響いているようだった。

『清掃中』の札が下がる男子トイレの中からである。
それも、薄暗く人の気配がない状態だ。

「……………セットアップ」

念のため、人払いの結界を張った後クロノはバリアジャケットを纏った。

右手でS2Uを構え、左手でライトを逆手に持つ。

慎重に足を進めながら、閉まっている個室を一つ一つ足で開く。

一つ目。

……………何もなし。

二つ目。

……………これもなし。

音源は、そうしている間にも近づいている。

合計6つある個室のうち、手前から5つは何も無かった。

残るは最後の一つ。

音源も、どつやらここから響いている。

意を決し、クロノはバン、と蹴り破る勢いでドアを開ける。

そこには

「……………エイミー、緊急連絡だ。」

『資格者』が殺された」

白い粘液に包まれ、力なく横たわる一人の男がいた。

『ZECT』製の黒いコートに身を包む男の顔は、確かに事前に連絡されていた『資格者』の顔だった。

「警察への対応は頼む。」

それと、アリサを連れて来てくれ」

『え？』

アリサちゃんを、こんなところに？』

「そうだ。」

彼女は無鉄砲なところがある。ワーム相手に彼女の性格は危険だ。

少しこの戦いの『現実』って奴を見せておこうかな、と思う」

『……………了解』

応えるエイミーの表情には、クロノへの無言の非難が含まれているように思えた。

しかし、そんな感傷は打ち消す。

アリサには、これからはジュエルシード専属になってもらうつもりだ。

しかし、ZECTが対ワーム組織である以上彼女がワームに関わることはこの先あるかもしれない。

ならば、ワームとの戦いと言う現実を覚えておかなければ、この先命がいくつあっても足りない。

彼女のような無鉄砲な若者が死んでいくのを、クロノは何人も見ているのだから。

それに、彼女は選ばれなかったが確かに『カプトゼクター』は彼女に反応した。

自分は呼んでも来なかったのだから、彼女はもしかしたら『資格者』の資質があるのかもしれないのだ。

もう一度、クロノはワームに殺された男を見やる。

アリサが、このような姿になるのだけは阻止しなければならぬ。そう胸に硬く誓うのだった。

帰りのHRを終え、今日の学校は終わった。

皆が帰り支度をする中、私はじつとなのはを見つめていた。

「どうしたの、何か用？」

「……ううん。」

別に「

あれから、なのはとはZECTの話はしていない。

普通に3人で過ごし、お昼を食べ、午後の授業を終えた。

その間、なのはは実に自然体だった。

「じゃあ、今日は悪いけどみくにやで夕飯の買い物をしたいから先に帰るね。」

二人ともまた明日」

「そう……。」

「じゃあ今度は家にも来てね、なのはちゃん」

「そのうちね」

さすがが何時ものようになのはを誘うが、今日は断られた。何でも、朝と夕食は総て彼女が用意しているらしい。

「……………」

ランドセルを担いで歩み去るのはを、私は見ているしかなかった。なんと声をかけて良いか……まだ分からなかったから。

『よく分からないもの』を信用できないと語る彼女の言は、最もだ。しかし、クロノの事情もなのはの我儆が許されるような状況ではない。

「あゝ……………もうっ!」

私は、こんがらがる頭を解き解すようにぐじゃぐじゃと頭を掻いた。どうすれば良いのか答えが見えない。

でも、何かしなければ気がすまない。

焦りと不安で気が狂いそうになった時、着メロが耳に届いた。私の携帯だった。

思考を中断し、慌てて画面を見ると相手は『クロノ』だった。

「……………はい。アリサです」

『クロノだ。』

実は君に来てもらいたいところがある』

「ひよつとして、見つかったんですか？」

「ジュエルシード」

『いや。今回はそれとは別件だ。』

これから先、君達がワームと接する機会があるだろう。

そのときに備えておきたいと思ってね。

とにかく、迎えを寄越したから指示に従ってくれ』

「……はい」

校門を見やると、見慣れない白いバンが泊まっていた。

その隣で、紺地の制服のようなものを着た女の人がこちらを見ていた。

その制服の腕には『ZECT』の文字が入っている。

分かりやすいが、逆に分かってしまつて良いのか不安にもなる。

「ごめん、すずか。」

私もちよつと用事が出来ちゃつた」

「……そう。」

なんだか分からないけど、頑張つてね」

「……何を頑張るの？」

「いや、なんとなくだけど……。」

「アリサちゃんずつと思いつめた顔してたから」

「すずか……」

親友であるすずかは、こういう心の機微に聡い。

なのは相手には幾分曇るようだが、私の心情には何時も的確に反応してくれる。

「……分かつたわ。」

私に何が出来るかわからない。

でも、動かないと何も始まらない。案ずるよりも生むが易しってねっ!」

ばちんと頬を叩くと、何時ものようにテンションが高ぶってきた。やはりこの親友はよく私のことを分かっている。こんな一言で私を元気にさせてしまっただから。

ちらり、となのはの歩み去った方角を見やる。

「待つてなさい。」

必ず私はあなたを超えてみせるんだからっ!」

もう豆粒ほどにしか見えないのはに向かって、ぶんと拳を振り上げ、そう宣言する。

そうすることで、少しだけ気が晴れた気がした。

「……………」

だから、その違和感に気づいたのかもしれない。なのはの後、それに続いて歩いている男がいたのだ。

黒いコートの青年だが、当然見覚えは無い。

一定の速度でなのはの後を　悪く言えば付けている様にも見える。

「アリサちゃん、クロノ君が呼んでるからそろそろ行きましょう」

「あ、はい」

痴漢という奴だろうか……と思ったが、あのなのはの事だ。

武道を嗜んでいるとか言ってたし、大人とはいえ普通の人間にどう

こうされるとは思えなかった。
だから、私はZECTの女性に呼ばれた時にその違和感を拭い去ってバンに乗り込んだ。

静かに発進するバンの中、リアウィンドウから見える景色には、もうなのはと男の姿は見えなかった。

アリサが連れて来られたのは、海鳴駅であった。平日休日問わず賑わうその駅は、今ある一点において静寂な場所が生み出されていた。駅のトイレである。

賑わう駅においてトイレが静かなど、本来はありえない。しかし、そこは今『人払い』の結界が敷かれ、不自然なまでの静寂が満ちていた。

「……これが、見せたかったものってわけ？」
「そうだ」

『ZECT』の作業員が現場の情報を集める中、私は生まれて初めて男子トイレに入った。なんとなく入ってはいけないところに入ってしまった嫌な感じに襲われるが、まあそれは別の話。

この先には本部から送られてきた『ライダーベルト』資格者の遺体があるそうだ。ワームは彼の接近を知り、先手を打ったのだろう。

「言っとくけど、私はぐっちゃぐっちゃの死体なんて見たら気絶するわ。」

倒れたら責任持って家まで送ってよね」

「前向きなんだか、後ろ向きなんだか……。」

とにかくワームと戦うと言う事がどういうことなのか、それを知ってもらえればそれでいい」

ほれ、とクロノに背中を促され、恐る恐る奥の個室に忍び寄る。何の粘液か、地面はやけににちゃにちゃした液体が撒かれてある。これもワームの仕業なんだろうか。

「……あ」

そして、私は『それ』を見た。

「……こういうことだ。」

彼は本部でも屈指の魔導師でランクもS相当の凄腕だそうだが、しかし、そんな彼でもこうもあっさりとやられてしまった」

クロノが何やら説明しているが、そんな事は耳に入らない。

そこで死んでいたのは、黒いコートを着た青年だった。

そこまではいい。

白い粘性の液体に包まれているが、それが死因と直結しているかは私には分からない。

それはどうでもいい。

問題は。

「……なのはが、危ない」

『なのはがさっきこの男に付けられていた』と言う事だった。

天の道を往き、総てを司る女

「Sランク魔道師と言えど、ワーム相手にマスクドライダーシステムなしでは敵わないと言う事だ」

「じゃあ、マスクドライダーシステムにはワームに対抗する手段があるか？」

「勿論だ」

後ろで話されるクロノとエイミィの会話を聞きながら、私は心を寒々とさせていた。

あの時、なのはを付けていた男がここにいる。
全く同じ顔の人間は世界に3人は居ると言うが、ここまでそっくりなのは他にない。

間違いなくワームだ。

ならば、なのははあの時ワームに付けられていた事になる。
それが何を意味するかなど、考えるまでもなかった。

「……ねえ、ちょっと訊きたいんだけど」

「何だい？」

震える心を気力で治め、クロノに訊いた。

「そのマスクドライダーシステムってやつがあれば、ワームに勝てるの？」

「……そうだ」

それは、まだ残る希望の確認。
なのはならば、そのライダーシステムとやらを使えば早々遅れをとる事がないと信じるための確認。
しかし、続く言葉に再び肝を冷やした。

「だが、フルパフォーマンスを発揮するには高い処理能力を持つデバイスが不可欠だ。

それなくしてワームには対抗できない」

「……え」

「見た所、昨日の奴はゼクターの他にデバイスを持っていなかった。なんとかワームは倒したようだが、あれでは何れ倒されるのは時間の問題だな」

あっさりと言い切ったクロノの言葉に、私は戦慄するより他になかった。

……なのはが、倒される。

……なのはが、殺されてしまう。

思いのほか、その想像は私を苦しめた。

冷静に考えると、なのはと私はいつも刺々しく皮肉やからかいを言い合っていた思い出しかない。

出会いも、決して良いものではなかった。

……まあ、私の態度が幼稚すぎたのは既に反省しているが。

でも。

だけれども。

なのはが、殺される。

そう聞かされると、居てもたっても居られなくなってしまった。

ああ、結局。

私は何時もそうなんだ、とまた後悔する。

私は、何時も気付くのが遅い。

こんなにもなのはを、『友達』だと思っている事に気付くなんて。

「……お願い、レイジングハート」

ぼそりと、私は赤い宝石に願いをかけた。

『ZECT』を頼る訳にはいかない。

彼らに、カブトの正体を教えてしまう訳にはいかない。

「私を、なのはの所に」

『Yes, My master .

First of all , please leave t
his place 』

(まずはこの場所を離れてください)

願いに応え、レイジングハートは主人の意思を実行すべく動き出す。
アドバイスを受けた私は、思い切ってクロノに告げた。

「あ、あの、クロノ……」

「どうした」

「もう、いいかな。」

あんまり、こんな気分の悪いとこ居たくないし……」

「……ふむ、そうだな」

クロノは、まじまじと私の顔色を観察した。
なのはの心配をしたせいで、私の顔色は鏡を見るまでもなく青白い
ことが想像できた。

「これでワームに対して、決して油断してはいけないという事は分
かってくれたと思う。

君はあの時、勇敢にもワームに対して飛び掛っていった。
その勇気自体は素晴らしいものだ。

だが、その程度でどうにかなるほど簡単な相手じゃないんだ」
「……はい」

しゅんとしよげた格好で、クロノのお説教を聞く私は傍目には反省
したように映っただろう。

実際クロノはこれ以上は逆効果だと考えたのか、話をしめにかかっ
た。

しかし、私の内心は心配でいてもたっても居られないというのにつ
……！

「当面の間、君にワームに関わってもらう事はないが……もし出会
った場合は直ぐに僕たちを呼ぶんだ。

決して一人で戦おうなんて馬鹿なことは考えちゃいけない。いい
ね？」

「分かり、ました……」

かつかつかつ、と爪先が苛立ちを刻む。

見た目の態度とは裏腹に、私は心が煮えている。

友達が生きるか死ぬかというこの瀬戸際に、長い時間拘束されるこ
とがここまで私を苛立たせている。

「……。」

では、今日はもう帰ってもらって構わない。ゆっくり身体を休め

「失礼しますっ!!」

クロノの言葉を遮り、一目散に出入り口にかける私。
もう形振り構っていられなかった。

「アリサちゃんっ!

帰りは車で送って

「結構ですっ!」

途中ここまで送ってもらったお姉さんがそう言ったが、勿論拒否。
周囲を見る余裕もなく、私は一目散に結界を抜け正面出口から身を
躍らせたのであった。

「これは、少々厄介だな……」

はあ、と黒衣の魔導師がため息をついたが、勿論そんなことを私は
聞いちゃいなかったのです。

同時刻。

高町なのははスーパー『みくにや』への道を外れ、市内へ走る県道
を歩いていた。

彼女はとつくに尾行には気付いている。

その気配が人とは異なることも、その類稀なる魔導の才により知り得ていた。

「……………」

「……………」

一定の間隔を置き、決して近づく事無く、しかし離れる事無く。緩急を交えて極自然に撒こうとしたが、人外の化け物には通用しなかったようだ。

こうなれば、なのはのすべきことは一つ。

愛する姉と世界のため、人に仇なす化け物を葬り去るのみ。

なのははその針路を、最近建設された『海鳴タワー』へと向けた。2ヶ月前にOPENしたこのタワーは、新しい海鳴市の名所として既に名高い。

しかし、今は急な建造で一部の内装が未完成のままである。

工事も何故か入っておらず、人の姿も無い。

なのははそこを決戦場と定め、ゆったりと歩き出した。

人が居る場所では無闇に手出ししてこない、と分かっているから。

「……………」

そして、付ける男も無言で速度を合わせる。

男の目的地がなのはと同じ場所だと言うことは、まだ彼女は知らない

海鳴駅の外に躍り出た私は、レイジングハートの導きに従って市営
駐車場へ向かった。

『可能な限り速く』と願いをかけたせいか、このデバイスは車両を
使うことを提案した。なんでよ。

「……私、免許なんか持ってないんだけど」

『There is no problem if not fo
und』

(見つからなければ問題ありません)

神秘的な外見に反して、なかなか大胆なデバイスだ。
なぜかその性質は私のもう一人の親友を髣髴とさせる。強かな意味
で。

「それ以前に小学三年生が運転できる車なんて、ある訳ないでしょ
っ！」

『It is wrong .
If it is a electronically con
trolled vehicle , it is possibl
e to support it by my power』

(それは間違っています。電子制御された車両ならば私の力でサポ
ートすることが可能です)

なんて事を言っただけのけた。なんつー出鱈目。
しかし、ちよつとだけ面白くもある。

鯨島が運転するのを後ろから見ている、自分で動かしてみたいと思
った事は一度や二度ではない。

「でも、他人の車を盗むのはちよつと……」

だが、他人の車を盗むとなるとそうも言っていない。

私は人のものを盗んでおいて大きな顔が出来るほど厚かましい人間
ではないのだ。

「空とか飛べるんじゃないの？」

魔法なんだし……といささかの期待を込めてレイジングハートに訊
いてみる。

空を飛ぶと言うのは、いかにも魔法使いっぽくて面白そうだ。
しかし、レイジングハートはこう告げた。

『The aptitude and the control
power are necessary for the fl
ight magic』

(飛行魔法には適性とそれなりのコントロールが必要です)

「ああ、そう……」

どうやら、簡単には飛べないらしい。

出来れば『適性』とやらを調べてほしいが、それは今日の前にある
危機を潜り抜けてからだろう。

『Let's use that』
(あれを使いましょう)

なのはが危ないという緊急事態と、人のものは盗めないと言う道徳観念でうろろしていた私にレイジングハートは告げた。

「……………あのでつかいバイク？」

『Yes』

そこには、なんだかへんな改造が施された大型バイクがあった。真っ赤な車体に、カウリングに伸びるカブトムシのような角。

側面には『ZECT』の文字がプリントされている……………って、これあいつらのバイクかい。

『I support the magic control
art, and if it is this, even A
lisa can drive.
Moreover, I think that I retu
rn it easily later if it is th
eirs』

(これなら魔導制御部を私がサポートすることで、アリサでも運転できます。

また、彼らのものであれば後日返却もしやすいと思います)

借りるだけ……………と言う言い訳に、私も心が動いた。

そう、彼ら『ZECT』には色々迷惑をかけられている。

私が首を突っ込んだだけと言う説もあるが、小学三年生に死体を見せられた貸しはある。

あんなもの見せられた貸しに、ちょっと借りるだけ。

という言い訳を武器に、私はバイクに跨った。

「……足が付かない」

と言っか、ぶらぶらしたままではつきり言ってしがみ付いているだけ。

これで本当に運転できるの？

『Cell motor start』

とか言っている間に、レイジングハートは勝手に何か動かした。バイクが大きく振動し、エンジンがかかったようだ。

ハンドル基部にあるパネルに火が入り、デジタルのスピードメータが表示された。

「わ、ちよつ……!!」

『Stand fold』

予想外に大きな振動にびびる私を放って置いて、自動的にスタンドが畳まれた。

何の支えも無くなったバイクは普通なら転倒するだろうが、何故か走りもせずに直立している。

『Now, let's go』

「……いいの？」

駐車スペースから自動的にバックし、公道への入り口へ一直線。私は恐る恐る、右手のアクセルを回した。

『ブオオオオオン』と言う擬音が表示通りの振動と加速が私を見舞う。

ちよ、回しすぎたと思う暇も無く目の前には黄色いバーが……ぶつかるっ！

『Jump』

そこにレイジングハートのサポートが入る。

急に円形の魔方陣が展開されたかと思うと、バイクは何の予備動作もなしに真上に跳ねた。

「ちよ、ええええええっ!?!」

慣性でそのままバーをやり過ぎすと、ハリウッド映画のスタントさながらに公道に着地した。

中央分離帯にぶつかからないようにハンドルを捻ると、ギャリギャリと火花を散らしながら90度旋回。

何この無駄にかっこいい挙動……レイジングハートの趣味？

「……まあ、いいけどね」

気を取り直し、再度アクセルを捻る。

心地いい加速感を得ながら、バイクは加速した。

『Shift up』

1速、2速、3速と上がる度に加速は鋭くなり、直ぐに時速400Kmを超える……って出しすぎでしょっ！

魔力シールドが張られているから風の影響は少ないが、そこそこの交通量のある場所で走ると避けきれない。

そこにはレイジングハートサポートが入るが、はっきり言って生きた心地がしなかった。

「レイジングハート、速すぎよっ!?!」

右に左に車を避け、信号すら無視してバイクは突っ走る。

いつパトさんが飛んできてもおかしくない危険運転だけど、レイジングハートはアクセルを緩めさせてくれない。

『Please believe me .

My master』

「……………」

どうやら、この石ころはかっこよく決めたがる癖があるらしい。付き合わされる私はたまったものじゃないけれど。

「……………分かったわよ。」

どうせここまで来たんなら、出来るだけ急ぎなさい……………っ!」

『Yes』

ここまで来たら、私も覚悟を決めるしかない。

レイジングハートを胸から外し、ぐっと握った。

「レイジングハート、セットアップよっ!」

『All right . My master』

私はユーノに教えてもらった呪文を思い出し、魔力をレイジングハートに込める。

「我、使命を受けし者なり」

その言葉は、魔力を持つ。

「契約のもと、その力を解き放て」

宣誓にして、契約、そして呪いの言葉。

「風は空に、星は天に。

そして、不屈の心はこの胸に」

高速で走るバイクから、燃えるような真っ赤な魔力光が尾を描く。

傍から見たら、私たちは大気圏に突入する流星のように見えただろうか。

「この手に魔法を。

レイジングハート、セエーット……アップっ！」

言い終えると同時、時速400Km超で走るバイクから前方へ思いっきりレイジングハートを投げた。

瞬間、レイジングハートから光が放たれる。

光の中、魔力によって私の衣服が分解される。

そして、上半身から魔力によって編まれた『バリアジャケット』に包まれてゆく。

その姿は、私立聖祥学園の制服に良く似ていた。

しかし、動き易いように長いロングスカートではなくショートパンツに変更されている。

また、上着はこれまで見てきた『魔導師』と言うイメージからマントのように長い丈を持っていた。

裾をはためかせながら、右手に飛んできたレイジングハートを掴む。

赤い石を中央においた、魔法の杖『レイジングハート』を。

「行くわよっ！」

『All right .

ECR drive』

車体を包み込む大きな魔法陣が発生し、バイクが急加速。
通常燃料走行から、ECR放電によるイオン加速走行へと移行したのだ。

ECR放電によってプラズマを生成し、そこから取り出された負イオンを元に高速加速するカプトエクステンダー。
その速度は優に時速800Kmを超える。

レシプロ飛行機の限界速度すら越える世界の中、私は空を見た。
そこには、併走するように『カプトゼクター』が飛んでいる。

私が呼んでない以上、それはなのはが呼んだものだろう。
好都合とばかりに、私はその後を追う。

『Master .

Please look at the bag in the
back』

(後ろのバッグを見てください)

「……これはっ！」

バイクの後部座席に括り付けられていたバッグ。
そこからは怪しい放電が起こっている。

手を伸ばしてファスナーを開くと、そこには昨日見たベルトの姿が

あつた。

『ZECT』の管理的には不手際だろうけれど、この状況はありがたい。

これで、完璧になのはを救うことができる。

そして、彼女に見せ付けてやることができるっ！

「待つてなさい、高町なのはっ！

今度こそ、私がワームを倒してみせるわっ！」

彼方に見える『海鳴タワー』に向け、私達は更に速度を上げて疾走してゆくのだつた。

07話

「着いた　ッ！」

時速800kmを越す世界で走りながら、ようやく私　　アリサ・バニングスは『海鳴タワー』に到着した。

空を飛ぶカブトゼクターを追いかけた先は、海鳴市の新たな人気スポットだった。

平時でも大勢の人が込み合う場所だけに、注目を引くのが怖い。

「こつち……？」

だが、カブトゼクターが向かったのは人通りの多い道を外れ建設用の臨時道路と思われる細い街路。

私はバイクを止めると、その先を走って付いて行く。

鍵とかかけた方がいいのかもしれないけど、今はそんなことに構っちゃ居られなかった。

『Attention』

「あれは……ワームッ！」

レイジングハートの警告通り、向かった先にはワームが居た。

緑色のサナギ体とか言うワームばかり10体ほどが、何かの入り口のような所でたむろしている。

看板を見る限り『地下アミューズメントパーク開園記念、代官山はとこコンサートはここから地下へ！』などと謳われている。

去年立ち消えになったタワーの地下施設への入り口だろうか。

「なのは、こんなところに居るの……?」

『The enemy noticed』

そうこうしている内に、ワームが私に気付いた。
10数体のワームは素早く私を囲むように動く。

「……くっ!」

今日見せられた、男の末路が脳裏に浮かぶ。

『決して一人で戦おうなんて馬鹿なことは考えちゃいけない』と、
クロノはそう言っていた。
でも、ただ

「なのはが危ないのよ。」

私の友達に手を出したら

絶対に許さないんだからっ!」

『It's so』

私は戸惑ったように空を舞うカプトゼクターを見やり、もう一度右手を伸ばした。

「お願い、カプトゼクター。」

私に……友達を助ける力をつ!」

それに呼応したように、カプトゼクターは旋回をやめ私へ向かって飛んできた。

「来た……ッ!

今度こそ……って!?!」

カプトゼクターはそのまま速度を上げ、回転しながら私に突っ込んでくる。
咄嗟にそれを避けると、ゼクターはそのままアスファルトを突き破り地面を掘削しながら地下へと消えてしまった。

天の道を往き、総てを司る女

なんですよ。

「なんで……どうして私には力を貸してくれないの」

『The enemy comes』

カプトゼクターは今度も私に振り向いてくれなかった。
うな垂れる私に向かって、ワーム達が突っ込んでくる。

「……仕方がないわね。

レイジングハート、やるわよ」

『All right・My master』

私は気を取り直し、レイジングハートを構える。
カブトゼクターが無くて、この小憎らしい相棒が居れば抗うことは出来る。

「スラッシュモードッ！」

『Mode”Slash”』

レイジングハートが掛け声と共に、その形を変える。

赤い宝石が柄の部分に移動し、”杖”である棒型から刃が生まれ波打つ波紋を持つ刀へと変化した。

僅かなそりを持つその刃は、柄こそ赤い宝石が埋まっているがまんな日本刀と変わらない。

魔法の杖であるレイジングハートは、基本的に魔導師の望みどおりの形をとることが出来る。

私に合う姿はなんだろうとここに来る間話し合った結果、出来たのがこのスラッシュモード。

小さいころからパパの趣味で日本刀に触れていたのが、こんな形で現れるのは皮肉なんだろうか。

「はあっ！」

気合一閃、なんの警戒も無く踏み込んできたワーム一体を真一文字に切り裂く。

手応えは藁束を切った時より、当然ながら重かった。

『Recovery』

そして、今の一撃で欠けた刃をレイジングハートが修復する。

このモード、特に強度がやばいくらいに無い。
元々レイジングハートはこういう打撃武器に向いていないのに加え、
日本刀と言う脆い形を取ってるのもある。

でも、私は遠距離から飛び道具とかそういう卑怯なものにはどうしても馴染めなかった。

だから、不利は覚悟でレイジングハートにこの姿をとって貰った。
一発本番だし、慣れない射撃とかで下手こくよりよっぽどマシだと
私は思う。

「さあ、どうしたの。かかってきなさいっ!」

修復したレイジングハート・スラッシュモードを構え、私は声を張
る。

ワーム達は驚いたように私を囲むけれど、直ぐに不意を着くように
左右から仕掛けてきた。

「でえええ、りゃあっ!」

私は左側に背を向け、右側のワームへ思いつきり突っ込む。

腰だめに構えたレイジングハートを突き刺すと、それを支えにくる
りと反転。

背中まで突き破ったレイジングハートを、今度は2体目までタック
ルするように突き刺した。

「燃えなさいっ!」

『Burning』

レイジングハートから円形の魔法陣が発生し、刀身が赤く燃え上が

る。

魔法の炎で内側から炙られたワーム達は、成す術なくその身を爆散させた。

魔法耐性を持つワームと言えど、身体の内側から燃やされたらどうしようもなかった。

「なんだ、出来るじゃない私。

やっぱりワームには近接戦闘がベストね」

『Recovery』

刀身を修復するレイジングハートに、こつんと一つ小突いてやる。もう一つ、私の魔力変換特性『炎熱』があつたのも幸いだったんだろつ。

普通、魔力を炎などの形に変換するとそのロスが発生する。

しかし、この特性を持っていると普通に炎を発生させる場合の10分の1以下のロスで使うことが出来る。

『グルルウウウ』

一気に3体も減らされたワーム達は、私から一気に距離をとった。

そして頷きあつるように2体のワームが前に出て、その身を悶えさせる。

……まずい。

「レイジングハート、脱皮する前に仕留めるわよっ！」

『All right』

私は脱皮の前兆を見て取ると、一目散にそれを仕留めるべく走った。

成虫体ワームになられると、私ではどうも出来なくなってしまうから。

しかし、それを阻止すべく残りのワーム達が折り重なるように前に立ちはだかる……ああ、もっつ！

「邪魔よっ！」

『Burning』

私は再び刀身を燃え上がらせると、2体纏めて引き裂く。

しかし、構わず残りのワーム達は屍を踏み越え私にその手を振り下ろしてきた。

「きゃあっ!?!」

『Round shield』

攻撃に対し、円形の防御魔法が一撃を防ぐ……かと思いきや『バリイン』とガラスを割るような音を立てバリアが壊される。
だめじゃない……っ!?!

「痛っ……!」

大丈夫、レイジングハート？」

『All right・My mas Round shie』

ld』

「きゃっ!?!」

こちらが脆いのを見て取ったのか、立て続けにワームは攻撃を繰り返した。

壊されては防ぎ、壊されては防ぎ。

これでは、レイジングハートが修復するタイミングも無い。刀身に一撃でも攻撃を受けたらアウトだ。

「く、こ、この……っ！」

『Round shield Round shield
Round shield』

右へ左へ。上から下へ。

四方八方から繰り返されるワームの攻撃を防ぐ防ぐ防ぐ……その繰り返し。

レイジングハートの正確な未来予測のおかげで防げているけれど、未だその刀身を修復する暇も無い。

「まずいわね……っ!？」

そうこうしている内に、悶えていた二体は脱皮を終えそれぞれ色違いの斑模様を持つ成虫体アラクネワームへと変化した。

一瞬その顔が笑ったように歪むのを見た後、その姿は掻き消えた……まずい!

「レイジ ……!？」

気を付けて、と言おうとする暇も無く。

目に見えぬ一撃がレイジングハートの刀身を粉々に砕いていた。

同時に、衝撃によって私は吹き飛ばされ地面を擦りながら全身に擦

り傷を量産した。

「……………ここまで、なの？」

変身は解かれていた。

衝撃によって機能が吹っ飛んだのか、レイジングハートに呼びかけても返答が無い。

やっぱり、無理させたかなと後悔する。

ワーム達は私が虫の息と見ると、ゆらゆらと遊ぶようににじり寄ってくる。

……………私も、あの男みたいに擬態されて殺されるんだろうか。

擬態した私が友達を殺してゆくことを考えると……………背筋が凍る。

そんなことになるのは 絶対に許せない。

例え、私を犠牲にしても。

「……………こうなったらっ！」

何かの金属の破片を拾い上げる。

何だろっが構わない。

それが鋭くて、私の喉を突き破ることが出来るなら。

「擬態される、前に っ！」

私は自分にケリを付けるべく、それを喉に勢い良く振り下ろした。しかし、カン、と言う乾いた音と共に金属片は吹き飛ばされた。

「……………え」

しばし呆然とする私に、聞き覚えのある声が聞こえた。

「自分を犠牲にしても誰かを守る。」

朝も言ったけど、戦士には向かない性分だね」

何事かと振り返った先は、マスクドフォームのカブトがこちらに銃口を向けていた。

「なのはっ!?!」

戸惑いと嬉しさ、そして悔しさが無い交ぜになった複雑な気分で私はカブト　　なのはを呼んだのだった。

高町なのはは込み合う『海鳴タワー』、その地下へとやってきた。まだオープンしたばかりで込み合う地上部分とは違い、地下はまだ建設途中のまま放置されていたせいで人の姿は無い。

利権の問題に折り合いが付かず、建設にストップがかかったままなのだ。

完成すれば世界初の地下アミューズメントパークとして華々しくオープンしたであろう、この場所。

そこで、高町なのはは一体のワームと対峙していた。

「やっぱりここで仕掛けてきたね」

なのはと向き合う男は、管理局に所属するSランク魔道師……に擬

態したワームである。

ワームはなのはがこの地下空間に足を踏み入れた後、満を持して姿を現した。

人の姿をかなぐり捨て、緑色のサナギ体ワームへと姿を変える。

「あなたの考えは分かってるよ。

この閉鎖空間では私は変身できない。だから、ここなら私に勝てると踏んだ」

そして、サナギ体ワームは脱皮し黄色と黒の斑模様を持つ成虫体アラクネワームへと一気に変化する。

既に勝利を掴んだと確信しているのか、獣のように吼えると手当たり次第に配管を壊し力を誇示してみせる。

しかし、なのははあくまで不敵な表情を崩さなかった。

「だけど、あなたは私を侮ってる。

私が望みさえすれば、天は私に味方する。奴は、必ず来る。

なぜなら

「

ドン、と天井を突き破りカプトゼクターが姿を現した。

嬉しそうなのはの周囲を旋回すると、その右手へと収まった。

「私は、選ばれし女なの。

変身」

『Henshin』

ライダーベルトにカプトゼクターを納めると、前回と同様ゼクターの音声と共に強大な魔力がなのはを覆う。

そして、その身を『ヒビイロノカネ』製の強力な鎧姿へと変えた。

赤と白の、メタリックな輝きを放つマスクドフォームへと。

「……ん、へえ、来てるんだ。
アリサちゃん」

カブトとなったなのはは、その生来の魔力資質をフルに使える環境となる。

その恩恵で、地上部分で戦うアリサの魔力を捕らえていた。そして、その身が危ないことも。

「しょうがないね、助けてあげる。
少し時間を頂戴」

『グルルルウウウっ！？』

言うなり、なのははカブトクナイガンで配管を手当たり次第に撃ち抜いた。

ガス管、水道管から蒸気と熱水が激しく噴出し、視界を完全に塞いだ。

フォームにも熱水がかかり、クロックアップする前にカブトは素早く移動する。

「自分を犠牲にしても誰かを守る。
朝も言ったけど、戦士には向かない性分だね」

そして、地上に出たカブトは自刃しようとするアリサを止めたのだ。
った。

「なのはっ！？」

地面に転がる私を無視し、ワーム達はカブトを包囲した。
実際私にはもう何も出来ないし、誰だってそうするだろうけれど…
…それでもなのはに負けたみたいで嫌な気持ちでした。
さっきまで『なのはを助けなきゃ！』とか思ってたのに…… 実際会
ってしまつと悔しくなる。

なのはは正面から突っ込んで来るサナギワームをカブトクナイガン
で撃ち、背後から襲う一体を避わしてアックスモードのクナイガン
で切り裂く。

その手並みは鮮やかで、泥臭く敵に体当たり気味に突っ込んでいた
私と比べるとその違いが引き立つ。

苦も無くサナギ体を全て片付けたカブトは、今度は2体の成虫体と
対峙した。

成虫体アラクネワームは前後からカブトを挟むと、その身を高速に
した。

「……………クロツクアップねっ！」

超高速で移動する2体のワームに、カブトは成す術なくその身体を
釣瓶打ちにされた。

衝撃で吹き飛ばされる前に次の一撃が入るので、まるで空中でピン
ボールの玉のように振り回される。

一定時間それが続き、やがて通常速度に戻ったワームが見えた途端

今までの衝撃が全て伝わったかのような勢いでカブトは地面へと叩きつけられた。

「なのはっ！」

そのマスクドライバーシステムにはクロックアップに対抗できる手段があるはずなの、それを探しなさいっ！」

だから、見ていられず私はあらん限りの声で叫んだ。しかし、それに対する返答は冷めたものだった。

「知ってるよ」

「……え？」

カブトは立ち上がり、身体に付いた埃を払う。その姿には余裕すら感じられた。

「この姿でどこまで出来るか試してたの」

「嘘よっ！だってそのシステムには、ゼクターの他にデバイスが」

すっと、カブトは自然に左手を後ろへ回し『何か』を取り出した。その手の上には、赤い宝石が乗っていた。

「レイジングハート、セットアップ」

『All right・My master』

きいん、と桃色の魔力光が奔り、なのはの左手には魔法の杖が現れた。

「……え」

その姿は、間違いなくレイジングハート。
今、私が握り締めている赤い宝石のものと一緒だった。

「なん、で……」

いや、良く見ると細部が違う。

私のレイジングハートには無い銃のマガジンのようなものが付いているし、大きさ自体も一回り大きい。

『KABUTO Zecter Combine .
Able to form change』

私の戸惑いなど置き去りに、カブトはゼクターの角を立ち上げる。
すると上半身と腕部を覆う装甲が展開を始め、最後に頭部の装甲もスライドし展開。

「キャスト、オフ」

『Cast off』

掛け声と共に、カブトはゼクターの角を反対側へ押し倒す。

ゼクターの背甲が開き、何かのLEDが点滅すると同時に展開した装甲が全て飛散した。

全身を覆っていた装甲が全て吹き飛び、中から真っ赤なボディを持つ第二の装甲が現れた。

『Change Beetle!』

最後に、顎のローテートを基点に折り畳まれていたカブトホーンが起立し、顔面の定位置に収まる。青い複眼を二つに割るその角こそ、マスクドライダークアブトの第二形態『ライダーフォーム』の大きな特徴である。

ワームも突然の展開に驚いたのか手をこまねいていたが、直ぐに気を取り直して高速で仕掛けに来る。

だが、ライダーフォームとなったカブトは落ち着いてライダーベルトの右腰側にあるプッシュスイッチを勢いよく叩いた。

「クロックアップ」

『Clock up』

直後、世界が鈍化した。

風が、音が、光が、全てのものがまるでスローモーション再生しているビデオのように遅くなった。

ただ、カブトとワームを残して。

自分と同じ速度の世界に居るカブトに驚いたのが、ワームは戸惑いながら拳を振りぬく。

そんな攻撃は半身を反らすだけで避け、カブトは左、右とその拳を突き刺す。

すると嫌がるようにワームは一旦飛び下がり、その口から粘質の糸を吐き出した。

カブトはそれを見て取ると、焦り無くカブトクナイガンのバレルを握り柄から引き抜く。

それは、鈍い燈色の光を放つ刀身のクナイとなった。

カブトクナイガンの第三形態、『クナイモード』である。

今まで発射していたイオン粒子を刃状に収束させ、魔力刃を融合させたこの刃は実体・魔力を問わず切り裂くことが出来る。

噴出された糸をクナイガンであしらったカブトは、ワームへ跳躍。自らの必殺である糸すら通用しなかったワームは、驚きながらも迎撃しようとして跳躍したカブトを見る。

しかし、太陽光の逆光によりその身を竦ませた。それが、ワームの敗因となった。

『グギャアアアアアツ!?!』

カブトは落下の衝撃も利用し、ワームの胸へと深々とクナイガン突き刺した。

直後、断末魔の悲鳴と共にアラクネワームは爆散。

記録こそされてはいなかったが、初のワーム成虫体撃破となった。

『Clock Over』

現実の速度へと復帰したカブトは、ワームを撃破した体制からゆっくりと立ち上がり私を振り返った。

マスクドフォームの時はどこか野暮ったい鎧を纏った印象が強かったが、今の姿はまるで違う。

赤くスマートな装甲は、どこか『速さ』を感じさせる。

「あれが……カブト」

マスクドアーマー飛散時の破片に当たり、無様に吹っ飛ばされていた私は一瞬でワームが撃破される様を目の当たりにした。

そう、正に一瞬の出来事。

私が破片に当たって飛び上がったから、地面に落ちるまでの間にワ

ームはカブトに倒されていた。

ワームと同じクロックアップシステムを搭載し、一瞬の内に敵を葬り去る。

これがマスクドライバーシステム。仮面ライダー、カブトというものだった。

「……………」

無言で私を見るカブトは、不意に何かに気付いた様子で街路を見やる。

そこには、車両運搬車の上に乗って逃げ去ろうとするもう一匹の成虫体ワームがいた。

それを確認すると、カブトは街路を出て停めてあるバイクに向かっていった。

そう、『カブトエクステンダー』である。

「あ、ちょ、まって、それ私の……………！」

焦る私を尻目に、カブトはセルを使わずキックでエンジンをかけるとスタンドを畳み勝手に発進して行った。

身長が160cmを越す姿となっているカブトは、私のように跨るだけみたいな不恰好な姿にはならない。

堂に入った前傾姿勢でエクステンダーを走らせるカブトは、『ライダー』の名に相応しい姿だった。

「もう……………」

これ、どう説明すりゃいいってのよ

その姿が見えなくなると、私は先ほどの怪我と疲れが一気にぶり返したような気がして、構わず地面にばったりと大の字に転がった。なのはが助かったのはいいけれど、先のことを考えると頭が痛くなる。

『一人で戦うな』と言われた直後に、単独戦闘。しかも、『エクステンダー』を勝手に使っている。

それも、カブトに奪われてしまった。なのはの事だ、絶対返さない。

「ああ……もうっ！明日覚えときなさいよっ！」

悔しさ8割、嬉しさ2割の感情を込めて、地面を叩く。絶対に復讐しちやると胸に秘めて。

だから、私は気が付かなかった。

あれだけの戦闘の直後だけに、完全に気が抜けていた。レイジングハートも壊れて動かない。

がちゃ、と音がして。

地下通路への扉から、もう一匹の成虫体ワームが出て来た事に。

私は気がつかなかったのだ。

カブトエクステンダーに乗ったカブトは、初めて乗るにも拘らず完璧に乗りこなして見せた。

ワームの乗った車両運搬車はそのまま高速へと乗ったので、そのままそれを追いかける。

料金所を例のようにジャンプしてクリアし、カブトはエクステンダーを車両運搬車に寄せた。

「レイジングハート、レストリクロック」

『All right. My master』

そして、左手に持ったレイジングハートに告げる。

カブトゼクターの制御に能力の大半を裂いているレイジングハートだが、簡単な拘束魔法ぐらいならばまだ使う余裕がある。

桃色の光の輪が、車両運搬車上に乗るワームを拘束せんと現れる。しかし、それが叶う前にワームは掻き消えた。クロックアップしたのだ。

「クロックアップ」

『Clock up』

それを見て取ったカブトは、即座に自らもクロックアップする。

平均時速100kmで走っている高速道の車両が、まるで亀が歩いているが如く鈍い速度へと落ちた。

勿論それはクロックアップしているカブトとワームから見た姿で、本来は皆そのままの速度で走行しているのだが。

「ハアッ！」

カブトはエクステンダーの制御をレイジングハートに任せると、そのまま跳躍。

逃げ去ろうとしたワームを空中で掴まえ、車両運搬車の上に引き摺り戻した。

いよいよワームは逃げるのを諦め、カブトへ殴りかかる。

しかし、カブトはその一撃をスウェーで避けるとカウンターで鋭い拳を腹へ当てた。

足場こそ悪いが、カブトの一撃はワームにもかなりの衝撃として伝わったようだ。

そのまま乗せてある乗用車にぶつかったワームは、その一台諸共車両運搬車から転げ落ちた。

「……………」

極限まで鈍化されたこの世界の中で、カブトは落下した乗用車に迫る車を見た。

何やらご機嫌な曲でもかけているのか、ノリノリで身体を揺らし歌を歌っている　　ような姿で止まっていた。

このままでは、彼らは訳も分からず突然出現した乗用車に頭から突っ込むだろう。

カブトは跳躍し、そいつらの乗る乗用車へと着地。

二人を引き摺り出すと、目に付いた車両運搬車のクレーンの先にも引っ掛けておいた。

『Clock Over』

そして、カブトは現実の時間へ復帰する。
あまり長い間クロックアップしていると、身体の方が持たなくなる。
そのため、自動的にゼクターがクロックアップ状態を解除する機能が
が付いていた。

「え、ええ？」

「え……うわ？」

突然クレーンの先に移動した男二人と、それを見た車両運搬車の運
転手は同時に驚愕した。

同時に彼らの乗っていた乗用車が転げ落ちていた車に激突し、派手
にクラッシュした。

カブトはその様子を見やると、クレーンの上から高速道を飛び降り
る。

それを好機と見て取ったワームは、手から糸を吐き出し車道でスク
ラップとなった二台の乗用車を掴むと、一気にカブトを追って飛び
降りた。

カブトは空中でワームの意図を悟ったが、既に着地するまでどうし
ようもない。

ライダーフォーム時は空中の慣性制御などの少々処理能力を裂かれ
る魔法は使用できないのだ。

そのまま大人しくカブトは着地するよりなく、その頭上めがけて二
台の乗用車が激突した。

ガソリンに引火し、派手な爆発が起こる。

「グルウウウ……」

その様子を、目を細めて見やるワーム。

今度こそカブトを倒したと見て引き返そうと思つても、直ぐに気付いて振り返る。

爆発が起こったそばで、むくりと立ち上がるカブトに。無言でワームを見るカブトに、恐れをなしたのか後ずさるワーム。そして何を思ったか、突然ワームは雄たけびを上げた。

『グルルオオオオオンっ!!』

構わずワームへ歩き出すカブトだったが、直後に気配を感じて飛び退る。

「グアアアルッ！」

「お前は……」

横手から不意打ちを仕掛けてきたのは、黒い獣。

昨日取り逃がした『ジュエルシードモンスター』であった。

「やはりワームの手駒になっていたんだね。

でも、あまり賢い使い方じゃない」

例のように芸無く飛び掛ってくる獣を片手であしらい、足払いをかける。

派手に転がる獣を横目に、飛び掛ってくるワームの攻撃を避けて腰の回転を加えた肘撃ちで吹き飛ばす。

黒い獣とワームは、それでもなお起き上がると、素早くカブトの背後に回り同時に攻撃を仕掛けるべく突撃。

カブトはそれに向き直りもせず、落ち着いてゼクターの上部にあるプッシュスイッチを順に押していった。

『One』

『Two』

『Three』

ゼクターがナンバーを数えた後、一度ゼクターの角を左側へ戻す。ゼクターの制御システムがフル稼働し、タキオン粒子がチャージされる。

「ライダー……」

キック」

『Rider kick!』

一気にゼクターの角を戻すと、音声と共に波動化したタキオン粒子がゼクターから体表面を通って頭部カブトホーンへと収束する。

そして大気に触れ、波動化したタキオン粒子が眩い光を放ちながら一気に左足へと収束した。

襲いかかろうとするワームと黒い獣は、構わず体当たりする勢いでカブトを狙う。

背後をさらすカブトの姿は、いかにも隙だらけに見える。

しかし、既に準備を終えたカブトにとって、それは単なる自分の間合いへの誘いに他ならなかった。

気配だけで彼我の距離を測ったカブトは、右足を踏みしめしっかりと腰を安定させる。

そして、タイミングを計って背後を振り向き、思いっきり体重を乗せた左足を居合い切りのように一閃させた。

「ハアツ！」

それは奇しくも、昨日の一戦で黒い獣へ向けて放ったものと同じ蹴りであった。

しかし、今度は威力が違う。

ライダーフォーム時の筋力と魔導力により、物理衝撃のみでそれは優に19tの威力を誇る。

更に波動化したタキオン粒子をぶつける事により、通常物質と反応させて原子崩壊を引き起こす。

いくら魔法耐性を持つが、いくら無限の回復力を持つが。

その一撃の前に生きていられるはずもなかった。

ワームと獣は、共にぶつけられたタキオン粒子と反応し派手に爆散した。

カブトは背後で吹き飛ばす2体を見ることも無く、その右手で天を指す。

それは誰に言うまでも無く、我こそが最強、と宣言しているかのようだった。

天の道を往き、総てを司る女

「……すごい」

その様子を、物陰から見守る者があった。

僕 ユーノ・スクライアはただただの圧倒的な光景を驚愕の面持ちで見守るより他に術はなかった。

「管理外世界であんな兵器を作っていたのも驚きだけど……」。

あれを完璧に使いこなしてるあいつは一体……」

僕は『ZECT』のジュエルシード捜索部隊に編入されていた。

この役目だけは、例え禁止されてもやらなきゃいけない事だと思っている。

そして漸くジュエルシード反応を見つけて急行してみれば、そこには戦闘中のワームとカブトがいた。

いや、戦闘と言うが終始カブトがワームを圧倒していた。

途中でジュエルシードモンスターが参入したが、カブトは歯牙にもかけず2体とも殲滅してしまった。

あのような兵器開発を行っている管理局にも疑問を持ったが、一番の関心事はそれを使っている人物だった。

ユーノが見た所、あれはとてつもない魔導力のキャパシティと細かい制御能力を併せ持たなくてはならない。

『時を操る』に近い大魔法に加え、破壊力とその方向性にも気を配らなければいけないのだから。

特に最後の一撃は、使い方を誤れば次元震とまでは行かないが大気と連鎖反応して周囲数十km圏内を吹き飛ばしてしまいかねない。

正確に反応をコントロールする魔導力と、狙った所に当てる正確さが要求される。

知力、体力、そして魔道の才。

どう考えても、オーバーSランクの魔導師にしか扱えはしないだろう。

「何者なんだ……一体」

カプトへの興味は尽きないが、その前にやる事がある。

ジュエルシードモンスターが吹き飛んだ後に、転がっている青い石。あのジュエルシードは宿主を失い、完全に反応が消失している。

「……あの」

僕は物陰から姿を現し、カプトに言った。

「始めまして、僕はユーノ・スクライアと言います。

突然で申し訳ありませんが、あなたにお願いがあります」

「……」

カプトは無言で、僕を見下ろした。構わず続ける。

「そこに転がっている青い石。あれは『ジュエルシード』と言い、とても危険なロストロギアです。

『願いを叶える』性質を持つ石ですが、その中に蓄えられた魔導力によりこの世界を引き裂くほどの力を秘めています。

これを移送中に謎の攻撃を受け、この世界……この海鳴市に21個ばら撒かれてしまいました」

「……それで、私にどうしろと？」

意外に高い声で返答があったことに、僕は驚いた。中身は女性かも

しれない。

しかし、僕は意を決して話を続けた。

「封印してください。そして、あなたが保管してください。」

そのシステムが使えるほどのインテリジェントデバイスならば、出来るはず」

カブトの持つデバイスは、僕の持っていたレイジングハートに瓜二つだった。

しかし、細部が色々と異なっている。

カブトによる改修が施されていると考ええると、兄弟機か何かかもしれない。

それならば、封印は無理なく行えるはずだった。

「君は管理局の者じゃないのかな？」

今は反応してないみたいだから、君が持って帰ればいい」

「……いえ、あれはあなたが倒したものです。」

だから、あなたが持って行って下さい」

「……へえ」

カブトはどこか面白そうな声を出し、僕を見る。

「どうやら、単に管理局の者……って訳じゃないようね。何者？」

「僕はこの『ジュエルシード』の発見者です。管理局の人間じゃありません。」

今は管理局に協力していますが、この世界にばら撒かれた責任は僕にあります。」

でも……理由はそれだけじゃない。この世界にいる管理局『ZECT』はどれも怪しい」

僕は、そうカブトに告げた。

そう、『ZECT』はどれも色々な秘密を持っている。彼らの行為は管理局法に照らせば違法となる事ばかりだが、黙認されている。

それに独自の装備開発まで行っているとなると、その組織構成・資金系統がよほどしっかりしていないと出来はしない。

本局が裏で動いているのか、それとも管理局の一部が外部の営利団体と結びついているのか。

僕は後者と見ているが、現時点ではまだなんとも言えない。

だから、そんな団体にみすみす『ジユエルシード』を渡すのは気に食わなかった。

「……いいよ。丁度私も管理局には疑念しか沸かなかったところだし。

でも、これを私が悪用するとは考えなかったの？」

言いつつ、カブトはゼクターの角を左側に戻す。

『Put On』

ゼクターが音声が流れ、カブトはもう一度ヒイロノカネ製の装甲で覆われた。

あまり制御能力を使用しないマスクドフォームへと戻ったのだ。

「……ええ。こんな事言っちゃうと、論理的じゃないんですけど。

なんでかな……その、あなたなら『大丈夫』って気がするんです」

「……」

「あなたから湧き上がる桃色の魔力。それを見ると、なんでか、懐かしいような、悲しいような……。」

とにかく、この人なら信頼できる……そう無条件に思ってしまうんです。

……変ですよね」

なんでか頬が赤くなり、僕はぽりぽりと頭を掻いた。

今言った事は嘘じゃない。なぜだか分からないが、この人とは昔会った事があるような気がするのだ。

どう記憶をほじくり返してみても見つからないけれど、確かに話したことがあるような……気がする。

「……そう。それなら遠慮なく貰っていくよ。

そんな危険なものなら、私が全て集めるほうが一番安全なもの」

「……え？」

「決めた。ジュエルシードとやらは私が全て集める。管理局には渡さない。

……それでいい？」

「え、あ……うん」

カブトはガシャリとデバイスを構えると、ジュエルシードに向けた。

「レイジングハート、エクセリオンモード。

ドライブ」

『Ignition』

彼女の杖　　アリサに渡したのと同じレイジングハートと言うらしい

は、カートリッジを排莖させパーツが組み変わると、槍のような形状へと変化した。

恐らく、あれがフルドライブモードなのだろう。

「ジュエルシード、シリアル？、封印」

『Sealing』

封印術式が起動し、魔力の網による連鎖反応阻害封印が施されたジュエルシードがレイジングハートに格納される。

初めての作業だと思うが、実に手際よく無駄の無い術式だった。

「……以前にも、こついう事をしたことが？」

「いいえ。無いよ」

「そう、ですか……。」

何れにせよ、ジュエルシードは危険です。十分に注意して

「私を誰だと思ってるの」

そこまで言ったところで、カブトは僕に背を向けた。

そして、天を指す。

「私は天の道を往き、総てを司る女よ。

石ころ如きに、この世界を壊させはしない」

太陽を背にそう言い切るカブトは、僕の疑念とか不安を全て吹き飛ばすぐらいの力強さに満ち満ちていた。

そして、今更言っても詮無い事を思ってしまう。

僕は彼女にこそ、この世界で最初に会うべきだったのかもしれない、と。

「カブトが、覚醒しました」

「……そうか、終にカブトが」

ぎい、と椅子を揺らし、時空管理局提督 ギル・グレアムは瞑目した。

彼のデスクは、今は海鳴市某所にある。

時空管理局特務部隊『ZECT』の司令官としての地位を持つ彼は、日夜ワームとの激しい戦いにより目の下に濃い隈を作っていた。

「しかし、我々ZECTに属さない者がライダーになる事は許されません」

グレアムに向かい、その鋭利そうな瞳を細いフレームの眼鏡を通して覗かせる男はアレックス・ランクスと言う。

元々は管理局アースラ付きのオペレータであったのだが、その能力を認められてグレアムの側近となった。

実質、『ZECT』を動かしているのはアレックスであると言っても過言ではないだろう。

「君は、梟は好きかね」

「……は」

突然、グレアムは一見脈絡の無い話を振ってきた。

この上司は婉曲的な物言いが好きなので、そこから具体的な命令を考えるのはいつもアレックスの仕事だった。

「例え獲物が暗闇に紛れ、息を殺して隠れていても……鋭い爪で仕留める。」

……見事なものだ」

今回は、割と分かりやすい。

つまり、隠れた獲物　カブトを鼻の如く見事に探し出して見せよというのだ。

「……必ず、探し出して見せます」

「うむ」

頭の中で捜索隊の編成を考えつつ、アレックスはグレアムに一礼した。

いつか必ず、この上司さえ超えて見せるという野心を抱きながら。

そして、ギル・グレアムは回想する。

漸く、始まった。

あの不幸な事件を発端にした、長く遠い計画が実を結んだことを。

これで　『こんなはずじゃなかった』未来を変えることが出来るかもしれない、と。

目が覚めた時、私は芝生の上で寝転んでいた。辺りには、焼け焦げたような臭いと煙の跡がある。

そう、ワームとの戦闘跡だ。

「私……そっか、なのはに助けられたんだっけ」

そして、今までの一部始終を思い出した。

レイジングハートは砕かれ、擬態される前に自決しようとしたその時。

『カブト』となったのはが間一髪私の刃を止め、助けに入ったのだ。

「……そうだ。後を追わなくちゃ」

そして、カブトは逃げたもう一体のワームを追って『カブトエクステンダー』で走り去ってしまった。

ワームも気になるが、あのバイクは私が勝手にZECTから借りたものだ。

あれを取られたら、私はもう言い訳のしようも無くなってしまう。

私は傷ついた身体を無理やり起こすと、未だに濃く残る『カブト』の魔力の跡を追跡したのだった。

天の道を往き、総てを司る女

未だ炎で燻る現場に私が到着したのは、それから1時間後のことだった。

市内のはずれを走る高速道の下にある、廃車等を集積している言わばゴミ捨て場で、その攻防は行われたようだった。

「……アリサか」

「クロノ……」

そして、現場には既にZECTのチームが到着して現場検証を開始していた。

私を見つけたクロノは、いつになく厳しい表情で私を呼んだ。

「……身体の調子は大丈夫か」

「あっちこち痛いけど……とりあえず、大丈夫みたい」

「そうか」

それだけ言うと、クロノは私に背を向けた。

代わりに、駅まで私を車で送ってくれた女性が「大丈夫？」となぜか涙目になって私の身体を心配してくれた。

意外に親切な対応に私が困惑していると、クロノが背を向けたまま私に告げた。

「警告を無視したな」

「!.....」

背を向けているせいで顔は見えないが、その言葉は剣のように鋭く私を抉った。

「命令を守れない者に、ZECTは務まらない。

.....いや、こう言い換えよう。

人の言う事を聞けない者は、人として信用することができない」

「ちよつとクロノ君言い過ぎよっ!」と、私の身体を見ている女性に憤ったが、その言葉はそんな防壁も軽くすり抜けて直接私の心に突き刺さった。

「.....ライダーバイクはどうした?」

「その.....カブトに、取られちゃって.....」

「.....」

眉間に寄せた皺に指をあてる仕草がどうにも胸に入っているのは、彼が何度もこういう苦勞を背負い込んできたからだろうか。

「.....この件に関しては、僕の管理不行届きと監督責任もある。君に何らかの刑罰を与えることはない、とだけ保証する。

だが、君の民間協力者としての登録は取り消させても

らっ

「.....待って、お願い、何でもするからっ!だから、私にも手伝わせて!」

私は女性を振りほどき、クロノの背に縋りついた。

「.....どうしてそこまで固執する。」

元々君にはあまり関係のない話だ」

確かに、私自身ワームにそこまで固執する思いは無い。
ジュエルシードに関してはユーノ君を助けてあげたいという思いは
あるけれど、ならばZECTでなくてもいい話だ。

どうして私がZECTに固執するのか……それは、間違いなく「彼
女」のせいだろう。

「……そうかも、しれない。

でも私は……」

「……」

そう言っつて、俯く私をクロノは横目で暫く見つめた後ため息をつい
た。

「……本当に、雑用しかない。それでも良いのか？」

「……はい、はいっ！よろしく、お願いします！」

疲れたように言うクロノに、私はここ何年かぶりに心から頭を下げ
た。

「君のレイジングハートの修復には2、3週間……いや、君用に調
整を考えたら1ヶ月はかかると技術部は言っていた。

その間、君はジュエルシードの封印はできない。当分はZEC
Tの搜索チームにくっついてジュエルシードの搜索のみを行うとい
う事だ」

「はい……」

破損したレイジングハートは、ZECTによって修理と調整が行わ
れることになった。

その間は、本当に私のすることは何も無い。

しいて言うなら魔法を覚え、付いて行けるようになる事だろうか。

「……………それから繰り返すが、今後このような単独行動は絶対に慎んでくれ。」

もう一度今回のような事態を引き起こしたら、今度こそZEC Tから追放する。いいな？」

「は……………はいっ！」

念を押すクロノに頭を下げながらも、私の脳裏には「彼女」の事しか浮かんでいなかった。

「ただいま……………」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

家に帰りついたのは、午後6時を回ったところだった。

疲れてはいるが、傷は全て回復魔法で治ったので身体は問題ない。

でも、何時ものように変わらず迎えてくれる鮫島が、今は少しうっとおしかった。

「……………ご飯は？」

「……………用意しております。」

しかしお嬢様、その前に少々お聞きしたい事がございしますがよろしいですか？」

「……？何よ」

いつもなら、何も言わずに淡々と家事をこなす鮫島が今日は少し様子が違うようだった。

なにやら真剣な目で私を見るので、私も身構えて鮫島の言葉を待った。

「本日、お嬢様がお一人でワームに向かって行ったというのは本当ですか？」

「……聞いているんだ。そうよ、その通り」

ZECTは、鮫島にその情報を流していたようだ。

いや、未だ未成年の私を危険な作業に放り込む者として、情報開示は必要なのかもしれない。

そのことについてとやかく言うつもりはないが、鮫島に確認を取られるのはなぜかイライラした。

「何故……と、お聞きしてもよろしいですか？」

「……うるさいわね、私の勝手よ。」

それより早くご飯を

適当に切り上げてダイニングに向かおうとした私を、鮫島は遮った。私は驚いて立ち竦んだけれど、次の瞬間それ以上の怒りで私の頭は一杯になった。

鮫島の横を押しつけて向かおうとするけれど、なぜか先回りして鮫島は遮る。

「どきなさいよっ！」

「失礼します」

鮫島の一礼に一拍遅れ、衝撃が私の頭を揺さぶった。しばらく動けなかったが、頬に走るジンジンとした痛みがようやく鮫島にぶたれたのだという事実を認識させた。

「…………え、あ」

鮫島は振りぬいた手を戻し、また優雅な礼の形を取った。

私は怒りよりも驚きが先行し、鮫島に対して言う事は他になかった。

「主人に対し手を挙げた罪、如何様にも受ける所存でございます。

しかしこの鮫島、この家の留守を預かる者として、お嬢様が危地に飛び込む事を見捨ては置けません」

「…………さ、めじま」

私はふらふらと、後ずさった。

この鮫島という男は、今まで私に楯付いた事など一度もなかった。しかし、今は…………違う。

無表情を装うとしている深い皺の刻まれた顔には、確固とした意思が感じられる。

それが本気で自分を心配しているのだと分かった時、私は堪らず飛び出してた。

「お嬢様、ご両親を思いなされ」

私の背中にかかる鮫島の言葉が、やけに重く感じられたのだった。

夕方から降り出した雨は、夜半にかけて大きく降りだしていた。鮫島にぶたれて飛び出した私は、着の身着のまま雨に打たれて走り続けていた。

どこをどう走ったのかは、まったく覚えていない。

今はただ、何もかも忘れ去りたい気持ちで雨に打たれていたかった。

でも、そんな態度がいつまでも続くわけが無い。

人は走れば疲れるし、お腹もすく。

夕食も食べずに雨の降る夜の街を走り回った私は、情けなくも肩で息をしながら疲れきって座り込んでいた。

時折すれ違う人たちが、皆訝しげに私を見ながら去ってゆく。

こんな夜更けに、小学生が傘も差さずに歩いていれば目立ちもするか。

ぐう、という正直なお腹の鳴き声を隠しながら歩いていると、不意に何処かから良い匂いが漂ってきた。

雨の中にあつてなお芳しいその香りは、味噌の匂い。

思わずその匂いの元を辿ると、一軒の料理店に辿り着いた。

看板を下げ「CLOSE」の札が下がっていたが、明りは付いているし確かに匂いはここからやってきている。

問題は、それが「フランス料理専門店」である事だった。

「……何なの、このお店？」

フランス料理専門と謳いながら、香ばしい味噌の香りがするお店。

私は興味をひかれ、無駄と分かりつつも入口をドアを引いた。

が、予想に反しガチャリとドアが開き「ちりんちりん」と入店を告

げるベルが鳴り私が逆にびくりと驚いた。

「いらっしやい。すみませんが、今日はもう」

店内は、小ざつぱりとした丸テーブルが5席ばかりある小さなお店だった。

椅子を上げて片づけていたと思しき青年は、入ってきた私の様子を見て目を丸くしていた。

「一体どうしたんだい。こんなに雨にぬれて……ああ、いや、取り合えずタオルを持って来よう」

大学生ぐらいのアルバイトと思しき青年は、一度奥に戻ってタオルを持ってきた。
ばさりとかけられる布の感触と、丁寧に水気を拭き取る手の優しさが妙に心に染みわたって、思わず涙が零れ落ちた。

「ほら、大丈夫。もう安心だよ」
「う、ふえ」

ぐずぐずと泣き出した私に、青年はその大きな胸に私を抱いてポンポンと背中を叩いてくれた。
感情があふれ出して、もう泣く事しかできない私を嫌がりもせず、ずっと抱きしめてくれたのだ。

「……落ち着いた？もう大丈夫？」
「……ふあい」

暫くそうしてくれていると、ようやく私の心も落ち着いて妙に気恥ずかしくなった。

男の人……いや、お兄ちゃんが居たらこんな感じなのかな、と思うと顔が火照って仕方なかった。

「さて、落ち着いたのなら事情を話してもらえるかな？」

「はい、ええと」

青年の優しそうな顔を見る事が出来ず、下を向きながらもじもじする私。

質問に答えようと顔を上げた時、どこかで聞いたような無遠慮な声が割り込んできた。

「何だ、アリサじゃない」

「……え？」

驚いて声の方を見やると、そこには片足を組んで料理 鯖味噌 を食べているのが居た。

「なんであんたがここにいるのよっ!？」

「それはこっちのセリフだよ。」

「ここは私の行きつけのお店だからね」

私は泣いているところを見られた気恥ずかしさも手伝って、なのはに向けてがぁーっと捲し立てる。

しかしなのはは何時ものマイペースを崩さずテーブルの料理を平らげていた。

「これって……鯖味噌？ここフランス料理のお店なんじゃないの？」
「分かってないね。」

良い店は賄いこそ最高に美味しいものなの。特にこの鯖味噌は私が作るよりうまい。

「誇っていいよ、キョウヤさん」
「はあ……」

そういうのはは、件の青年　　キョウヤと言つらしい　　に
親しげな微笑みを投げかけた。
セリフこそ何時ものなはだけれど、あそこまで優しげな笑顔を浮かべるのは私は見たことなかった。

「……これ、あなたが作ったの？」

「ええ……料理はあまり得意じゃなかったんですが、このお店にバイトし始めてから少しづつ覚えていって。

まだ、賄いしか作れないですけどね」

そう言つて微笑む青年は、どこか輝いて見えた。

なんだか、つまらない事で争いを起こしていた自分が馬鹿みたいに思えてくる。

……まあ、実際馬鹿なんだろう。

なのは何かに言ったら、確実に笑われること間違いなしだ。

「……なんか、もうどうでもよくなってきた」

私がどれだけ悩んでもなのはは美味しそうに鯖味噌パクついてるし、世界は何も変わらない。
結局は、その程度なのだ。

「ところで、どうしたのアリサ？」

ベそかいて街中を走り回ってたって事は、鮫島さんにも怒られたのかな？」

「なっ！そんな、わけ……」

なのはは意地悪そうに笑いながら、ずばりと物事を当てて見せた。こつこつ直感まで鋭いとは、この憎い女はやはり侮れない。

「大体、なんでアンタが鮫島の事知ってるのよっ!」

「一度、料理について教えを受けたことがあるの。」

私を世界の宝とするなら、あの人は人類の宝だね。大事にしなさい」

「……あ、そう」

どうやら、なのはと鮫島は妙な繋がりを持っていたようだ。

「……それより、私もおなか空いてきたんだけど」

「鯖味噌はあげないよ」

「いらな……くは、ないけど……今日はいいわ。」

鮫島が待つてるだろうしね」

「そう」

なのははまたにんまりと笑って、鯖味噌の最後の一切れを口に運んだ。

幸せそうに食べるもんだから、怒るつもりが毒気を抜かれてしまう。でも、なんだろう。なんとなく、これが全部なのはに仕組まれたような気がしてきた。

「じゃあね、ありがとうキョウヤさん。」

「……それとなのはも」

「うん、大いに感謝してね」

「べーっだ!」

ボタン、と後ろ手に扉を閉めると、空は既に雨が上がっていた。雲の切れ間に見える星々が、綺麗に輝きだしたような気がして、私

は意気揚々と歩き出したのだった。

しかし数分後。

私はお店のドアをがちりと開け、お茶を飲みながら寛いでいるなのはに言ったのだった。

「……………」

「……見つけた、こっち！」
「うん！」

その日、私はユーノ君とジュエルシードの反応を追いかけて街中を走り回っていた。

ZECTのジュエルシード封印チームから一時的に抜けた私

アリサ・バニングスであったが、搜索チームの一人としてまだ関わりを残していた。

今はレイジングハートが修理中なので、ZECTから借りた一般用ストレージデバイスを持って搜索している。

これが中々扱いが難しく、『願う』だけでオートでやってくれたレイジングハートとは違い一々術式を組まなければならない。

お陰で魔法の知識は増したけど、扱いきれているかと言えば答えは『NO』だ。

管理局基準で基本に考えられている、射撃魔法が1つ。それと補助魔法が一つ使えるようになったぐらいなのだから。

「ウワンッ！」

「あの犬が啞えてる！」

「分かってるわよ……！」

そして漸く地道な搜索が実を結び、私たちはジュエルシードの反応を発見した……のはいいのだが。

突然何処かから現れた子犬に掻っ攫われて、今必死でその子を追いかけている最中なのである。

「はぁ……はぁ……すずか、でも、連れて、来るべき、だった、か

しら」

もうどれくらい走ったか分からないけど、基本的に犬の運動量に人間様が追いつこうと考えるのはおかしい。

その点、一見おしとやかな私の親友その1ならば軽々と追いついて首根っこ押さえてそんな体力をしているのはどういう事なんだろうかと。

……まあ、彼女をこのへんな事件に関わらせる気はないのであくまで想像の域を脱しないのだが。

「……大丈夫、大分人気のないとこまで追い込んだから、ここからは魔法で一気に追い込むよ」

「分かったわ」

そうこうしている内に、ユーノはお得意の結界魔法で子犬の針路を遮ってゆく。

追い詰めるのも時間の問題か……と思ったその時。

「「メアリ！」」

「ワウン！」

「……え？」

子犬は、一人の女性の胸に飛び込んだ。

年の頃は女子大生風。何処かをジョギングしていたのだろうか、白のスポーツウエアで纏めた女性だった。

子犬を持ち上げ、あやす姿は一見どこにでもいるペットと飼い主だ。

そう、飼い主が『二人』いなければ。

「ち、ちょっとあなた、メアリを返してよっ！」

「あなたこそ、何よ？私のまねをしないでよ！」

「……あちゃー」

鏡写しのようにそっくりな二人は、子犬を求めて大岡裁きの真似事を始めだしてしまふ。

「返してっ！今日は約束があるんだから！」

「！ッ……それは私も一緒よ！」

「……きゃあっ!?!」

揉みあう二人の内、片方がもう片方のヘアバンドを掴んで強引に倒すと子犬を抱えて走り去ってしまった。

「あ、ちょよ!……ちょっと待ちなさいっ！」

思わず駆け出そうとした時、倒されたお姉さんが気を失っているのが見えた。

頭を売つたらしく、じくじくと出血が広がるのが見えた。

「あゝ……もう！ユーノはこの人をお願い！」

「分かったよ。見失わないように気をつけて」

「当然よ。逃がすもんですか……ッ！」

叫び、私はお姉さんの 『ワーム』 の後を必死で追いかけて行ったのでした。

天の道を往き、総てを司る女

「はあ……はあ……足、速すぎ……よ」

そして今。

私は息も絶え絶えにお姉さんの後をゆつくりと尾行することに成功していた。

女子大生と小学生の体力を比較してもしようがないけど、お姉さんに追いつくのにはかなりの労力が必要だった。

たぶん日課でジョギングでもしてたであろうお姉さんは、スピードは兎も角持久力がはんぱない。

私がか振り切られずに付いて行けたのは、ゼクトでの体力訓練と称した走り込みと持ち前の負けん気であると信じている。

「……こちら、アリサ。敵ワームを尾行中。ジュエルシールドも持っていることを確認したわ」

『全く君は……』

とりあえず了解した。場所は魔力探知で判明したから、直ぐに人員を送る。君は危険だから直ぐにその場を

『

嫌よ。ここで目を離したらワームが別の姿に擬態するかもしれないじゃない。

「このまま尾行は継続するわ」

ワームの擬態は完璧に見えるが、実はそうでもない。

既に擬態中のワームは常人と比べ最大10 ほど体温が低いことが確認されている。

最も、個体差もあるだろうしそれで完全にワームと見分けられるか

と言えばそれは『ノー』だ。

10 違う個体もあれば、2、3度しか変わらないワームだって存在するのだ。それでは単に体温の低めな常人と変わりはない。

だからここで見失ってしまったては、ワームかどうかなど判断する術は無くなると言って良い。

『……分かった。だが、今の君はあくまでジュエルシード探索班の一員であり、ワームの撃滅は任務外だ。』

もしワームに手を出した場合は即刻除名させてもらう。いいな？』

「……わかったわよ」

『無理はするな』

それを最後に、クロノとの通信を切った私ははあ、と僅かな緊張で震える喉をため息で緩ませた。

「無理はするな……か」

通信を切る前のクロノの表情はまるで幼稚園に始めて通わせる、過保護な親の顔に良く似ていた。

クロノはあまり感情的な表情は表に出さない男だが、それ故に今私が置かれている状況を慮ってくれているのが分かる。

……それ自体は嬉しい、有難いと、頭では分かっている。

でも、だけど。

それを踏み倒してなお、私を突き進ませる何かがある。それが何かは、まだ分からない。

でも、『彼女』がそれを握っているというのなら

「私は前に進むからね。後悔なんか、追いつけないほどのスピードで」

私は最後に自分の両頬をぺちんと叩いて気合を入れなおし、お姉さんの尾行を再開した。

そして、丁度、その時。

「あれ……鮫島？」

繁華街へ逃げ込んだお姉さんは人ごみに紛れるかの如く、こちらの尾行を撒こうとした。

なので私は最大限物陰に隠れつつ魔法 『サーチ』を使ってお姉さんを追跡していた。

これが私が覚えた補助魔法 『サーチ』だ。

これは魔力を波のように放射して反射してきた形を拾って先の情報を拾う魔法。現実世界で言うレーダーとかソナーに近い。

当たった物体の魔力位相により、人には人の、物体なら物体の形が変調された反射波から読み取ることが出来る。

そしてその作業に没頭していた私は、ついと視界の端に見慣れた人影を見つけて一時中断した。

確かに、いつもの執事姿の鮫島が街中を歩いていた……気がしたのだ。

「……あれ？」

しかし、『サーチ』に没頭していたせいかわりにその姿を見失ってしまう。やはり見間違いだっただろか。

そもそも、5時近いこの時間は屋敷で夕食の準備に追われているはずである。ならば、あれは他人の空似という奴だろう。

「あ、まずい」

そうこうしている内に、お姉さんに大分距離を空けられてしまった。私はもう一度精神を集中し、『サーチ』をする……よかった、まだ2ブロック先を歩いている。私はそれを確認すると、追いかけるべくビルの陰から飛び出して、付いてゆく。お姉さんは歩きに移行しているので、私も感付かれないよう歩きながら後を追う。

ストーキングの経験はないが、人ごみのごった返す繁華街では『サーチ』を用いて探れる私は有利だった。最も、1Km以上の距離を空けられると私の『サーチ』は途端に精度を落としてしまう。

どうも私の魔力周波数特性は距離が大きくなると減衰率が途端に悪くなるらしい。射撃系魔法との相性は最悪だ。しかし、その振幅（大きさ）は一般の魔導師に比べ高くなっている。零距离ならば3dBほど高い……つまり2倍の強さを誇る。あの時、射撃魔法に頼らずに接近戦を挑んだ私のカンは外れていなかった、という事だ。

まあ、とにかくそんな訳で私の『サーチ』圏から逃さないよう慎重に後をつけていたのだが、次の物陰から姿を現したとき。

急に、お姉さんは後ろを振り返った。

「……………っ!？」

喉から漏れそうな呼吸を無理やり飲み込み、私は視線を落として逸らした。

わざとらしく咳などして見せつつ、さも関係ない一般人のようにそのまま歩む……のだが、どうもお姉さんからの不審の視線が外れな

い。
考えてみれば、お姉さんが争っている場面で私たちは姿を見せているのだから、私の事を見られていてもおかしくはない。
咄嗟にポケットに忍ばせたストレージデバイス『RS02B』を握り締めながら、私は顔を上げた。

「……………」

お姉さんはとうとう立ち止まり、私のことを不審そうに見るそぶりを隠そうともしない。

子犬のほうは相変わらずキャンキャン煩く吼えながら飼い主に擦り寄っているが、その口に啞えられた『ジュエルシード』がいつ発動するかもしれないと考えると恐ろしい光景ではあった。

「……………」あの

「……………」はい、どうしたの？」

私はここで、覚悟を決めた。
応援を呼んでから既に十数分。クロノ達はもう間も無くやってくるはずだ。

ここでお姉さんを見無視して歩み去ってから、もう一度尾行する手もあるが相手の背を向けての尾行はかなりリスクだ。
その間に逃げられるか別人に擬態されでもしたらもう追いかけるしかない。

……………ならば、ここで会話して時間を稼ぐより他にはない。

「ずっと私の後をつけてるみたいだけど……………どうしたの？」

「……………」

さあ、困った。

ワームの擬態と思われるこのお姉さんは、あくまで白を切るつもりか怪訝そうな顔で私に問い掛けた。

その表情は困惑の中にも何処か私の事を案じている様な色さえ読み取れて……ワームの『擬態』の恐ろしさを改めて実感する。

だが、ここで言い淀んでも居られない。不審がられる前に、私はお姉さんの目を見返した。

「ええと……私の持つてる石をそのワンちゃんが持って行っちゃって……。ずっと追いかけてただけど追いつけなくて。」

それで、暫くしたら貴女が現れたから」

「ああ、そう言うこと。ゴメンね。」

「こら、メアリ！それを離しなさい！」

「ワウンッ！」

私は敢えてジュエルシードの件に絞り、真実のみを話してみるといとも呆気なくお姉さんは子犬を叱りなんとジュエルシードを取り返すと私に渡してきた。

「……………え？」

「ほんとにゴメンね。大切なものなんでしょ？……お詫びに何かおごつてあげよっか？」

「あ、その……ほんとにいいの？」

「勿論よ。大人にたかるのは子供のうちの特権なんだから。今のうちにはじゃんじゃん奢られちゃいなさいっ！」

「いいの？とは『ジュエルシードを渡してしまつて良いのか？』という意味で言ったのだが、お姉さんは都合よく勘違いしたらしい。

私は暫く唾然としたが、お姉さんの力強い向日葵のような笑みについこくと首を縦に振ってしまうのだった。

「じゃあ、行きましようか。美味しいシュークリームのお店があるの」

「!?!」

そして、事態は次のステージへと移ろうとしていたのだった。

特務部隊『ZECT』における指揮命令系統は、実は一般の時空管理局のように明文化されている物はない。

それはこの『ZECT』自体がイレギュラーな存在であり、せいぜい数個単位の『部隊』とそれを指揮する『部隊長』、そして部隊長を管理する『司令』が存在するのみである。

平時の部隊ならばこんな曖昧な編成では行軍すらままならないだろうが、兵士総てが『特殊部隊』扱いの『ZECT』は逆に好都合だった。

作戦や用兵に合わせ、毎回参加人数や兵装、装備を入れ替え常に消耗激しい『ZECT』ではトップダウン型の組織構成ではやっていけないのだ。

現場の判断に全部隊が合わせ、必要と判断したら援軍を貰う事も現場部隊長の一存で可能な逆ピラミッド型構造が『ZECT』という組織である。

現場に居合わせれば末端の部隊員とて『指揮官』となり得るといいうある種の団結意識を持った集団であった。

そんな中、僕　　クロノ・ハラオウンは『部隊長』という地位を
持った人間である。

部隊長は何人か居るが、上記のような理由から僕はある意味会社で
言う幹部社員に近い存在だった。

指揮命令系統の『頭』の一つであることはいわずもだが、部隊員の
マネジメントをも請け負っている人間だ。

だから、彼女　　『アリサ・バニングス』を預かった時も、その
契約から保険関係まで面倒を見ていた。

彼女は知らないだろうが、この世界ではかなりレベルの高い契約賃
金と生命保険を自らにかけられている。

入院保障や手術手当なども抜かりなく、彼女が一度怪我をすれば保
障関係の書類が僕のデスクに山のように積まれる事になっているの
だ。

……まあ、それについては自業自得だと諦めているが。

「それにしても……やっぱり彼女の突撃癖は治ってないみたいだな」

「あはは……子供は元気が一番、って言うじゃない」

ため息と共に吐き捨てた言葉は、僕の副官である『エイミィ・エミ
リエッタ』に拾われた。

彼女は僕の副官という職業柄、書類の処理などを行っているので彼
女という厄介な人材を良く分かってしている筈だ。

だが、その持ち前の明るさと柔軟さは僕の陰気と頑固さを丁度打ち
消すかの様に対極的だ。

「とにかく……ワームが現れたことは間違いないようだな」

「うん……いえ、はい。ユーノ君の携行デバイスが撮影してきた映
像を見る限り、白服の女性が『擬態』されているのは間違いないみ

たいです」

エイミーが素早く端末を操作すると、丁度子犬を追いかけている場面から映像は始まっていた。

二人の女性は鏡写しのようにそっくりであり、やがて子犬を引き合うつと片方が手放した衝撃で頭を打ち片方は走り去って行った場面までが再生されていた。

ユーノには搜索任務に就くに当たり、アリサと同じストレージデバイスとの携行を義務付けている。

これは別に使えというわけではなく、居場所の特定と行動記録の為である。民間協力者とはいえ、管理局　いや、『ZECT』の命令で動く以上は当然の処置だった。

「気を失ったほうはどうなった？」

「怪我はユーノ君の治療魔法で完治。今は駆け付けた救急車で最寄の病院に搬送されてるみたい」

「搬送先の病院は押さえたのか？」

「第3チームが既に展開してるよ。救急車が到着次第、『被疑者』を確保する予定です」

「分かった」

そこまで状況を確認して、僕は一息ついた。

現状、二人の女性はワーム反応を示していない。体温も特に差異はなく、極めて発見が難しいタイプのワームだ。

状況を見る限り走り去った方の女性　アリサが追っている方が怪しい（ジュエルシールドも持ち去っている）が、一概にそうとも言い切れない。

前回戦ったワームなどは、ジュエルシールドを単なる囿として使用し

『ZECT』隊員の中に紛れ込むという奇策を行っていた。人間と同等かそれ以上の知能を持つワームが、果たしてこんな単純な二択を用意するのだろうか？
それに、そもそもワームはアレをどう思っているのか。

「……一体、ワームは『ジュエルシード』をどう捉えているんだ？」
「どう、とは？」

暗い指揮車の中、映し出されるライブ映像では丁度アリサが追っていた『お姉さん』からジュエルシードを受け取っている場面だった。

「前は囿。今回は……もし彼女がワームなら、敵かもしれない人物に簡単に渡してしまっている」

「単に魔力が大きな石つころとしか考えてないって事？」

「そう……かもしれない。もしそうなら、ワームにジュエルシードの利用価値を絶対に気付かせてはいけない」

「んー……でも、そうかなー。それはおかしくない？」

「……どういうことだ？」

僕の副官であるエイミィは、時折こうして考えていると突拍子のない意見を出してくる。それが侮れないから『副官』という地位にまで上がっているのを僕は忘れては居なかった。

「前回、ジュエルシードモンスターはワームの味方をして動いていたのは事実だよな？なら、ワームは何らかの方法でコントロールしなくちゃいけないよ。」

そして、その方法は今は少なくとも二つ考えられる。

一つ、ジュエルシードはワームの『囿』になる、って願いを叶えた場合。

二つ、違う願いで暴走したジュエルシードモンスターを外部から

コントロールしていた場合」

「それは……」

咄嗟に反論を探そうとしたが、ジュエルシードモンスターの行動がワームを助けていた事実は動かない。

ならば、ワームがジュエルシードの利用価値に気がついていない訳がないのだ。

「まあ、流石に次元震を起せるほどの物だとは気付いていないかもしれない。

でも、魔導師にも擬態した経験があるワームなら内包する魔力だけで莫大な価値がある事には直ぐ気がつくよ。

そしてそれを集めるべく『ZECT』が動いていることもね」

「『ZECT』の機密が漏れてるって事か？」

「ううん。単純な統計の問題だよ」

そう言うと、エイミイは端末を操作して幾つかの棒グラフを表示する。一番目の前に表示されたグラフは週単位でのワーム遭遇率の推移を示していた。

「これを見ると分かると思うけど、先々週からワームの遭遇率がぐっと落ちてるの。原因は分かる？」

「……ジュエルシード、だな」

苦々しく呟く僕の言葉に偽りは無い。これまで、『ZECT』は持ち回りで各地域の部隊長が担当の地区のローラー作戦を行ってワームを駆り出していた。

犠牲も大きかったが、それなりの成果は上がっていたのだ。

それが、『ジュエルシード』と言う爆弾が落ちてきたせいでそのローテーションは完全に破綻してしまっているのが現状だ。

ジュエルシード搜索のために各部隊は人数を裂かねばならず、そして低下した戦力ではローラー作戦は展開できない。

暫くワームについては現状を維持する……という名の放置が、このグラフには如実に現れていた。

「この現象は当然、ワームでも気付いている筈。そして前回の戦いを知っているワームが居たなら」

「……ジュエルシードと結びつけて考えることは容易い、か」

大きな疲れを感じて目頭を押さえた僕に、もう一つの考えがふと浮かんだ。

そう、あの戦いでお披露目したのは何もジュエルシードだけではない。

「……マスクドライバーシステム、があるか」

「うん。実はそれが答えなのかも知れない、と思ってるの」

ワームはジュエルシードの価値については知っているが、それがどれほど危険かはまだ想像の域。

そして差し迫った脅威として『マスクドライバーシステム』を警戒し、それを測る囿としてジュエルシードを利用した……か。

筋は通っているな。だが

「それは、あくまであの場に総てを見てきたワームが居た場合の話だ」

「そうだね……前回確認されたワームは総てカブトに倒されている。情報は漏れていない……筈だ」

「うん、だよねえ……」

言いつつ、でもワームだしなと二人して頭を抱えてしまう。

ワームの擬態能力は防諜とか機密と言ったファクターを根底からひっくり返しかねないかなり危険な能力だ。
巷では『クロックアップ』の方が危険視されているが、真に警戒すべきは擬態能力にある。

「……さて、楽しい思索の時間は終わりのようだ」

「楽しかった……？」

エイミイの疑問を捨て置き、僕はアリサのデバイスからの映像に注視した。

画面の中ではアリサはぎこちなく、女性は朗らかに話しながらある喫茶店に入ろうとしていた。

そして、その直ぐ横のカメラに目を移すと、そこには僕の指揮する第一チームの展開状況が映し出されていた。

アリサ達が入った喫茶店を中心に、いつでも結界を敷き中に突入できる体制が整いつつあった。初動が若干遅れたが、この喫茶店で総てを決める勢いである。

「さあ、ここで終わらせるぞ」

「赤か青か、隊長はどちらを切る？」

態と冗談めかして聞くエイミイに、僕はあくまでいつもの様に答えた。そう、いつもの様に頑固に。

「両方だ」

「ザビーの調整が完了したわ」

「……ほう」

ぎい、と椅子を軋ませて振り返ると、通信相手の妙齡の女性は薄く微笑みながら右手に黄色い腕輪を持っていた。

それは我々『ZECT』の希望であり、人類を救う力である『マスキドライダーシステム』、その2号機であった。

私はその自信の表情を警戒し、態と声を落として忠告する。

「ザビーには即刻、奪われたカブト奪還又は破壊の任務に就いてもらわなければならない」

「分かっているわ」

「いや、カブトはオーバースランク。それもかなりの猛者に使われて居ると考えられる。」

ただ単にカブトと同じ能力を持つだけでは力不足だ」

「心配は要らないわ」

私がそう疑問を呈すると、彼女は何かの映像を映し出した。何処かの演習場で行われた模擬戦の映像らしい。

捕獲したワームたちを演習場に放つと同時に、黄色い閃光が彼らを貫く。恐らくクロックアップしていると思われるライダーは、瞬時に10体のワームを倒してのけた。

「……これが？」

それだけならば、別に驚くに値することではない。カブトと同様のことが可能だろう。

「一つ教えてあげましょう。この演習において、『ザビーは一步もその場を動いていない』わ」

「……なに？」

ただ単にクロックアップしたライダーが超高速を持ってワーム達を倒し回っている……と考えていた私はその答えに意表を突かれた。ザビーがその場を動いていないとなると、遠距離兵装でワームを倒したと言ったことか？

しかし、ザビーには近距離兵装しか積んではない筈。仮に後から遠距離兵装を取り付けたとしても、クロックアップに対応させるにはかなりの技術力が必要だ。簡単に追加できるものではない。なら……

「答えは簡単よ。ザビーは『魔法』でワームを倒したの」

「何だと……っ!？」

それは、あり得ない解の一つであった。

ライダーフォーム時のゼクターは『クロックアップ』を使用するため莫大な制御能力を必要とする。

そのため、簡単な魔法を除いた通常の射撃魔法や砲撃魔法その他を使用することは不可能である。

……と、言つのがこれまでの常識であった。

「別に難しいことをしたわけじゃないわ。あの娘とデバイスとゼクター、三つの制御分担を効率化しただけ。

……だから、あの娘とあの娘のデバイスを以外で使用した場合はその限りじゃないから注意なさい」

「……ふむ」

どうやら、装着者のほうでゼクターの負担を減らしているらしい。それが如何なる方法で行ったかは興味が尽きないが、恐らく尋常な手段ではない事が予想される。

時空管理局の者としてはこのような狼藉は見捨てては置けない。しかし『ZECT』司令としては、差し迫った脅威に対し小さな問題だ。

そして、私は前者よりも後者の判断こそ『私』の願いに合致すると確信している。……ならば、迷うことはない。

「第0チーム『シャドウ』を創設する。ザビーの資格者は第0チーム隊長としてその力を役立てて欲しい」

「いいでしょう、来週にはそちらに向かわせるわ。報酬を忘れないようにね」

「ジュエルシード……か」

その言葉を発すると、女は嬉しそうに顔を輝かせた。まるで欲しいおもちゃを買って貰った子供のようにであったが、その用途を知る身としては聊かやりきれない物があった。

「分かっている。『ZECT』が確保したジュエルシードは総てそちらに渡そう。」

「ただし」

「分かっているわ。使用時には次元震の影響が管理局にすら感知出来ない大深度領域で行うから」

「……ならば良い」

その言葉を最後に通信が切れると、薄暗い執務室は静寂に満ちた。衣擦れの音すら響かぬ闇の中、唯一の腹心であるメガネの男が歩み出て言った。

「……よろしいのですか？あの様な得体の知れない女に加担して」
「だが、腕は確かだ。彼女が後に問題を起こすとしても、それは誰も感知出来ない遠方で行われる。」

「……問題なかるう」

「……は」

執務室の闇の中、嬉しそうに笑う女の影だけが脳裏に張り付いたように離れなかったのだった。

11話

「じゃあ、行きましようか。美味しいシュークリームのお店があるの」

「!？」

唐突にそう言いだしたお姉さんの顔はとてもいい笑顔で、私は一瞬全ての問題を置き去りにして何処かに旅行に行きたい衝動を覚えた。そつだ京都に行こう……と、何処かのCMのように振り返った私は、現実逃避をやめて真剣に悩んだ。

ああ、そこに行つてはいけない、と。

お姉さんの言う『美味しいシュークリーム屋』と言うのは、ここいらの人間に言わせれば答えは一つである。翠屋。つまりなのは家が経営している喫茶店である。

昔と違い、今は権利関係は知人にあるそうだが、そこはあの高町なのは。なにせ食に関して『プロ以上』と豪語するだけあって、翠屋のメニューは全てなのは監修のもと、毎週新しいメニューが生まれているそうさ。

週に一度なのはが学校帰りに『バイト』と言う名のパティシエを勤める水曜は、特に大行列が生まれる有様である。

幸い今日は金曜であるが、ちよくちよく顔を出していると噂の翠屋はなのはとのエンカウント率最大の危険スポットなのであった。

「あの……別のところに行きませんか？」

「あら？シュークリーム嫌いだった？」

「いえ、そう言うわけじゃないんですけど……ちよつと苦手です」

気後れしながら、何とか止めさせようと提案してみる私。お詫びを入れる相手に断られたら流石に場所を変えるだろう……と考えていた私に信じられない言葉が返ってきた。

「よし、それじゃあ今日からシュークリームって物の見方を変えさせてあげるわ！」

「……てっ！いや、私は別に」

そう言うお姉さんは私の腕をぐいと掴むと、有無を言わずスタスタ歩いて行く。……て、まずいでしょ！

「だからシュークリームはいいんだってっ！」

「いいからいいから、ここはお姉さんに騙されたと思って食べてみなさいな。」

カスタードのET革命よ〜」

「彦摩呂っ!?!」

思わず突っ込みを入れつつも、意外に強い力でぐいぐい引っ張られていく私はいつか何処かでこれに似た状況に遭遇したことを思い出した。

あれは二月ほど前だったろうか。夕立でざーざー降りの中わずか二人で学校からの帰り道を走っていたら、何を思ったかさすがは急に私の手を引いて路地裏に急ターンしたのだ。

しかもさすがの奴本気で腕を掴むものだから、ちよつと尋常じゃない力で引っ張られて引きづられるが如く、市中引き回しの刑にされてしまった。

……まあ、結果としてそこに居たのは捨て猫で、どこからか鳴き声を聞き付けた（土砂降りの中どうやって聞きつけたかは知らない）

さすがが居ても立っても居られず私を引っ張っていったのが真相だった。

私を引っ張る時の鬼気迫る表情と、子猫をあやす穏やかな笑顔は嫉妬するほど綺麗だった……。のであるが、せめて一言断れと言っ話である。

まあ、何が言いたいかというと。私は基本的に人の先頭に立ち皆を引っ張っていくリーダータイプだ……。と、思っているのだけど。

どうも、ここ一番つとこでいつも誰かに手を引かれている。お姉さん、さすが、そして……。なのは。

どうしてこう……。私の周りにいる人間は個性が強いんだろうか。

「せめてなのはが居ませんように……」

諦めに似た微笑を浮かべたまま、私はずるずると大人しく翠屋へ向けて引っ張られてゆくのでした。

天の道を往き、総てを司る女

「いらっしゃいませ、お嬢様……。なんだ、アリサじゃない。うちは適正価格でしか売らないから、誰でも安くは出来ないよ。」

「……何やってるの、なのは？」

終に翠屋に到着した私たちは、ドアを開けるなり完璧なメイド服と優雅な一礼に迎えられた。それを行った者こそ、何を隠そう高町なのはである。

「見て分からない？うちは常に最高の料理と最高のサービスをモットーにしているの。例えばパティシエと言えど可能な限り接客に従事するのは当然の事だよ」

ちらりとお姉さんの連れた子犬を見たのはは、オープンテラスの席に私たちを案内した。翠屋は他の飲食店と同じく動物の連れ込みはご法度だが、その例外がオープンテラスだ。

ここでは動物もOKなので、ペット連れのお客で賑わうのもしばしはだった。

更になのはは、ばさりとメイド服を脱ぎ捨てると一転して白いパティシエ服へと変わる……ってどこに隠し持ってたのだろうか？

最後に白い帽子を被ると、どこか背伸びして見えるその格好が受けたのか「まあ可愛い」などとお姉さんが口を押さえて大はしゃぎしていた。

「……まあ、いいけど。それよりなのは、お手洗い貸してほしいんだけど」

「入店早々ご不浄とははしたないね。他のお客の迷惑になるからさつさとして出てきなさい。突き当たりの角を右だよ」

「どつちが下品よっ！」

私はお姉さんに「ちょっとお手洗いにいきます」と声をかけて、早々に席を外した。

厨房に戻るなのはを横目で見ながら、監視されてるであろうポケッ

トの中のストレージデバイスをそつと椅子に置いたままで。

「で、今回はどうしたの？」

「……」

お手洗いに入って直ぐ、なのははやって来た。私のアイコンタクトはどうやら通じていた様だ。

腕を組みながら問いかけるなのはに背を向けながら、私は鏡越しに状況を説明した。

「あのお姉さん、ワームかもしれないの」

「ほう」

方眉を上げ、なのはは私に話に驚きを表現した。しかし逆にそれだけのリアクションだと言う事になのはの自信が透けて見えて、私はぎゅっと眉の皺を増やした。

「分かってるのっ！既にZECTが周囲を固めてるのっ！貴女が変身すれば直ぐに身元がばれるのよっ!？」

「なるほど。だけど私はどうしてアリサちゃんがそれを教えてくれたのか、の方が気になるね」

「えっ!？」

意外な切り返しに、私はたじろぐしかなかった。だってそれは……

私にも分からないのだから。

なのは傲慢で自己中で常に私の上に行くム力つく女だけど……友達、だとも思ってる。友達が殺される様なんて見たくは無い。

自分でも矛盾してるのは分かってる。でも、それが私の本音だった。

「……それは、別にいいのよ。どうでも。それより、この状況をどうにかしなくちゃ」

「まあ、いいか。確かにこの店でドンパチやられるのは困る。それが勘違いが元でならなおさらだね。

だから、早々にケリをつけよう」

「勘違い？」

腕組みを解き、真剣な瞳でなのは言った。

「あのお姉さんは、ワームじゃないよ」

「!?!」

私はその言葉に、衝撃を受けながら少し安堵していた。

あなのはが太鼓判を押すのならば、確かにワームではないのだろう。どうやってそれを知ったかには興味があったが、今はこの場が戦場にならない事が重要だ。

でも……と考えるはたと気付いた。その事実をどうやってZECTに伝えればいいのか。

あのお姉さんがワームではないという情報は、ZECTは知らない。そしてそれを証明することも出来ない。ならば何れにせよここは戦場になる。

「……どうして分かったの？それをどうやって証明するの？」

私は忸怩たる思いでなのはにそれを訊くと、なのははそれには答えずに背を向けた。

「何でも人に聞くのはよくないね。私はもう一匹の方を追うから、ここはアリサちゃんに任せるよ」

「待ちなさいっ！」

肩を掴んで止めようとしても、いつの間にか振り解かれてころけさせられた。痛みは無いのだが、逆にそれが上手く技をかけられたのだと分かっていった。

武術においても一角のものを持つなのは、私を一瞥した後こう言い残した。

「ヒントは子犬だよ。だからよく考えて、一番いいと思う方法で行動しなさい。それがアリサちゃんなんだから」

「何を……訳の分からないことを……ッ！」

起き上がるのにまごつく私を置いて、なのはは出て行った。暫くして追いかけるも、既にその姿は見えない。勢い余って『サーチ』を使うと、既に私の感知距離内には反応が無かった。

なのはの健脚には驚かされるけど、ZECT包囲網から抜け出したことで私は少しだけ安堵した。

「しょうがないか……でも、あのお姉さんがワームじゃないのなら穩便に収めない」と

なのはの指示と言うのは非常に頂けないが、この場を収められるのは私以外に居ない。

私は何をすればいいのか分からない。でも、私以外にどうにかできる人間が居ないのならば、ぶつかっていく以外に出来ることは無い。

もう一度鏡を見て、ばちんと両頬を叩く。気合を入れ直した私の頬は赤くてジンジンしていたけれど、目だけは死んでいなかった。

「よし……戻るわよ、私」

頬を赤く腫らしたまま、私は一路オーブンテラスへと戻って行った。どうにかこうにかこの顔を気付かれないようにわざとらしい笑みなんぞを浮かべつつ。

「すみませーん、お待たせしまし……って!？」

そしてそこに居たのは、テーブルに突っ伏し苦しそうにはあはあと息をつくお姉さんの姿だった。顔は死人かと思うほどに青ざめており、今にもその命が消えてしまいそうに見えた。

足元では子犬　メアリが縋るような目でお姉さんの足に抱きつききゅんきゅん鳴いている。

「ちょ、ど、どうしたんですかっ!？大丈夫ですかっ!？すぐに病院に　」

「……っ!、はあ、はあ……ゴメンね、もう大丈夫。もう大丈夫だから……ちょっとだけ手を握っていて欲しいの」

「いや、でも……はい。私でよければ」

すぐに携帯で119番通報しようとしたが、その手はお姉さんに握られて止められた。最初は振り解いてもかけようとしたけれど、手を握ってからどうしてかお姉さんの顔色がよくなったのを見て思い直した。

何かの持病持ちなのかと思うけれど、あれだけ辛そうな顔をした人を私は今まで見たことが無かった。

このお姉さんが……ワームなわけは無い。私は今、そう確信した。体温とか見分ける方法とか……そんな些細なことで疑っていた自分が恥ずかしい。なのはでさえ一目で見抜いていたのも当然のことだった。

「……ごめんなさい、お姉さん」

「はあ、はあ……どうして貴女が謝るの？」

お姉さんの顔色は、すぐに赤みが差し呼吸も落ち着いてきていた。栗色のロングの髪も心なしが艶が戻ってきているように思う。

ほんとに今のは何だったのか分からないけれど、そこはあまり立ち入らない方が良いのかも知れない。それよりも、私はまだ大事な事をしていない。そう

「初めまして。私はアリサ・バニングス。私立聖祥大学付属小学校、三年生です。

よかつたら、お名前を教えてくださいませんか？」

縋るように握っていた手を、私は握手の形に直す。暫くぽかんとしていたお姉さんも、漸くその向日葵のような笑顔をして答えた。

「初めまして、小さな後輩。私は北条まりな。今年から聖祥大の経済学部に入學した一年生よ。

これからよろしくね」

その顔には、どこにも今まで苦しんでいた後が無かった。私はずっと安堵の息をついた。そして、これから始まる新たな繋がりに思いを馳せたのであった。

だから、私のポケットの中で鈍く輝く青い石には気づく事はなかった。たのでした。

心地良い振動と共に、エキゾーストノートを吐き出しながら『カブトエクステンダー』は走る。店を抜け出したなのはZECTの包囲を抜けると、カブトゼクターを呼びカブトに変身。そしてエクステンダーにて救急車を追尾した。

類稀なる魔道の才を持つなのは、数十キロ以上距離が離れてもその魔導出力が減衰しない。なのはが行う『サーチ』は容易に翠屋に居るお姉さん 『北条まりな』と同等の魔力反応を発見した。

目標は白いスポーツウェアの女性に擬態したワームの乗る救急車。緊急車両として80Km以上を出していたが、カブトエクステンダーの速度に比べれば止まっているのにも等しい。カブトは速度を落とし救急車の隣に横付けると、エクステンダーの制御を自動にし飛び移った。

サイドミラーでその様子を見た運転手は驚愕して急ブレーキを踏むと、黒いタイヤ跡を残して救急車は急停止。

カブトが屋根から下りて後部ドアを開けると、驚く救急隊員を当身で気絶させつつかつかと横たわる女性に近づくと……と、いきなり女性の目が開いた。

「……ッ!？」

女性はカブトの首を掴むと擬態を解き、黒いボディと昆虫のような顔を持つランピリスワームへと変身した。

ギリギリと締め上げる手の力は強く、マスクドフォームの装甲に輝を入れさせるほどのものだ。

カブトは止む無くぐいと後ろに勢いを付けると思い切りワームの顔を蹴り上げ、拘束を解く。

「グルルルウウウ」

顔を蹴り上げられたワームは怒ったように唸るが、直ぐにその身体を高速にして走り去ってゆく。

「逃がさないよ」

カブトは焦る事無く左手に赤い宝石を握ると、魔道の杖『レイジングハート』を起動。

そしてベルトに装着されたカブトゼクターの角を右手で押し上げ、直ぐに左手で反対側に倒した。

「キャストオフ」

『Cast off』

各部の装甲が吹き飛び、カブトはマスクドフォームから赤いライダーフォームへと変身を完了した。

『Change Beetle!』

カブトホーンが顔の定位置に収まるのを待って、直ぐに腰のプッシュスイッチを勢いよく叩く。

『Clock up』

その瞬間、世界全ての速度が落ちた。カブトは混み合う幹線道路に渋滞の如く静止している車の間を抜け、ワームを追う。

その速度はなのはの健脚を持ってしてもやや勝る程度。しかし確実にその差は詰まっていた。

それを見て取ったワームは逃げ切るのは無理と判断し、突如込み合う幹線道路を抜け枝道へと抜けた。

街路樹やビルの間を抜け海の方へと向かう。その先には海鳴市臨海公園があるが、その隣には近年開設したばかりの大型アミューズメントパーク『Sea rings』があった。

『海』と『自然』をテーマに、大型海底トンネルと木製ジェットコースターを売りにした今最も海鳴市で注目のスポットであった。

平日と言うことで人影は疎らだが、目玉のジェットコースターにはそこそこの行列が見えた。

そして何を思ったか、ワームは大観覧車の上にまで登りそこでカブトを待ち構えた。

『Clock over』

カブトが隣の籠の上に着地すると同時に、二人は引き伸ばされた時の中から通常の時間に復帰した。

「こんなところを戦いの場を選ぶとはね。まさか私が躊躇するとも思っただの？」

「……………」

睨みあう二人を置いて、観覧車の上に立つ人影に園内にはわかになぞわめき始める。子供達は指を刺して二人を見上げた。大人達はまさかと目を擦り、関係者は慌てて観覧車を止めるべく走る。そんな地上を見下ろし、カブトは言った。

「あなたたちワームは、私が倒す。そして、この地上の人々全てを私が守る。」

おばあちゃんが言っていたの」

丁度カブトの乗る籠は大観覧車の天頂に達し、ワームから見て太陽はカブトが背負うように輝く。そして、その右手が天を指す。

「『二兎追う者は、二兎とも取れ』、と。」

私はワームを倒す。そして、地上の人々も守りきる。例えお前がこの人間を人質にしたとしても、私は全てを救うよ。

たとえ、その姿が人とはかけ離れてしまってもね」

ちらりとカブトは横目で翠屋の方向を見、すぐにワームに戻す。その目力にたじろぐ様に、ワームは後ずさる。そして、姿がぶれる。クロックアップだ。

すかさずカブトは腰のスイッチを叩き、観覧車の籠から跳躍。

『Clock up』

観覧車の籠を飛び石のように移った二人は、地上に降りると制止したメリーゴーランドの中で戦いを繰り広げた。

ランピリスワームは球状に丸めた拳でカブトに殴りかかるが、半身をずらしただけでいなし懐に入り込んだカブトの肘打ちがワームを吹き飛ばす。

腰の回転から来る力と殴りかかる力の反作用を加えた一撃は、ワー

ムの身体を軋ませるほどの威力を持つて戦いの場をメリーゴーランドから隣のティーカップへと移した。

空いているカップの一つに転げ落ちたワームは、何とか身体を起こすと隣のカップで回転しようとして身体を大きくくの字に歪ませている子供が居るのに目をつけた。

これを人質にとればカブトは躊躇する……と思ったが、伸ばした手は一本のクナイによって引き裂かれた。

「グツギヤッ!?」

かつん、とカップ淵に突き刺さったのはカブトクナイガン、クナイモードである。

このモードの『アバランチスラッシュ』は物理的強度も、魔力ワールドも切り裂きワームの腕を切り飛ばした。

驚愕と痛みによるけながら、ワームは人質を諦め跳躍。そして、この『Sea rings』最大の目玉と謳われるジェットコースターの路線上へと逃げ込む。

すかさずカブトはそれを追い、二人はコースターの路線上で対峙した。

ワームは不安定な足元を狙い、低い姿勢から突撃をかけるが慌てる事無くカブトはバックステップでこれを避けると強烈な膝打ちを加える。

ごろごろと路線上を無様に転がったワームは、ごつんと今正に落ちようと動いているコースターと接触。

これ幸いとコースターの中央基部に蹴りを加え、二つに分離させると後部をカブトへ向けて思い切り蹴り出す。

カブトはそれに少し迷ったが、全身でそれを受け止め慣性を殺す。

そして乗客席に居た男性を抱え上げると地上へ飛び降りた。その様を見たワームは最後のチャンスとばかりに、コースターから跳躍しカブト目掛けて、重力の乗った一撃を繰り出すべく落ちる。

しかし、カブトはそんなワームの意図など全てがお見通しであった。

カブトは途中で男性を上空に放り投げると、すぐにその場をステップで避ける。

目標を見失ったワームは軌道変更も出来ず、そのまま落下し大きく地面を陥没させた。跳ね上がるアスファルトの破片がゆっくり舞う中、カブトは横合いから無様に突っ立ったワームへ左ジャブを加える。同時に右手でカブトゼクターの上部スイッチを押した。

『One』

体勢をよろけさせたワームの隙を見逃さず、すかさず懐に踏み込んで今度は左ストレートを顔面に加える。同時に、右手は次のボタンに伸ばしながら。

『Two』

更に右足で大きく踏み込んだカブトは、腰の回転を加えて下から強烈な右アッパーを喰らわす。地面が衝撃で陥没するほどの一撃を受けたワームは、回転しながら上空へと跳ね上げられた。

カブトはその様を見る事無く背を向けると、最後のスイッチを押しゼクターの角を左に戻す。

『Three』

跳ね上げられたワームが落ちてくるのに合わせ、カブトは背を向け

たままゼクターの角を右に倒した。

「ライダー……キック」

『Rider kick!』

きりもみ状に回転しながら落ちてくるランピリスワームに対し、波動化したタキオン粒子を加えた強烈な左回し蹴りが炸裂。

魔力位相と時間位相を狂わされたワームは19tの物理的衝撃により、正に一片も残さず爆散。

最後にカブトは空中に跳ね上げられ、今だ空中をのろろと飛ぶ男性を抱えると適当なベンチに下ろし、その時を通常空間へと戻した。

『Clock over』

濃い魔力の煙漂う中、カブトは昼天を指す。総てを守り、総てを司る天の道がそこにあるとでも言うように。

「さて、もう一つの厄介事を片付けに行きましょうか」

そして、カブトは陽炎の如くその姿を消す。

この日テーマパークに集まった人々は、突然起きた謎の現象に皆一様に首を傾げることになる。

また、テーマパーク関係者は施設の損壊の為大損害を負う事になった。総ての命は守ったが、テーマパークの経営状況は面倒を見ないなのはだった。

12話

「こ……これは……っ!？」

「どうした、エイミィ」

喫茶店『翠屋』内の映像を見ながら仕掛けるタイミングを計っていたクロノは、隣で叫んだ副官のエイミィに振り向いた。彼女の顔には一条の汗と共に、大きな驚愕が張り付いていた。

「第3チームから連絡、病院に女性を搬送中だった救急車がカブトに襲撃されました」

「何……まさか」

「救急車からワームとカブトが戦闘しながら逃走……クロックアツプしたため追撃は困難だそうです」

「……そうか」

外れだったか……と呟きながら背もたれに体重を預けるクロノは、それでも何処か安堵の表情を見せていた。不思議に思ったエイミィは、問いかける。

「嬉しそうですね、隊長」

「……悪くは、無い。部隊やアリサを危険に晒さずに済むのならな。こちらの制御下に無いとはいえ、カブトは今のところワームと敵対している。」

「ならば上手く利用するだけだ」

「放置の間違いじゃないんですか？」

コケティッシュな笑みで訊くエイミィに、クロノはこつんと頭を叩きながら同じく笑い返す。

緊張し通しだった指揮車内は、既に戦闘後のやや弛緩した空気が流れていた。

「茶化すな。しかし、これで残るはジュエルシードの封印のみか。

……アリスに持たせたジュエルシード封印用デバイスはちゃんと使えるんだろうな？」

「ライダーシステムBプラン、ですか」

クロノの問いに答え、エイミーがパネルを叩くと指揮車内のウインドウにある一つのストレージデバイスがスペック表示された。

そこにはカードスロットのような物が付いたバックルと、『A』と言う文字のついた一枚のカードが映っている。

「技術部が突貫で改造したストレージだ。どこに不具合があるとも分からないぞ」

「でも現行品だとアリスちゃんの魔力特性に合うデバイスは無いし、通常のバリアジャケットでは不安があるって言ったのは隊長じゃないですか」

「それは、そうだが……」

眉を寄せた表情で、クロノは過去にアリス用ストレージを陳情した時の事を思い出していた。

以前アリスがジュエルシードの封印を行うと決定した時、彼は技術部に彼女用のデバイスを発注していた。

彼女は既に『レイジングハート』と言うインテリジェントデバイスを所持していたが、ゼクターの無い通常のインテリジェントでは言うまでも無くワームに対して脆弱だ。

なのでその専用デバイスには『ワームの攻撃に対してある程度の防御力を有する』と、『ジュエルシードの封印を確実に行える』と言

う二つの条件を課していた。

この仕様に対し、技術部が出した答えは既存のストレージに『マス
クドフォーム』の装甲の追加と、『封印専用大容量デバイスカード』
を持たせる事だった。

「クロックアップシステム無しでは不安があるが……まあ、あまり
こちらにかまけて本命のゼクター開発に遅れを出すわけにもいかん
しな」

「技術部も再三の納期前進にてんてこ舞いみたいですよ……」

あはは、とエイミーは今日も設計に技術部の友人の顔を思い浮かべ
て苦い笑みを漏らす。そこに、突然警報が鳴る。緊急警戒レベル『
1』を示すアラートだ。

「どうしたっ!」

「現地点の上空1Kmに次元転移反応っ!魔導師……一人が転移し
てくる模様ですっ!」

「全く、いつも素直に終わらせてくれないな……無いとは思っが航
行管制局の転移申請を当たってくれ」

「該当……ありません。無許可の転移になりますから、現行犯での
逮捕権が執行出来ますね」

上空に突如として現れた転移ゲートは、転移者の魔力特性だろうか
稲妻を纏いながらその姿を表そうとしていた。クロノは忌々しそう
に己のストレージを取り出し、自ら指揮車を出る。

「僕が直接対応しよう。エイミーは部隊の指揮とアリサの監視を頼
む」

「了解。お気をつけて」

言うが早いか、クロノは空へと飛び出す。空戦魔導師としてAAA+のランクを持つ実力を示してか、加速は鋭く無駄が無い。すぐに転移地点に達すると、そのデバイス『S2U』を謎の転移者に突きつけた。

「こちらは時空管理局の者だ。無許可での次元転移の現行犯で逮捕する」

紫電を纏いながら現れたのは、まだアリサと同じ年代の少女だった。金髪のツインテールに黒いマントと云ういでたちの少女は、その瞳をクロノに向けて言った。

「……邪魔しないで」

「そうはいかない。無許可の転移は立派な犯罪だ。こちらとしても見てしまった以上は　っ!？」

言葉を続けようとしたクロノは、突然顕現した黒い斧の一撃を辛うじて避けることに成功。

無表情にその一撃を放った少女は、しかしそれ以上クロノを見る事無く地上に　遠く見える『翠屋』に目を落とした。

「……ジュエルシード」

「ッ、君はっ！自分が何をやっているか分かっているのかっ!」

『Photon Lancer』

「……ファイア」

「なッ!？」

ほぼ無詠唱かつ速射、それも4つの高速直射弾を防ぎきることが出

来たのは、空戦魔導師『AAA+』と言う実力があればこそであった。

しかし金色の魔力光4つの内、二つをラウンドシールドで受け残り二発を肩と足のバリアジャケットに被弾。

ダメージこそ通らなかったが、それよりもクロノをして戦慄させる感触が身体に残って離れなかった。

「これは……まさか殺傷設定っ!？」

通常、次元世界において使用される魔法は非殺傷設定にする決まりがある。この設定では人体に対し、魔力ダメージ以外の被害は無い。しかし今の一撃は防ぎきったとはいえ完全に殺傷設定であり、そうである以上『殺すつもり』でかかってきたという事だ。

「どういつつもりだっ!君は一体……っ!」

少女にそれを問いかける前に、クロノは鳩尾に綺麗に入れられた痛みを詰まらせる。

続く少女の細足から放たれた膝撃ちは、しかし咄嗟に展開したクロノのプロテクションにより弾かれる。意表こそ付かれたものの、クロノにとって見ればまだ対処可能なレベルである。

それを悟ったのか少女は即座に距離をとると、閃光の様な速度で地上へと降りて行く。クロノは痛みに顔を顰めながら、エイミィと部隊に通信を繋げた。

『第1チーム、アンブッシュ解除。強装結界を展開しろ。未確認魔導師がそちらへ行った。』

全兵装使用自由、邀撃開始』

天の道を往き、総てを司る女

手を握り、背中をさすっていた私は顔に赤みが差してきたお姉さん

まりなさんをゆっくりとテーブルから起こした。

さっきまで死人のような表情だったが、今はもう最初に見た明るい表情が戻ってきていて、私はやっと安堵することが出来た。

「ごめんね、何だかさっきから頭がはつきりしないの。まるで夢の中に居るみたいに」

「あの、こんな事訊くのはちょっと、あれなんですけど……何処か体が悪いんですか？」

「ううん、そんなこと無い。いたって健康！……の、はずなんだけどなあ……」

「そう、ですか」

おつかしいなー、とお姉さん自身も首を傾げながら呟いている様子から見て、心当たりは無いようだった。

「とりあえず、何事も無くて良かったです。……それで、申し訳ないんですけどこれからやることがあります……」

「そう……それじゃあ、また何処かで会いましょう」

「はい、今日はありがとうございました。身体、お大事にしてください」

もう少しまりなさんと話してみたい気もあつたが、今はポケットにしまったジュエルシードの封印が先決だ。
私は運ばれてきたシュークリームを一気に口に放り込むから、まりなさんに挨拶して席を立った。

翠屋の特製カスタードシュークリームは後を引かない控えめな甘さの癖に、鼻から抜ける風味がとても華やかな一品だ。

なのは監修と言うのが気に入らないが……美味しい物は美味しいと素直に褒めておこう。

「じゃあ、また今　」

度、とまで言いかけたところで、巨大な魔力が空を覆うのが見えた。肌が粟立つほどの魔力は空の色を変え、町から人々を消してゆく。これは、以前にも見たことがある。あの　ビルを覆っていた境界と同じものだった。

「まさか……」

『アリサちゃん逃げてっ！！今そっちに未確認魔導師が高速で向かってるのっ！！』

通信を繋げようと思った矢先に、相手から強制通話でいきなり怒鳴られた。ちなみに強制通話は通常の念話とは違い、受信側のプロトコルを無視してパケットを無理やり送り込むやり方である。

なので魔力消費が高いうえに周りの人間にまで聞こえてしまうけれど……それほど急を要する事態だと言うことだ。

「え……あの……どういう」

『早くっ！相手はクロノくんを振り切って真っ直ぐそっちに行ってるのっ！多分狙いはジュエルシードだよっ！』

「あ……」

その時になって、漸く鈍く振幅する魔力の鼓動を感じた。ポケットの中のジュエルシードが、何かに反応して動いている。

まさか起動したのか、と思い取り出してみると青く明滅し、間欠的に物凄い振幅の魔力が発振されている。正直持っているだけでも吹き飛ばされそうなほどだった。

「これは……」

『まずい……このジュエルシード、本当は既に起動状態だったんだ。魔力の乱れで暴走が始まってる』

「冗談じゃないわっ！すぐに封印を

」

反対側のポケットから、待機状態のカード型をした改造ストレージデバイスと専用バツクル『RS02B』を取り出しながら　私
はあることに気付いた。

さっきまで座っていた翠屋のテラス、そこに　　まだまりなさんが座っていることに。

「な、なんで……」

「アリサちゃん、一体どうなったの？この空……異常気象？」

不安そうな顔で辺りを見回すまりなさんに、私もモニタ越しのエイミイも驚愕の表情を崩せなかった。

強装結界内は魔力を持たない存在を選別し、次元位相をコンマ1。ずらされている。コンマ1。だけなので存在は無くならないが、魔力と言うベクトルがないと力率が悪すぎて干渉出来なくなるのだ。そしてこの空間では魔力こそが存在強度であり、ここに居ると言うことは少なくとも魔力を持った者である事は間違いない。

そして

「なんだか頭がぼおつとする……アリサちゃん、それ、なあに？」
「な、何って……これはその……って、まりなさんしっかりしてっ
！」

急に立ち上がったまりなさんは、何処か上気した表情でふらふらとおぼつない足取りで近づいてくる。

……何だか良く分からない。良く分からないけれど、すごく嫌な予感がする。

私は何だか危ない表情のまりなさんから後ずさるように下がり……
そして後ろから近づいた子犬　　メアりに腕を噛まれた。

「っ！……たあっ！？」

急に噛み付かれたため、手放してしまったジュエルシードをメアリがしっかりと啜え込んだ。そして駆け足でまりなさんの足元に戻るとジュエルシードを擦り付けるようにした。

「あ……ん」

「なっ！？」

そして、ジュエルシードが溶け込むようにまりなさんに融合した。青い石が溶けた跡を、メアリは心配そうな表情で舐め続けていた。

『まさか……あの人は既にジュエルシードモンスターだったって言うのっ！？』

「え……」

あまりに急速な展開に付いていけない私を置き去りにして、エイミイは高速で手を動かし何やら資料を漁っていた。

履歴書、住民票、その他もろもろの見ちゃいけないような資料がウインドウの端に見えたけど、それ以上にエイミイの言葉は私を打ちのめした。

『っ!?!……そう、いうこと』

「どうだって……言うのよ」

震えるエイミイの顔からは、良い返答などは期待できない。でも、私は今度は小刻みに震えだしたまりなさんを抱えながら答えを待った。

『……その人、北条まりなさんは一週間前から事故で植物状態になって入院中なの』

「……っ!」

『昨日の夜から行方不明になって、捜索願が出されていたわ。多分、ジュエルシードの力で起き上がったんでしょうね』

「……そん、な」

初めに会った時は、あんなに元気そうだったのに……本当は植物状態だったなんて。

青ざめた表情で虚空を見上げるまりなさんからは、爆発しそうなほどの魔力が発振されていて見ているだけで心が押し潰されそうになる。

これだけの魔力だと、宿主の身体が魔力に耐え切れるか分からない。それも、重症の身ならなおさらだ。

『……彼女の身体は、ジュエルシードによって生かされている。でも、今は暴走しその身体は崩壊を始めている。』

アリサちゃん』

「……嫌よ」

屹然とした表情で私を見るエイミーにある種の覚悟があるのを見て取って、私はその先に続く言葉を制した。制せざるを得なかった。だって、その先に続く言葉は……その未来を、私は認めたくないから。

「さっきまで元気に話してたのよ。一緒にお茶して、他愛もない事話して笑ってたのよ……」

『……………』

ますます青白くなるまりなさんの手に私の手を重ねると、とても冷たくてぞっとする。でも、私が分け与える熱がまるで生命線であるかのようにまりなさんがぎゅっと握り返してくれた。だから……私は諦めない。諦める事は、許されない。

『アリサ、命令だ。ジュエルシードを封印しろ』

「クロノ……」

私の目を見て埒が明かないと見たか、今度はクロノが肩で息をしながら通信に出た。例の所属不明魔導師と言う奴と戦っているのか、いつも以上に無愛想だった。

『時間がない。奴がいつそつちに　　しまつたっ!?!?』

「っ!?!?きゃあっ!?!?」

急に通話が途切れると、上空から魔力弾の数発降り注いだ。咄嗟にまりなさん突き飛ばしたものの一発の魔力弾が彼女を掠め、暴走はいよいよ手に負えないレベルになっていた。

『ああああああああああああああああっ!?!?!?』

「まりなさんっ！……きゃあっ！」

急にまりなさんは獣のような咆哮を上げ、彼女の身体は大きく成長
いや、豹変していった。

黒い剛毛が身体を覆い、四つん這いについた手は爪が伸び巨大な筋
肉に覆われてゆく。口が前方に伸びると大きく裂けてゆき、そして
牙が生える。

それはまるで……巨大な一匹の狼。そう、ジュエルシードは小さな
子犬の願いを暴走させ、飼い主を『元気』に『強く』させたのだっ
た。

『ぐああ……ああ……』

「まりな……さん」

その姿を見てもなお、私は動けなかった。恐ろしくて逃げそうにな
ったけれど……でも、彼女の暖かさが忘れられない。だから、私は
その巨大な足にすがり付いた。

そんなことしか出来なかつたけど、多分、これぐらいしか私には出
来ないから。

しかし、無常にも一条の閃光が私とまりなさんを引き裂いた。

「……どいて」

『Photon Lancer』

「きゃあっ!?!」

まりなさんに直撃した直射弾の余波により、私は無様に転がり落ち
た。地面を這い蹲る私が見たのは、苦しそうにのたうつまりなさん

と、黒いマントの少女。

手には黒い斧のようなデバイスを持ち、鋭利な眼差しでまりなさんを見ていた。恐らく彼女が未確認の魔導師なんだろう。

これは、と私は本能的に悟る。彼女はなのは達と同じで、どこか『覚悟』を持った人間だと。

目的のために、やるべきことの為に自分を曲げず遣り通す頑固な…
…そして一途な人間だと。

一目見ただけでどうして分かるかなんて、私にも分からない。でも、あれだけ石頭なメンツと毎日付き合っている私のカンは外れた為しがないのだ。

そして、私は私の中の確信だけは裏切れないと言っ厄介な性質があるのだ。それが裏目に出る事がほとんどだけど、今度ばかりは望んで従おう。

斧から金色の魔力で生成された鎌を構える少女の前に、私はふらつく足を押さえて立ち塞がる。

怪訝な表情で見る少女の前で、私は専用バックルに改造ストレージデバイスをカード状態のまま差し込んで腰に当てる。

自動的にベルトが腰周りを一周し、丁度良い長さで腰に固定された変身可能を示す待機音が流れる中、私は左半身を引き、右手の甲を向け顔の左横まで上げた。

「彼女は、絶対に封印させない……っ！」

「……」

一拍の後、私は右手を裏返しバックルのレバーを引く。

「変身ッ！」

『Turn up』

バックルから音声の流れ、カード挿入部が回転して『A』からスピードのマークに変化する。それと同時にバックルから四角い転送魔方陣が前方に形成された。

「ッ！」

不意を付かれたマントの少女は魔方陣にぶつかり、意外な強さで吹き飛ばす。私はその隙に転送魔方陣に向けて全力で駆け、それを潜り抜ける。

すると、転送されたバリアジャケットが装着された。以前着た制服風のバリアジャケットではなく、明確な実体を持った甲冑。

銀色に鈍く輝く装甲はどこか西洋の甲冑に似ており、スペードを模した意匠が施されている。

これはライダーシステムに使われているものと同じ、『ヒビイロノカネ』製の特殊装甲であった。

クロノ達は、私にワームと遭遇しても死なないだけの装甲を用意する為に既存のストレージデバイスに改造を施してゼクターの一部システムを流用した改造デバイスを寄越してくれたのだ。

彼らの親心には頭が下がるが、まさかジュエルシード封印の邪魔をする為に使われるとは思っても見なかっただろう。しかし、今はそんな事は言っていられない。まりなさんを助けるのが先だ。

「うわああああっ！」

このデバイスは私の希望通り、近接戦に特化した仕様となっている。

腰に下げた剣型デバイス『ブレイラウザー』を構え、私は鎌を持つ少女へと突撃した。
少女は少し身構えたが、直ぐ弾けるようにステップして私の一撃を避けるとその黒い鎌で切りかかって来た。
その速度は尋常じゃなく、速い。私から見たらクロックアップしたのと大して変わらない程のものに見えた。当然、そんなものを避けられはしない。

「……くっ!？」

「そんなもの」

だが、がきんと明確に弾かれた雷刃をみて初めて少女に動揺が走る。そう、この『ヒビロノカネ』製の装甲は通常、攻撃に使用される魔力周波数帯に30dB以上も減衰するフィルターがかけられている。

この装甲を貫いたとしても、中に着込んだバリアジャケットで十分対処可能な出力にまで落ちていると言う寸法だ。

「効かないのよっ!」

ブレイラウザーを揮い、力任せに鎌を押し返すとくるりと宙返りして彼女は空中に飛び上がった。軽業師のような身のこなしは、かなり厄介だ。

「ただ、私は一人じゃない。」

「……っ!」

「そこまでだ。君の所属と氏名、それに目的を吐いてもらおうか」

私に気をとられた一瞬の隙を突き、少女はクロノ他数十名が展開した『チェーンバインド』に拘束された。

あまり活躍しているところを見れなかったけど、クロノのチームはゼクト内でも最も優秀な部隊と言われているらしい。油断無くデバイスを構えるところは堂に入っているが、損耗率が高いせいで隊員が皆若いのは気になる場所だった。

まだ私と変わらないか、少し上ぐらいの少年少女が手にデバイスを構え、こうして働いているのを見るとこれが正しいのか少し不安になってしまう。

「アリサ、君はジュエルシードを封印しろ。」

……さて、口を割らないのなら此方も容赦はしないぞ。殺傷設定を使われてまで黙っているほど、僕はお人好しじゃあないんでね」

「……」

尋問がただならぬ雰囲気を漂わせる中、私はクロノの命令に立ち尽くすことしか出来なかった。ブレイラウザーの柄に展開させた封印用ストレージ『ラウズカード』を使えば封印は出来るだろう。

でも、それでは植物状態にあるまりなさんの身体がつか分からないう。しかも、持ったとしても彼女はまた植物状態に逆戻りしてしまう。

どうすれば……いいのだ。

「……私は、ZECT第0チーム『シャドウ』所属。隊長のフェイト・テストロツサ。ジュエルシード封印の任務でここに来た」

「何だと？ 適当な事は言うな。第0チームなんか聞いた事は無い。それに仲間ならなぜ此方を攻撃する。なぜ連絡を超越さなかった？」「その必要は無い。ジュエルシードは全て……母さんのものだから。」

来て」

「何っ……！？ まさかっ！」

私が迷っている間に、事態は刻々と動いていた。少女が右腕を天に

翳すと、虚空から転移門を通り黄色い蜂のようなゼクターが空を引き裂いてやって来た。

そのゼクターは体当たりでクロノ達を吹き飛ばすと、拘束されていた『チエーンバインド』を引き裂き少女の手に収まった。

「……………変身」

『Henshin』

そして、ゼクターが少女の左腕に装着された腕輪に取り付けられると、あの夜見たような巨大な魔力が空を切り裂いて竜巻のように荒れ狂った。

その中心で一度バリアジャケットを分解させた少女は、煌く魔力光の中ゼクターのタキオン制御能力により未来の身体を読み取られ、その身体を大人の姿に変化させてゆく。

そして、六角形のパネル状にして転送されてきた特殊装甲『ヒヒイロノカネ』が大人の身体となった少女を包み込んでゆく。

自らの魔力光と同じ淡黄色と白のその装甲はどこか蜂の幼虫を思わせる幼さを思わせ、六角形に切り取られた兜の面は蜂の巣のような合理性を体現しているかのように見えた。

彼女こそ、仮面ライダー『ザビー』。ZECTが作った2番目のライダーであった。

「馬鹿なっ！本当にザビーなのかっ！？……………エイミィッ！」

「もう連絡してるっ！関係各部門にも事実関係を問い合わせてますッ！」

彼女の言った事が嘘であるにしろ、本当であるにしろ、仮面ライダーザビーがここに居る事実が変わらない。ならば真実を確認するま

で手を出す訳にも行かず、クロノはまた厄介事かと自らの上司を呪った。

彼らが手を出すのを戸惑う中、ザビーは悠然と元まりなさんであった巨大な狼と向きあい、その黒い戦斧を向けた。

……もう、何だか分からない。分からないけれど……まりなさんに手出しはさせないっ！

「はあああああっ！」

強化された脚力でジャンプした私はザビーに斬りかかるけれど……またその華麗な体捌きで避けられてしまう。でも、こうしていれば時間稼ぎぐらいは

「……キャストオフ」

『Cast off』

でも至近距離から聞こえたその声は、私を吹き飛ばす衝撃と共にその希望を打ち砕いた。ザビーが左腕のゼクターの羽を持ち上げ、回転させるとその白い無垢な装甲は破片となってパージされた。

その下から現れたのは、触覚と複眼を持つ正に蜂の姿をした淡黄色のライダー。

『Charge Wasp』

キャストオフした破片に吹き飛ばされた私は、ザビーの姿を見ながらも無様に地面に這い蹲らせられる事しか出来なかった。

「させないっ！……うわあああっ、でいっ！」

そして改めてまりなさんに攻撃を加えようとしたザビーに、せめてもの一矢と私はブレイラウザーを投げた。
自分が飛ぶよりはの方が早いから……という判断で投げたけれど、ザビーはそれを見もせず腰のスライドスイッチをスライドさせただけだった。

『Clock up』

そしてその姿が掻き消える。それはもう見慣れた高速移動法……クロックアップだ。私がそう認識すると同時に背中から衝撃が走った。

「がつ!?!」

続く延髄への一撃、間を置かずに脳天と脇への攻撃。私はあの日見たカブトのようにクロックアップに翻弄され空中を漂うサンドバツクとなった。

ヒヒイロノカネ製の装甲があるとはいえ、それは何の助けにもならない。純粹魔法攻撃は効かないが、それは非殺傷設定魔法もこれには通じないと言う事。

私を攻撃しようと思えば……物理的な殴る、蹴るといった攻撃方法になっってしまうわけだ。

「げは……ガハ……ッ!?!」

度重なる衝撃に強度限界に達した装甲は、終に決壊しザビーのアップパー気味の一撃にヒヒイロノカネ製の兜が割れ私の左頬に切り傷を量産した。

仰向けに倒れた私はそれでもまりなさんの方へ向かおうと身体を返し、手の力だけで匍匐するが……頭部を走る痛みの手を止めざるを得なかった。

「あ……が、いた、痛い……っ!？」

『Clock over』

ぐいと引かれる頭皮の痛み、私の髪がザビーに引つ張られているのが分かった。通常の際に復帰したザビーの無表情に見える複眼からは、何の感情も読み取れない。しかし、その口から紡がれる声は端的で、しかしどこか悲しみを背負っているように聞こえたのは私の気のせいだったろうか。

「……そこで大人しくしてて。バインド」

『Lightning Bind』

ザビーは私を光の鞭で地面ごと固定すると、それ以上は興味はないとばかりに手を離し私に背を向けた。

「ちょ、やめて……おねがい、やめてよあつ!」

拘束から逃れようと身体を振るけれど、何十にも重なった光の帯に手も足も動かせない。クロノはここぞという時に戸惑って動けないし、このままでは……まりなさんがっ!

唯一私の願いを聞いてくれそうなユーノは、何故かZECTの車両の陰から半身だけ出してこちらを見ただけだった。

「どうして見てるだけなのよ、ユーノッ!？」

ユーノも私と同じ改造ストレージ『RS01G』を持っているから抗う事ぐらいは……出来るはずだけど。

私は口の中に砂利が入って来るのも構わず「やめて」と繰り返したけれど、ザビーの歩みは止まらなかった。怯えたように身を寄せ狼へ、容赦なくその戦斧を展開し光の刃を振りかぶる。

「ジュエルシード、封印」

『Scythe Slash』

「やめてえええっ!」

そして最後の一撃が繰り出され　その魔力刃はまりなさんに届く前に、クナイガンのスラッシュモードが受け止めていた。

そいつは右手のクナイガンを返し、蹴りを入れるがザビーはそれを回避して素早く距離をとった。そのザビーに対し、青い複眼が向く。その姿にほっとする……って言うのは、私も中々あいつに毒されてしまった証拠なんだろうか。

『Clock over』

「あなたは……ッ!」

「……カブト」

そして、そいつ　カブトはザビーに正対したまま、つまり私に背中を向けたまま話しかけてきた。

「おばあちゃんが言っていたの」

そしてそのままの姿勢を崩さず、またいつものフレーズを繰り出す。今度ばかりは、馬鹿にする気は起きなかった。

「人は人を愛すると弱くなる……けど、恥ずかしかることじゃない。それは本当の弱さじゃないから」
「……本当の、弱さ」

それは私がまりなさんを封印できずに迷っていた事を言っているのだろう。私がさっさと封印していれば……ザビーはこうして暴れる事も無かった。

でも……もしこの『迷い』が本当の弱さじゃないのなら　私はもう少し胸を張ってもいいのかもしれない。

「私があいつを止める。その間に……どうするかは貴女が決めなさい」
「……私が」

『Clock up』

言うが早いか、カプトとザビーは同時にクロックアップし不可視の速度で戦闘を始めてしまった。魔力の余裕がなくなったのか私へのバインドは自然に解かれてしまったけれど、私はそこから動けなかった。

私が　どうする。まりなさんを、どうしたいのだ。

巨大な狼という恐ろしげな姿に似合わず、子犬のように縮こまって震えるまりなさんを前に、私は一步も動く事が出来なくなってしまうのでした。

同時にクロックアップした赤いライダー『カブト』と黄のライダー『ザビー』の戦いは、些か奇妙な様相を呈していた。

カブトはその場を動かさず、空を見つめて立ち尽くす。そこに、ザビーの魔法『フォトンランサー』が死角を付く様に背後から襲う。

空間の魔力の乱れでそれを知ったカブトは、合気の間合い 紙一重の足裁きでそれを避け、続くザビーの高速突撃にクナイガンを合わせる。

気配だけでそれが直前の細かい操作が出来無い直射型魔法である、つまり『牽制』でしかないと読み切ったカブトの対応であったが、しかしザビーの『速度』は更に上を行った。

『Blitz Action』

黒き戦斧が唸り、クロックアップされた世界で更にザビーは加速した。

身体ごと捻ったザビーの大上段の一撃は、クナイガンの腹に当たる直前、突如左手側に『横滑り』してカブトの左肩に命中。

「……っ！」

なのはは自身の反射神経をもってしても受け止めきれない動きに、少しだけ驚きを示す。

しかし攻撃そのものは昔剣を師事した祖母との修行、『神速』と言う自身の捕らえられない相手に対する経験が、自然と身体を反らさせ致命傷を避けていた。

「……なかなかやるね」

なのはの戦闘の基本はカウンタースタイルである。これは御神流と言う人外の速度で襲ってくる相手に対し、検討・対策・対処に特化した結果、なのはが鍛え上げた独自の戦闘スタイルであった。

合気道を基本とし、対象の『観察』と『先読み』により捕らえられない速度を出される前に、後の先を取る事でその上を行く戦法。

『対御神流』とも言うべきこの戦法は、皮肉にも『クロックアップ』と言う人外の速度の怪物に対しても有効であった。

そして魔導に関しては天賦の才を持つのだが、精神性そのものはこの幼少期の修行により、常に自分を上回る相手に対する努力と挑戦が息づいている。

故に、新たに出現したこの好敵手に、なのははマスクの下でうつすらと笑みを浮かべたのだった。

「……ライダーシステム1号『カブト』の装着者に告ぐ。即時装備を解除し、投降しなさい。」

あなたはZECTの所有物を不当に占有している。本来ワームに向けられるべき戦力が削られる事は、全人類を危険に晒すに等しい事を認識しなさい」

「……」

片膝をつくカブトに、上空から滑るように接近したザビーは油断無く黒い戦斧を向けながらそう宣告した。

その声音は平坦で、機械的な物言いは 先程までZECTの魔導師相手に傍若無人に暴れていた様子からは一致しない。

怪訝に思いながらも、カブトは立ち上がり汚れを払うとクナイガンを構え直した。

「貴女はさっきまでその『お仲間』とやらと、随分と楽しく遊んで

いたようだけど？」

「……私は任務を遂行したまで」

「へえ、それは興味深い話ね」

カブトはクナイガンを放り投げ逆手に持ち替えながら、横目でちらりとジュエルシードモンスターとアリサを見る。

クロックアップしているので、先ほどからあまり時間が経っていない。今だアリサは蒼白な表情で自分の手を見つめていた。

「……繰り返し問います。投降しなさい。返答なき場合は 破
壊します」

「……」

身体に雷を纏いながら威嚇するザビーに、カブトは絶対的な不利要素を見ざるを得なかった。

それは、今ザビーが『飛んでいる』と言う事である。

なのは自身は、飛行できない訳ではない。実は既に飛行魔法と先ほどのザビーと似たような加速魔法は編み出していた。

しかし、使えない。『クロックアップ』と言う時空間操作魔法は、光速を遥かに超えるタキオン粒子を制御する事によって始めて実現している。

インテリジェントデバイスであるレイジングハートをもつてしても、その制御負荷は使用中常に80%オーバーで稼働している。

そこに飛行魔法や砲撃魔法を併用すれば、容易にハングアップしてしまうのは自明の理だった。つまり、クロックアップ中は他の魔法は使えないと考えるしかないのだ。

では他のデバイスを用意すればいいと考えるが、そうは簡単にはい

かない。なぜなら、『クロックアップ』に同期しなければ意味が無いからだ。

今この状態でなのはが別デバイスを使ったとしても、それはあくまで『クロックアップ』と言う加速状態の適用外になってしまう。

そして、ザビーは今このクロックアップ空間で各種魔法を事も無く同期させて使って見せた。どうやってそれを可能としたかは、窺い知れない。

しかしそれが出来る、と出来ない、では単に戦術の幅の広さ以上の意味を持つ。カプトとザビーの差として厳然と存在しているのだった。

「……じゃあ、此方からも質問」

「私の質問に答えなさい。はぐらかす気なら、今すぐに」

ザビーの質問には答えず、カプトは上空に浮かぶザビーを真っ直ぐ見つめた。そこに恐れはなく、ただ王者の風格をもってそこに存在していた。

自身とカプトの性能差を事前に知っていたザビーは、自らの不利を感じさせないカプトの様子に苛立ちを喚起させられる。しかし語気に現す事無く、あくまで機械的に応対しなければならぬ。

フアジーな思考は制御を乱す。私は機械、機械は私　と自らに言い聞かせていたザビーを、なのはの一言が貫いた。

「あのジュエルシードモンスターを造ったのは　貴女だね」

「ッ！……」

驚きに詰まらせた言葉がその内容を肯定している事に気付いたザビー　フエイト・テストロッサはしかし、反論するタイミングを失って沈黙するしか無かった。

天の道を往き、総てを司る女

『Clock over』

それは正に、一瞬の出来事だった。カブトと黄色のライダーがクロックアップした……直後に、二人は再びその姿を現した。カブトは、勿論何時もの余裕を保ちながら。そして、黄色のライダーは……胸を押さえ、苦しげによるめきながら。

「カブト……」

それは、ある意味予想通りの光景だった。あのなのはが膝についている所なんてのは、ちよつと想像できない。

しかし、見た所あの黄色のライダーには傷らしい傷は見当たらない。なぜ苦しげなのかも分からないけれど、どうやらなのはは約束を果たしたようだ。

なら……次は私の番になる。私は向き合わなくちゃいけない。

「……エイミイさん、質問してもいいですか」
『……ええ、いいよ』

私は特に加工もしないオープンの念話で、エイミーさんに通信をつなげた。聞きたい事……いや、聞かなくちゃいけない事がある。聞きもせずに、調べもせずに、ただ呆然と突っ立ってるだけなんて……そんなかつこ悪い姿、あのム力つく女の前で晒せないしね。

「ジュエルシードの暴走を止めたら……ジュエルシードを封印したら。」

「まりなさんは、どうなるんですか？」

『……………』

エイミーさんという人は、言葉以上に表情で返答するのが巧い人だ。嘘がつけないというか……正直と言うか。私が言うか！って話もあるけど、そこは棚に上げておく。

悲しげに下がる目尻だけで答えは貰ったようなものだけど、一度ちやんと言葉で聞いておかないと後悔しそうだから……彼女が言い出すまで黙っていた。

『まずね、今回のジュエルシードはちょっと特殊な発動の仕方をしているの。』

最初に暴走しているジュエルシードはあの子犬　　メアリの『飼い主に元気になって欲しい』と言う願いで起動している……これが1個目』

「……………1個目？」

『……………そう、現在まりなさんの体内には3つのジュエルシードが存在しているの』

「なっ!?!？」

3つも存在していたとは、流石に想像できなかった。驚く私を置いておいて、エイミーさんは続ける。

『ジュエルシードは願望器だけど、決して万能じゃないの。願いを受諾すると、それが自分に可能なレベルまで捻じ曲げて解釈して発動しようとする……って言う厄介な性質があつてね。』

大抵はこれが原因で暴走してしまうんだけど……どうやら、近くに2個目のジュエルシードがあつたみたいなの。

それが、1個では実現できなかった植物状態からの復活を成し遂げてしまったみたい。……不完全ではあつたけどね』

「……」

植物状態からの復活……か。どういった理屈で治つたのかはわからないけれど、それが本当なら素晴らしいことだ。

現代医学の不可能を超える医療なんて、人類の夢だろう。……例えば、それがいつか覚めるユメであつたとしても。

『……彼女の身体は少しずつ、崩壊していたみたいね。バリアジャケットと同じで魔力を擬似物質化させて欠損部分を補っていたみたいだけど、』

時間が経つにつれて肉体との乖離が大きくなるみたい。あくまで願つた時点での肉体しか補わないみたいだから……いずれ、彼女は

……』

「……そう、ですか」

そこまで聞いて、私はなのとは話した時のことを思い出した。………
思えば、彼女はもうジュエルシードの存在には気付いていたんだらう。

あの子犬　　メアリがジュエルシードを銜えていたのも、今思えば主人を助ける為に新しいジュエルシードを集めていたのかもしれない。

『そして、3個目。私たちが結界を張つた影響もあつて、不安定な

魔力がメアリの『強くして欲しい』と言う願いを暴走させてしまっ
た』

「……………」
『結果的に暴走させたのは3個目だけど……………いずれ、肉体との乖離
を修整しきれなくなったジュエルシールドは、願いを捻じ曲げて暴走
するのは避けられない』

まりなさんは、その巨大な四肢を踏ん張って苦しげな咆哮をいくつ
もあげる。その姿は確かに傍目からは強靱に見えるけれども……………私
には、今にも消え去りそうな花火のように見えた。

そのとき、黄色のライダー『ザビー』がよろける足でまりなさんの
ほうへ近づく姿が映った。まだ何かやる気かと警戒したけれど、ザ
ビーは意外な言葉を発した。

「……………まだ、間に合う」

「……………え？」

「暴走、している、3個目のジュエルシールド……………あれさえ、封印、
できれば、ある……………は……………」

『Scythe Slash』

その手に持つ黒い戦斧から再び雷の刃が生まれ、よろけながら歩く
ザビー。……………でも、今ザビーは何と言った？

もしかして、私は、とんでもない勘違いをしていた……………の、
かもしれない。

「……………あんた、まさか……………まりなさんを……………救おうとしてた、の
……………」

「……………」

暴走しているジュエルシードのみを、封印することで。このささやかな『ユメ』を……守ろうとしていたの、か？

だとしたら彼女が現れたのは……まりなさんの近辺に三個目のジュエルシードを、確認したから？

「……………そんな」

私は思わず、全身で虚脱してどさりとへたり込んでしまった。もしそれが本当だとしたら……私たちは全く意味の無い戦いを行い、そして私たちがこの手で、まりなさんという『ユメ』を壊してしまつたと言つ事になる。

「嘘よ……嘘よそんなことっ！」

地面に顔をつけた私の脳裏に、あの向日葵のような笑顔が浮かんだ。あの笑顔を自分の手で壊してしまったただなんて……そんなの酷すぎる。

私が再び自分を見失い、動けなくなる中ザビーはまだ諦めずに前へと進んでいた。

がりがりど地面を削りながら戦斧を引きずり、まりなさんに構え直したザビーは、そのまま大上段に振りかぶり　その足を噛む小さな生き物にその動きを止められた。

「……………あ」

そこには、必死に飼い主を守ろうと足首に噛み付く子犬　メアリがいた。その姿に、かつて助けた子犬の姿が重なる……重なってしまった。

ザビーは完全に気力を喪失し、ゼクターが自動的に腕輪から外れる

と転移門を通り蒼穹へと飛び去った。
後には9歳の身体に戻った少女　フェイト・テストロッサが黒いバリアジャケットのままに残されたのだった。

「……る、ふ」

そして何かを呟きながら、私と同じように膝をつく。動けない私たち二人の間に、カブトが立つ。

動けない私たちを全て背負うとでも言うように、頼もしく、真っ直ぐに。ただ、私はその背中を見上げるだけしか出来なかった。

「おばあちゃんが言っていたの」

その右手が天を指す。

「下拵えで流さなかった汗は、後片付けで涙となって流れる……ってね」

ただ、その所作だけで人を惹きつけるのは、なのはの才能なのだろう。私も、あの魔導師の少女も、ZECT隊員であつてさえ、全員が彼女に注目した。

「彼女はまだ生きている。生きようとする意志がある。……なら、ジュエルシードなんか頼らずに、いつか起き上がる。」

私たちに今できる事。それは彼女の意思を、可能性をこそ守る事じゃないのかな？」

それはつまり、このユメの終わり。全てのジュエルシードの封印。私にそれができるだろうか？……いや、やらなければならぬ。

何を投げ打つてでも、これだけは自分の手でやらなければ、後悔す

る。そんな自信が有った。

「……………はあ」

一瞬すべてを忘れ去ったため息をついたら、急に肩の力が抜けた。いつもいつも私を扱き下ろし、そして励ますあの女はどれほど私の心に影響を与えれば気が済むのだ。

私が何時もどんな気持ちで貴女を……………いえ、なのはは癪に障るほど何時もどおりだ。だから、これが終わったら泣くまでぶってやる！と誓って私は立ち上がった。

「……………そうね。後悔するにはまだ早いわね。クロノ」

「……………できるか？」

「ええ。バックアップをお願い」

「分かった」

何を言わずとも、クロノは私の気持ちを斟酌してくれたらしい。ZECT隊員により周囲の結界密度が上昇し、少々の大技でも町に影響が出ないように取り計らってくれた。

私は立ち上がり、あの少女に避けられたブレイラウザーを拾う。そして柄のカードスロットを展開させ、一枚のラウズカードを取り出した。

ZECTによりジュエルシードの封印専用で作られたストレージであるラウズカード。これを使うにはまず暴走状態のジュエルシードを、鎮めてやらなければならない。

私は意を決し、彼女を見た。

「……………カプト、お願い」

「……………」

「まりなさんを……助けてあげて」

3つのジュエルシードが同期して暴走しているまりなさんは、私の魔力では到底鎮められそうにはない。しかし、この憎たらしい女なら涼しい顔でやってのけてしまうだろう。

私はこのときばかりは何時もの嫉妬心は抑え、心の底からなのはに頭を下げるしかなかった。

「……分かったよ。でも、三つのジュエルシードを抑えて、宿主を引っ張り出すのは少々骨が折れるね」

「私が、やる」

そこへ名乗りを上げたのは、戦斧を持つ魔導師の少女。暗く沈んでいた瞳はいつの間にか炎を宿し、眩しいほど真っ直ぐ澄んだ目でまりなさんを見ていた。

……なんだ。私の直感も当てにならないな。こんな綺麗な目をした女の子が、まりなさんを害すると思ってしまうとは。

「……あの人がこうなったのは私の責任。私が必ず、救い出してみせる」

「そう。貴女、名前は？」

「私は」

カブトの問いに少女は少しだけ目を瞑り、もう一度右手を高く掲げた。そこに幾何学模様の転移門が形成され、その中心から颯爽と黄色いゼクター『ザビー』が姿を現した。

「フェイト・テストロッサ。ZECT第零……いえ、仮面ライダー・ザビー」。

変身」

『Henshin』

少女　　フェイトは周りを飛び回るゼクターを右手で掴み、もう一度左手の腕輪に取り付けた。

直後に魔力流が発生し、フェイトはその身体を大人の姿に変えながらヒイロノカネの装甲に身を包んでゆく。

一瞬見た裸身が嫉妬するほど素晴らしいプロポーションなのは置いておいて……思わぬ援軍に私は思わず頬を緩ませてしまった。

「分かった。なら、私とフェイトちゃんデジュールシードの反応抑制と宿主の救出。封印は私たち三人で平等に分配……これでいい？」

「……了解」

「OKよ。クロノもそれでいいわね」

「……」

心情的には私は納得したけれど、ジュールシードをカプトに渡してしまうのはZECTとしてはまずい。クロノは渋面を作り、いいとは言わなかったが、駄目だとも言わなかった。

彼とてカプトの協力なしの封印は　　ザビーがいれば出来そうな気もするが　　不安があるのだろう。それに、今までのカプトの働きからこちらを害する意図は無いと分かっているし。

沈黙は肯定と受け取った私は、二人に向けて頷いた。

「さあ、優しい夢の時間は終わり。美味しい朝粥を作ってあげるから、早く起きなさい」

カプトが構え、ザビーが飛ぶ。私はカードを構え、タイミングを待つ。

苦しげに遠吠えをあげていたまりなさん　　いえ、狼のジュール

シードモンスターは終に何かが決壊したのかその身に紫電を纏わせ、私たち三人を巨大な瞳で睥睨した。そこに理性の輝きは無く、零れ落ちる涎はただ食欲のみに突き動かされる獣の如くだらしない。

「……まりなさん。今、楽にしてあげますからね」

私はその光景に胸が締め付けられそうになりながら、ラウズカードに魔力を込める。と、突然巨大狼は疾駆してその牙を突きたてんと襲い掛かってきた。

巨大な身体に似合わず、素早い動きは野生の狼そのもの。相手が私一人だったらあえなくその一撃にやられていたかも知れない。しかし、受ける私たちは一人じゃない。

『Wide Area Protection』
『Defensor』
『Metal』

カブトとザビーのシールドが、私の硬化魔法が攻撃を弾く。甲冑はザビーに破壊されてしまったが、ブレイラウザーにプリインストールされている魔法はまだ使えるのだ。

二人と違って自分専用の防御魔法なのは、なんだか申し訳ない気持ちになっってしまうけれど……。

『グギヤルルオオオオオオオオン』

巨大狼は自らの牙が通らない事に苛立ったように、何度もプロテクションに牙を立てる。しかしその才により並ぶべく者のない、なのはご自慢の防御魔法では相手が悪かった。

等のカブトことなのは、焦る事無くがしゃり、とレイジングハー

トを狼に向け自身の魔力を展開させた。

『Buster Mode』

「デイバイン」

その身に宿る恐ろしいまでの魔力を凝縮し、放たれる一撃は破壊の煌き。カブトの隣にいて尚、硬化した肌の上からぴりぴりと粟立つ感覚はそのでたらめさをを物語っていた。

「バスター」

『Divine Buster』

桃色の閃光は自らのプロテクションごと巨大狼の左前足を引き千切るように直進し、背中から貫通。遅れてその痛みを示す咆哮が海鳴りに轟くように響き渡った。

続いて、ザビー フェイトが空を舞う。その戦斧に閃光を乗せ、軽やかな動きで右前足を断つ。

「はっ！」

遅れて又咆哮が聞こえ、両足を失った巨大狼は後ろ足だけで芋虫のようにのたくる。その姿に心がきりきりと痛むが、二人は無駄な痛みを与えた訳ではない。

砲撃と斬撃によって舞い上げられた両足には、その中であって青く輝く宝石が見える。今だ反応衰えぬジュエルシードのきらめきが、今はただ恨めしく思えた。

「キャストオフ」

『Cast off』

そしてザビーは白無垢の装甲を脱ぎ捨て、蜂の姿を顕にする。巨大狼の周りを変幻自在な機動で飛び回るその姿は、まさにその名の如く。

『Change Wasp!』

二人のライダーは頷き、巨大狼中央の本体に残るジュエルシード、そしてその奥で膝を抱えるようにして眠るまりなさんを見とめる。何の打合せもなく、しかし示し合わせたように二人は同時にその手を自らのゼクターへと伸ばした。

「……大人でしょ。少しだけ、痛いのは我慢しなさい」

『One』

『Two』

『Three』

カブトがゼクター上部のスイッチを順に押し、ホーンを左へ倒す。同時にザビーが飛び上がり、上空からふわりと巨大狼へ向け自由落下。

「ライダー……キック」

『Rider Kick!』

ホーンを右へ戻すと同時に、カブトゼクターから波動化したタキオン粒子が左足に集中する。のたうつ巨大狼を19tの威力の蹴りが

容赦なく上空へと跳ね上げた。

そこには、待ち構えていたザビーがいる。ザビーが左手のゼクターのスイッチを押し、静かにその左手を振りぬいた。

「…………ライダーステイング」

『R i d e r S t i n g e r!』

波動化したタキオン粒子により強化された必殺の一突きは、狙い違わずジュエルシードのみを突き刺す。

その一撃により、ジュエルシードの暴走反応は完全に消滅。巨大狼は霧と共に魔力の雲となって飛散し、宿主　　まりなさんは解放された。

…………さあ、最後の仕上げの時間だ。

「…………災厄の種を、ここに封じ給え」

カブトのレイジングハートが、ザビーの戦斧が、私のラウズカードが、それぞれ唸りをあげる。各々の思いを乗せ、3人の封印魔法が発動した。

「…………ジュエルシード、封印」

カブトのレイジングハートからの伸びる光の帯がジュエルシードを絡めとり、しっかりと封印術式を編み上げる。

ザビーの戦斧から伸びる光の格子はジュエルシードを縛り上げ、拘束する。

そして私が投げたラウズカードはジュエルシードを吸い込み、封印すると表面に『?』という数字を刻んだ。表示されたのはシリアルナンバーだ。

これが私の……ジュエルシード初封印。でも、感慨に浸る前にやるべき事がある。

「ザビー、まりなさんを！」

そして、封印が終わると私はザビーに宙に浮かぶまりなさんのことをお願いした。こくりと頷く彼女は、直後にクロックアップし、無事地上まで降ろされた。

病院から抜け出したままの格好だったのか、病院服のままであるまりなさんはザビーの腕に抱かれ、どこか安らいだような表情だった。

「……まりな、さん」

ザビーの腕からまりなさんを受け取ると、待ちかねた様にメアリが飛び込んできて顔の辺りをすんすんと嗅ぎまわり切なそうな声を上げる。

彼女は今だそれに応えることは出来ないけれど……いつか立ち上がる。そう信じなければ、私は……。

「メアリ、家に来る？一緒に、まりなさんが起きるのを待とうか……」

メア리를ぎゅっと抱き上げると、じたばたと暴れまりなさんの元へ行こうとする。でも、そのまま抱き締めていると私の指をゆっくり舐めてくれた。

その様子をじっと見守っていたザビーは、すっと目を逸らすと背中を向け、カブトへ言った。

「……カブト、貴女へは抹殺命令が出ている。いずれ、私は……貴女を殺しに来る」

「面白いね……出来るものならやってみなさい」

それを不敵に受けるカブトには、気負いも無く何時もの自然体だ。それがなのほらしいといえばらしいけれど……あの真っ直ぐな瞳の少女が『殺し』を行うって言うのは許せない。

だから私はもう一度気合を入れて立ち上がった。カブトが言わない事を、私が言うために。

「駄目よ。人殺しなんか駄目……貴女はそんなことが出来る人じゃないでしょう?」

「……」

ザビーは私に目を向け、そして目を逸らした。どうも避けられてる様だけれど……そんなの気にしない。私は私の確信を貫くのに躊躇はしないんだから。

人によつてはおせっかいなんて言うけれど、それが正しいと信じているなら私は止めない。

「……カブトとザビーの性能差は明らか。今のうちに降伏すれば、命までは」

「くどいね」

「……そう」

「カブト……」

はあ……とため息をつきたくなるほど、カブトは喧嘩腰だ。あのなのが折れることを知らないのは分かっているけれど、少しは妥協する姿勢を見せないと交渉にもならない。

だからザビーは変身を解くと、無言でその黒いマントをばさりと翻し飛び去って行ったのだった。

「少しは、話を聞きなさいよ……」

「私は逃げも隠れもしない。殺しに来るのなら、迎え撃つだけだよ」

「……はあ、そうね。貴女はそう言う人間なのよね」

カブトに説得は効かない。でも、私は諦めない。あの悲しげな瞳が忘れられないから。

「でも、あのフェイトって娘の目は真っ直ぐだったわ。『殺し』だなんて……出来る娘じゃない。そんなこと、絶対にさせたくない。

だから、カブト……貴女にも協力してほしいの」

「……」

思わず力が入って、メアリが苦しそうな声を上げたので慌てて放しあげた。地上に降りると私の足に寄り付くメアリ。

その様子を見つめるカブトは、徐に背を向け天を仰ぐ。そして、私に言った。

「じゃあ、教えてあげる。北条まりな、彼女をジュエルシードモンスターにしたのは……」

あの娘　　フェイト・テストロッサだよ」

「……え？」

そしてその言葉は、またしても私の心を大きく揺さぶることになる。カブトの伝える事実は、余りにも先ほどの彼女の在り方と一致しない。

私の中の確信は『違う』と告げていたけれど……あのなのはの事だ。嘘は言うまい。なら……」

「……なら、確かめなきゃ。あの娘がしたとしても、きっとそれには何か訳があったのよ」

「へえ……」

私がそう答えると、カブトは感心したように頷いた。そして私に歩みより、ぽん、と頭にて手を置いて撫で始めた。
……って、子ども扱いしないでよっ！

「少し成長したね、アリサ。素直に嬉しいよ」

「馬鹿にしてるのっ……！！」
「全然」

それでも頭を撫で続けるカブトに、私はこれまでの狼藉も含めた怒りを加えて吼えたのだった。

「見てなさいっ……！！いつか絶対　貴女を越えて見せるんだから……っ！！」

今はまだ、私には何も出来ない。魔力も劣り、クロックアップするワーム一匹倒す事はできない。

でも……と、私はジュエルシードを封印したラウズカードをぎゅっ
と握り締める。私にもできる事がある。そして、私にはやりたい事がある。

そしてその為には、目の前に立つこの大きな背中に追いつかないといけないのなら……私は走る。全力で。それが『私らしく』って事なんだから。

「……私は、待たないよ。だから　」

そして、私の頭に置いた手をなのは天に伸ばす。何時ものそのポーズは、どこか眩しく見えた。ちょうど結界が解除される瞬間、世界が現実に復帰するその僅かな時間。

輝く太陽がプリズム効果で七色に光る後光を背負い、カブトは言った。

「私という太陽に届くものなら、追いついてみなさい。星がいくら輝いても、太陽には届かないけどね」

そう告げるのはは、まったく不敵で。だからこそ、私は越えるべき壁としての頼もしさを感じていた。

あの少女　　フェイトの正体、彼女の事情は謎に包まれている。彼女がまりなさんにジュエルシードを渡したのだとしたら……それは、ZECTを疑わなければならなくなるかも知れない。

しかし多くの次元を支配するという時空管理局相手に、まったく引かない女がここにいる。自らを太陽と名乗る、とてもイラつく女が。

「…………ふふ、バーカ」

だから時空管理局やZECTの恐ろしさよりも先に、この馬鹿女にどうやって復讐してやるうかと思わせてくれるのはは、たぶん、間違いない私の中で何よりも恐ろしくて頼もしい。

彼女とこうして出会った奇跡って言うのは、良くも悪くも今の私が生きる上で欠かせないんだな……と、苦笑しながら気付いた私なのでした。

その戦いは、熾烈を極めていた。

開放された4つのジュエルシードが共鳴し、誕生したジュエルシードモンスターにカブトはおろかザビーの力でさえ届かなかった。

ザビーは斃れ、あののはでさえ膝をつき絶望の表情で顔を俯かせてしまっていた。

ユーノが必死に防御結界を展開しているが、徐々にその膨大な魔力に圧されたのか輝が入ってきている。このままでは何れ崩壊してしまうだろう。

絶望の表情をしたのはとユーノの二人を背に、残るは私　アリサ・バニングスが立ち向かうのみとなっていた。

「……まずい、このままでは次元の亀裂が広がるのを止められない」
ジュエルシードの共鳴反応を押さえ込んでいるクロノは、額から汗を流しながら必死の形相でアリサを見た。

彼らの魔力も限界が近い。もう後数分も抑えておく事はできないだろう。だから

私はクロノ達の願いを背に、西洋竜に長い蛇のような胴体を持つ巨大なジュエルシードモンスターを見上げた。不安は無い。それよりも……皆を守ると言う強い力が全身から迸るように感じられた。

「戦うわよ……もう一度。私たちの力で。私たちと……すずかの力でっ！」

私が二人に向けて頷くと、その熱い思いが伝わったのか絶望の表情から一転して凜々しく私を睨み返した。……うん、なのははこうでなくちゃ。

ちなみに私がなぜ『すずかの力』と言ったかは良く分からない。ただ、なんとなくそんな気がしたからだ。たぶん。

……あ、よく見るとジユエルシードモンスターの胸元に取り込まれたすずかの姿が見えた。あれ、すずかの願いが暴走したやつだったのか。

私たちは立ち上がった二人と並び、それぞれデバイスを構えた。私はRS02B……通称ブレイバツクルを腰に巻くと左手を腰に、右手の甲を向け顔の位置まで上げた。

ユーノは私と同じカードスロット付きの改造ストレージデバイスRS01G……通称ギャレンバツクルを巻く。私とは逆に右手を腰に、左手を顔の位置まで上げる。

結界の維持をなのはに任せたクロノは、私たちとは少しデザインの違う改造ストレージRS03L……通称レンゲルバツクルを巻く。そして、左手で顔の半分を隠すように、また右手を左腰に構える。

「変身っ！」

『Turn up』

『Open up』

タイミングを合わせた私たちは、一斉に唱和した。私は手のひらを返し、ユーノは左手を深く握りこんでバツクルのレバーを引く。

ブレイバツクルとギャレンバツクルからスピードとダイヤの紋章が描かれた転送魔方陣が形成され、勢いよく通り抜けると西洋甲冑のような特殊装甲が装着された。

私　　アリサ用の甲冑が頭の先端が尖ったカブトムシのようなフォルムをしているのに対し、ユーノの装甲は頭の先端が二つに割れたクワガタのような形をしている。

どちらもZECTが改造したヒビイロノカネ製の装甲だが、私のブ

レイドが接近戦に特化しているのに対しユーノのギャレンは近中距離戦で戦う仕様だ。

銃型のギャレンラウザーは攻撃魔法の苦手なユーノが使ってたさえ、なのはの直射魔法と同等の出力を叩き出す銃撃が使えるのだ。

そして、クロノのレンゲルバツクルからはクラブの紋章の転送魔法陣が展開され、自動的にクロノの身体を通り抜ける。

緑を基調とした、どこと無く蜘蛛を連想させるデザインのアゴ。そして先端にクラブの紋章の乗った錫杖のようなレンゲルラウザー。上の二体とは違い、凍結魔法や封印されたジュエルシードの開放呪文など搦め手に長けた仕様のライダーである。

「うわああああああつー！」

そして空を舞う巨大な竜型のジュエルシードモンスターに向けて走る私たちは、それぞれ封印したジュエルシードのラウズカードを取り出しラウズアブソーバーのスリットに通す。

ちなみに私は良く知らないがラウズアブソーバーと言う機械が左腕についていたのだ。……うん、何だか良く分からないけど。

『 Fusion Jack 』

『 Fusion Jack 』

私とユーノが同じ『??』のカードを　なぜシリアル??のカードが二つあるのか良く分からないが　ラウズさせると、封印されたジュエルシードの力で私達に黄金の翼が生えた。

飛び上がる私達に対し、システムの関係上飛行魔法を使用できないレンゲルは一枚のラウズカードをレンゲルラウザーにラウズさせた。

『 Float 』

そのカードをラウズさせたレンゲルに見た目状変化は無いが、浮遊魔法がかかったらしいレンゲルは浮き上がり私達三人は一丸となって敵に突撃した。

それぞれの得物で西洋竜の身体を攻撃するも、その身体は硬く身動きしただけで私たちは逆に地面へと叩き落されてしまった。

それでも私は闘志を抱き、立ち上がると左腕のラウズアブソーバーを展開して『???』のカードを取り出し、ラウズさせた。

『Evolution king』

その瞬間私が封印した13枚のラウズカードがスロットから飛び出し、私の周りを舞うと甲冑に吸い込まれるようにして融合。

各所の黄金のレリーフが追加された装甲は、夕焼けに輝く荘厳さに満ちていた。ジュエルシードの魔力で強化されたその装甲は、100tの衝撃にすら耐える。

左手に現れた新たな得物はキングラウザー。ブレイラウザーを超える黄金の大剣は、次元すら引き裂く13個のジュエルシードの魔力を使いこなす。

その力と一つになった私は一気に飛び上がると、ラウズアブソーバーから飛び出した5枚のカードをキングラウザーにセット。

『Spade Ten』

『Jack』

『Queen』

『King』

『Ace』

最強の5枚のカードコンボで引き出す魔力は、既に個人で持ち得る量を遥かに超え次元航行艦クラスの出力を誇る。

作りもしないだろう。

しかも100tの衝撃に耐える装甲とか次元を引き裂く剣とか……
ああ、自分ながらなんて頭が悪いんだろうと掻き毟りたくなるが、
もうあまりここに居たくないのですさっさと進める事にする。

「……夢か」

思い切り捻った右頬の痛みと共に、私 アリサ・バニングスは
自室のベッドの上で右頬を捻った状態で目を覚ましたのであった。

天の道を往き、総てを司る女

さて、突然だが今日は温泉である。鮫島の話によると、そのあらま
しは家になのはとすずかと三人で集まった時、私がお手洗いに行っ
ている僅かな時間で以下のように進展したそうだ。

1、以前なのはが皆にアイスクリームの誘いを断ったお詫びとして
料理を振舞う約束をしていたので、今度の日曜食べに来ないかと提
案。

2、いいねいいねと目の中に大量の星を輝かせて少女漫画チックに

喜びを表現したさすが、それならどこか別の場所に行こうよ、出来ればお泊りで！などとノリノリで要望を追加。

3、そしてお茶を持ってきた鮫島が、それはいいですな旦那様にも予定を確認して参りましたよなどと余計な事を言い出した。

4、連絡を受けたマイペアレンツは、『ごめん私たち参加できない。でも月村さんとこと高町さんのお姉さんが一緒なら行ってもいいわよむしろ連れてけっ！……あの娘にはナイショで』と、妙にテンション高いノリで私の強制連行を決定。

かくして当日まで何も知らされていなかった私は、土曜の朝起きるなり慌しく着替えとボストンバックを渡され、ハムエッグを喰らいながら家のリムジンに放り込まれたのであった。

リムジンでは既に準備を終えたさすが『おそーい！』なんぞとほざきながらごすごす私の頭を叩く。最近知ったのだがさすがのパンチは威力が高い。

私一人を余裕で引き摺れるのだから力はあるのだろうと思っていたが、実はこの間握力検定で測ったら60を超えていた。なんじゃそら。大人か！むしろ男か！

「……で、温泉旅行になったってこと？」

「そうだよ！……アリサちゃん、知らなかったの？」

「……」

私がじとつとした目で運転席に戻る鮫島を見やると、しれっと「旦那様の指示でございます」などとぬかしおった。

余計なサプライズなんぞ思いついた両親もアレだが、律儀に今日まで何も無い風を装って準備を進めてきた鮫島にも腹が立つ。

きっと私がないのは主催なんて言ったら敬遠されると思ってひた隠しにしていたのだろう。良く私の事を分かっているじゃないか。パーフェクトだ、鮫島。後でボコるけど。

「……まあ、その件は置いておいて。とにかく、お久しぶりです、忍さん」

「お久しぶり、アリサちゃん。また背伸びた？」

「もう、そこまで変わってませんよ」

などと同乗しているすずかのお姉さん、月村忍さんと挨拶を交わす。忍さんは今年18になる黒いロングヘアが特徴の女性だ。明るく、社交的なため方々の人気も高い。

……のだが、あまり浮いた話を聞かない。7年前の海鳴隕石の後は大分荒れていたようだけれど、今は生来の明るさが戻っている。あの隕石で大切な人を亡くした人は数多い。彼女もその一人なのだろう。

幸いウチは全員無事だった。郊外に居を構えていたのが功を奏したのだ。でも、ふと思ってしまう事がある。

『もし、両親が死んでしまっていたら』、と。そんなIFは無かったのだから、考えても意味は無い。

しかし本当にそうなっていたら……私はどうしたんだろう。どうなっていたんだろう、と。考えてしまうのだ。

そう、血塗れで斃れている二人の姿なんかを想像してしまったら

「……………」

どくん、と大きく脈打つ心臓の鼓動で私は我に返った。

「どうしたの、アリサちゃん？顔が白いよ」

「……それを言うなら『青い』でしょ。肌の白さは元々よ」

「白さなら私も負けてないと思うよ。でもアリサちゃんの白さはア

しだよ。健康的な白さって奴だと思っ」

「そうかなあ？……まあ、確かにすすかは何時も青白い気がするけど」

「なにそれ、酷いよう」

あははー、などと笑いながらすすかが茶化しを入れて来るものだから、つい乗ってしまった。

へんな妄想に耽っていた私にとっては正直助かった思いだった。暗い顔して考え込んで切る奴なんて、車内の空気を悪くするガンでしかないだろうし。

この娘はこういう空気の読み方にかけては何処か神があったものを持っている。将来はさぞ良妻賢母という奴になるのだろう。

……まあ、今は単なるなのは追っかけだが。

「ところでその主催者はどこ行ったの？」

車が市内じゃなくインターチェンジへ向かった事から、どうやら高町家へは向かわないと分かったので聞いてみる。返答は忍さんからだった。

「実はなのはちゃんがもう一人誘いたい人がいるから後で行く、って言うててね。現地で合流する事になってるの」

「はあ」

誰を呼ぶのか分からないが、事前に話を通してなかったのだろうか。いきなり付き合わされる誰かさんも大変だ。唯我独尊も程ほどしておきなさいよ。

「一緒に行きゃいいのに。旅ってのは最初から最後まで揃って行くのが醍醐味ってもんよ」

「じゃあ、アリサちゃん。朝から一緒になのはちゃん家待ち合わせ
って言ったら来た？」

「……行かない」

そもそも私はなのはと一緒に旅行なんぞ行く気はさらさら無かった
のだ。それが両親と鮫島の策略で、今こんなところに座っているだ
けなのだ。

でも、旅行は旅行で楽しみだ。が、こういうのは行く先の予定を決
めたり準備している間がもつと楽しいのだ。

あれ見たいなー、あそこも行きたいなー、などと考えるのが至福の
時。だからその楽しみを奪われた私はちょっと残念にも思っている。
旅の予定を立てるときはね、誰にも邪魔されず、自由で……なんと
いうか、救われてなきやあダメなのよ。独りで静かで豊かで……。

「まあ、どうしても一緒に行きたいってなのはの奴が頼むなら一緒
に行ってもいいけど……」

「行きたいも何も主催者はなのはちゃんだよ。そんなところにツンデ
してみても、アリサちゃんが行きたい事が見え見えになっちゃっよ
？」

「そっか、じゃあ今のなし。ゴホン、えーと……まあ、どうしても
一緒に来て欲しいってなのはの奴が頼むのなら一緒に行ってもいい
けど……」

旅自体はイベントと聞くとテンションが上がってしまう行動派の私
にとっては大歓迎の拍手喝采、大喝采なのだが、唯一なのは主催と
言うのが気に入らない。

だから一応『なのはの奴が』的な発言で否定してみるが、さすが
に冷静に突っ込まれて言い直す私。

「じゃあ来なくてもいいよ、ってなのはちゃん言いそうね」

「しかも走行中の車内からドア開けて蹴り出しそう」
「ちよつとマテそこの姉妹」

にこやかに笑いながら恐ろしい想像を話す姉妹に、私の直感が告げていた。……この二人、間違いないさだ。しかも真性の。

「特にすずか。『なんでアリサちゃん怒ってんの？』みたいな真顔で首を傾げないっ！」

「誰もアリサちゃんのことなんて言っていないんだけど？」

「絶対私でしょそれ！話の流れから私しかいないでしょーがっ！」

「アリサちゃん自意識過剰なんじゃないの？」

こ、この女は……っ！可愛らしく傾げられた小首が更に苛立ちを倍増させる。男性が見たら心ときめかせる様な可愛らしさなのだろうが、生憎と同性にはム力つくだけだ。

そして獲物を見つけていたぶる様な目で私を見ながら、忍さんがわざとらしくすずかに抱きつく。……この姉妹、どこまで私を騷る気だ。

「まあこの年頃の女の子は多感なのよ。許してあげてね、すずか」
「分かったよ、お姉ちゃん。ところでアリサちゃん、ポケットがもつこりしてるんだけどどうしたの？」

「もつこり言うなっ！……これは、その……ポケットティッシュよ！」

ん？と不思議そうに私のスカートのポケットを見ながら言うすずか。実はポケットにはRS02Bが入っているのだ。

ZECTからは常時携帯を言い渡されているこのストレージ、待機状態でお弁当箱ぐらいのサイズがあるので持ち運ぶのが実はかなり厄介だ。

ポーチやバッグに入れておくのが良いのだろうが、いつ何時危険に遭遇するか分からないので直ぐ取り出せるポケットに入れておくのがベストだ。

……だが、代償として私のスカートのポケットがも　　こんもりしてしまふのだ。

「ちょっと詰め込みすぎだよ。アリサちゃんそんなにお手洗い近かつたっけ。尿漏れ？」

「こら、すずか！確かに最近は若い子もなるって話は聞くけど、そんなことばれたら恥ずかしいなんてもんじゃないわ……。

「ここはそつとしておいてあげましょ」

「そうだよね……ごめん、アリサちゃん。足りなかつたらティッシュ分けてあげるから遠慮なく言っつてね？」

「あのね……っ！」

この怪力S娘ども、姉妹で揃うと手が付けられなくなる。あんまりな言われ放題に、フラストレーションが急速に膨らみすぎて爆発しそうだった。

「ああ、もう！早く来なさいよ高町なのはっ！アンタがいないと私はどこにこのイライラをぶっつければいいのかよっ！！！」

イライラに負けてがー、つと吼えると、すかさずS姉妹がからかい出す。

結局どこまで行ってもおもちゃにされるのは私と言う話なのであった。

ぱら……ぱら……

紙を擦る音。ページを捲る旋律。それは、私が最も好きな音だった。母はいつもの卓で右手に本を、左手で端末を操作しながら。魔導師であるからにはマルチタスクで作業しながらの読書は造作もない。

ぱら……ぱら……

しかし、母が何かを考え込むとページを捲るペースが変わる。じつくり聴いていないとわからないこの変化が、私が唯一母の思考を垣間見える瞬間だった。

「……そう。ジュエルシードの願望器としての力は、所詮その程度という事ね」

ぱたん、と閉じられたその本は、私が書き留めた観察レポートにして、日記。

約一週間という間の……ジュエルシードモンスター　　いえ、
北条まりな』さんの観察レポートだった。

普通は一文書化しなくても私のインテリジェントデバイス『バルデイツシュ』のレコーダを参照すれば良いだけだけど、今はレコーダ容量が1/10まで減らされているので十分な記録ができなかった。

そこで手っ取り早く書面でレポートにして提出したというわけだ。

「生体細胞の再現、特に大脳皮質までほぼ忠実に再現して見せたのは良いけれど……完全な物質化までは出来ていない。

魔力で作られた細胞と生体細胞が拒絶反応を起こすのは明白ね。

完全な魔力細胞に置き換えてしまったらそれは使い魔と変わらない

駄目ね。この方法は無理だわ」

ほう、と溜め息をつき、母は椅子に大きく背を預けた。私はその後ろでただぼうつと立っていたただけけれど……母が何かがっかりしているのだけは気にかかった。

任務は完璧に遂行したはずだけど、私のせいで母の機嫌が損なわれたのなら　と思うと、不安で心がざわざわした。

「あ、あの……大丈夫、でした……？」

自分でも何が大丈夫なのかわからないけれど、何か声をかけたくて出てきたのがそんな言葉だった。

そんな私に一瞬だけ母は胡乱な目を見せたけれど、すぐに苦笑気味の顔に戻った。

「……いいえ、貴女は十分良くやってくれているわ、フェイト。今

回の任務は終了。しばらくはZECTの言う事に従って動いて頂戴」

「はい！……それで、その……これ」

「……これは？」

そして、私は機を見て後ろ手にずっと抱えていた箱を母に開いて見せた。

白いボール紙でパッケージされ、取っ手が付けられたそれには、小さく『翠屋』という文字がプリントされている。

あの世界では　あの地域かもしれないけど　そこそそ有名

なお菓子のお店で買ってきたもの。

小麦粉と卵を使ったふんわりした生地と、空洞になった真ん中に詰められた甘いかすたーどくりーむ。
アルフに突っつかれて無理やり食べさせられたけれど……正直世の中にこんな美味しいものがあるのかとびっくりしてしまった。
一口食べてから手のひらがべたべたになるくらい一気に食べてしまい、店員に変な目で見られてしまったけど……でも、この感動を母さんにも味わって欲しかったんだ。

「お祝いって言うか……その、任務も終わったし。ちょっと美味しかったんで、おみやげというか、その……おみやげ」
「……」

箱の中身を見る母の表情はどこか複雑だった。嬉しそうで、そうではないような……どちらともつかない表情に私は不安になる。
それでも、中からひとつ摘み上げたので私は店員から聞いた豆知識を一気に披露した。

「あ、それ……それは、甘いものが苦手な人でも食べ易いっていう甘さ控えめってやつだそう、です。」

その……かすたーどくりーむ？じゃなくて、あんこってやつが入ってて、ほんとは硬くてシューには向かないそうんだけど、お店の特殊な製法で柔らかくしててふわふわの上品な甘さが自慢の和菓子風しゅーくりーむだって……」

「……そう」

自分でもあがつちゃって何だか途中から言葉がおかしい気がしたけど……母さんは頷いて一口食べてくれた。

ゆっくりと咀嚼する母さんを固唾を飲んで見守る私。気に入られなかったらどうしよう……また怒られたらどうしよう……と不安にな

る私に、ぼそりと母さんは何かを呟いた。

「……………え？」

聞き取れなかった私が聞き返すと、母は微かに笑って言った。

「……………甘いわね」

「そ、そう？甘すぎたかな……………ははっ」

母は椅子から立ち上がると、私に背を向けた。心なしか、悲しそうな雰囲気が出て私は困惑するしかなかった。でも、やがて私を振り返るといつもの怖いほど毅然とした表情で私に向けて言った。

「フェイト、カブトゼクターを奪いなさい」

「……………え？」

一瞬呆ける私に、母さんはいつもの怖い目で手にデバイスを召還した。そう、いつもの……………鞭形に変形させたデバイスだった。バチィ、と、甲高い音を鳴らしてそれは私の腿を打った。痛いというよりも、熱い何かで擦られたような感触。

「……………あっ！」

声にならない悲鳴に、突然の衝撃。あまりに急な事に私は体勢を崩してしまふ。足への痛みにも反射的に屈伸してしまい……………箱を落とすってしまった。

べちゃり。

そして運の悪い事に、倒れこんだ身体を支えようと咄嗟に出した手は、箱を上から押し潰した。

かすたーどくりーむの柔らかい感触が、手のひらに広がるのを感じていた。

「お前は一度、性能的には劣るはずのカプトに敗北したね」

「負けたわけじゃ　　っあ！」

ばちん、と。私の言葉を塞ぐように、今度は左頬を叩かれる。赤く腫れる頬を押さえながら、私は続きを聞いた。

「口答えするんじゃないわ。あの時動揺したお前がゼクターとの同調を切断したのはログから分かっているのよ？」

「……………」

「いい？お前の存在価値はゼクターとの同調演算なのよ。下らない情緒で同調を乱さないで頂戴」

「……………」

「分かったなら返事をしなさいっ！」

完全に萎縮して声も出せない私に、母さんの鞭が再び風切る。ぎゅっと目を瞑って痛みを待つけれど、いつまでたっても衝撃は来なかった。

代わりに聞こえたのは、ぶうん、という羽音。そして母さんのどこか忌々しげな声だった。

「……………そう、まだお前は私に逆らうのね」

「……………あ」

恐る恐る目を開いた私の目に飛び込んできたのは、黄色の閃光。私に振り向けられた鞭をその身体で抑えている一匹の蜂の姿だった。

「……………ザビー」

その蜂　　ザビーゼクターは母さんを牽制するように幾度か私の周りを飛び回り、肩に腰を落ち着けた。

ザビーは尻尾の針を母さんに向け威嚇していたけれど……私が手でザビーを押さえると漸く針を仕舞ってくれた。

「……ふん」

それを見た母さんは、鞭をデバイスに戻すと興味を失ったかのように椅子へ座り直す。

ザビーはまだ暴れたりないとはかりに私の手の中で暴れるけれど……
…母さんを傷付かせる訳にはいかないから必死で抑えていた。

「フェイト、お前とザビー、そしてバルディッシュ。三つの制御の
> ruby<>rb<完全なる同調>rb<>rp<」>rp<>
rt<パーフェクトハーモニー>rt<>rp<」>rp<>/r
uby<こそがお前達の総て。

せいぜい仲良くする事ね。でも、カプトゼクターは必ず奪ってきてなさい。良いわね?」

「……はい」

こつこつとヒールを鳴らして去る母さんに、漸くザビーは落ち着いたのが大人しくなった。

私が必死で抑えていたせいか、カスタードクリームが付いてべたべたになっていた。

「……もう、食べられないね」

潰れたシュークリームを手で集めていると、ふと、赤みの混じったクリームが目についた。

それは2個買ってきたあんこ入りのシューの片割れだった。今は無残に潰れているけれど、それは確かに餡入りを示す色。私は人差し指でそれを掬って、なめてみる。

それは何だか、カスタードとはぜんぜん違う味だった。確かに甘いけれど、はつきりした甘さじゃない。

奥のほうに甘さがあるんだけど、色々な障害にぶつかって引き出せない……そんなもどかしさが残る味だった。

「……甘い」

でも、甘かった。

確かに、甘さはあったのだ。

15話

時は前日　　金曜まで遡る。

その日高町なのはは自身の手がける喫茶店『翠屋』で接客をしていた。時刻は午後6時手前。

暮れの赤色に染め上げられた空を見上げながら、そろそろ店じまいでも始めるかと考えていた時だった。

微かに感じた魔法の気配にびくりと振り向いた先に居たのは、先日見た金髪の少女。フェイトとか言ったか。

今日は黒いマントのいでたちではなく、近所の百貨店で揃えたような野暮ったいトレーナーとパンツルックだ。

来るものが来たかと心の中だけで身構えたなのは、続く少女の行動に少しばかり呆気に取られた。

店内をきよるきよると見回し、ショーケースを行ったり来たりしながらちらちらとなのはを見やる。

どうやら店員としてのなのはに用がありそうだが、こちらが目を向けるとびくりと跳ねて目をそらしてしまう。

そしてまたうつろうつろ。うつろうつろ。

「……………」

どうやら少なくとも、こちらの正体を見破って戦いを仕掛けに来たわけでは無さそうだと分かったなのは内心で心構えを解く。

そして店員としての自分を思い出して飛びつきりの笑顔を浮かべた。勿論首を僅かに傾けるおまけつきで。

「いらっしゃいませ！お客様は何をお探でしょうか？」

「あつ……」

声を掛けられた少女　　フェイトはそれにすら驚き、一瞬逃げ出そうかと後ろを向くも思い直してもじもじとうつむく。

「……あの」

「はい。なんでしょう?」

ふらふらとして頼りなく指差すフェイトの先にあるもの、それが『あずきシュークリーム』である事を見て取ったのははトングを取り出しながら笑顔で応対した。

「小豆シュークリームですか。お幾つにしましょう?」

「えっと、あの……そうじゃなくて……」

「はい……?」

持ち帰りようの箱と店内用のトレーを両方準備しながら、煮え切らない態度のフェイトにも笑顔を崩さなかった。しかし、続くフェイトの言葉に凍りつく事になる。

「その、甘くないしゅーくりーむって……あります?」

「……そう、ですね。当店では幅広い年代のお客様のご支持を頂いております。甘さ控えめがお好みでしたら、先ほど見ておられた『小豆シュークリーム』などは特に

「……これより、甘くないのって……ありませんか?」
「……」

その質問に、少しばかりなのはの肝が冷えた。

翠屋が誇る『小豆シュークリーム』は、主に午前中冷やかに来る中高年の主婦層向けに作った『甘さ控えめ』『低カロリー』が売り

の商品である。

『甘さ』で考えるならば、扱っている商品の中では一番控えめだ。よって、これ以上の甘さ控えめ商品を薦めることはできない。

そもそも、小豆シュークリーム自体がシュークリームとしては異端の甘さなのだが、これ以上甘さをなくしてしまつては最早シュークリームとは言えなくなる。

そのぎりぎりのバランスを作り出したとなのはは自覚していたし、自信も持っていた。

だが、評価とは人それぞれである。

この少女が甘すぎると言うのであれば、それは甘すぎるのだ。自分の舌は間違いないと思っただけに、この評価はなののはにとつて些かシヨックなものだった。

「……そう、ですか。甘すぎましたか……」

「あの……私はそうは思わないって言うか……もっと甘いやつが良いんだけど……。母さんがあんまり甘いのは好きじゃないみたいで……」

そう言うフェイトの表情は、親を心配する子供そのもので。

どうやら詳しい事情を聞かないと何も進まないと考えたなのは、ふと隣のカレンダーに目をやった。今日は金曜。明日は温泉だ。

「お客様。つまり、お母様に喜んでいただきたいのですね？」

「えっと……そう、です。ここのしゅーくりーむは美味しいから……母さんにも一緒に、楽しんで欲しいなって……」

「分かりました。でも、申し訳ありません。現在、小豆シュークリームより甘さ控えめのシュークリームはご用意しておりません」

「そう、ですか……」

しゅんと落ち込むフェイトには、とてもあの時立ちはだかった気概は微塵もない。ただ、親想いな一人の少女だ。だから……試してみても良いかもしれない。そう考えたのは、少女に言った。

「でも、どんな凄腕のパティシエさえ唸らせる最高の調味料なら、一つ心当たりがあります」
「……え？」

がばつと頭を上げた少女には、希望の眼差し。どこか救いを得たような視線が無垢すぎて、なのは柄にも無く苦笑してしまった。今この少女に自分の正体を告げたらどうという反応をするか見てみたかったが、それは胸に固く封じ込めた。

「それを使えば……母さんも『美味しい』って言うってくれるんですけど……」

「まず、間違いなく。ただ、それには少し厄介な手順を踏む必要があります」

「手伝いますっ！だから……どうか美味しいしゅーくりーむを作ってくださいっ！！」

では、と手を打ち鳴らし、なのはは天を指差した。

その先にはポップな鳩時計がかかっており、丁度午後6時を指したところだった。

「明日、朝6時にもう一度ここに来てください。それから着替えと、洗面道具。あと、バスタオルが二つほど。」

ジュースとお菓子類は任意で。……ああ、乗り物に酔うなら酔止めも忘れないように」

「…………え？」

にんまりと微笑むのはと対照的に、フェイトはきょとんとして頭に？マークを浮かべるのだった。

こうして、フェイトの温泉行きが決定されたのである。

天の道を往き、総てを司る女

「と、言うわけで。今日は私の新しい弟子を紹介します」

「あ、あの…………フェイト・テストロッサです。よろしくお願いします」

す

「…………」

と、言うわけで到着した温泉宿にて、私 アリサ・バニングス
一行はなのはたちと合流した。

あっちはあっちでどうやってここまで来るのかと思えば、電車で来たんだそうだ。駅から宿まではタクシーだが、帰りは一緒に帰ると言う。

それはいい。問題はなのはが姉の『高町美由希』さんとは別に連れてきた少女にあった。

「あ、アンタ……ッ！」
「……あ」

それは紛れも無く、この前ジュエルシードモンスター……いえ、変異したまりなさんを巡って戦った、『仮面ライダーザビー』その人だった。

私の面は割れているから、向こうも私を見るなり少し驚いた風に目を見開いている。だが特に襲ってくる様子は無い。向こうからすれば魔導師が居たんだ、ぐらいにしか思われて無いのだろうか。

それにしても、いきなり『弟子』って……。

もう、何と言うか訳が分からない。この前『殺す』とか言っていた少女が気が付いたらなのは弟子になっていた。

何を言っているのかわからねーと思うが、私も何をされたのかわからなかった……催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなものじゃ

「あの……初めまして。私、月村すずかです。よろしく。なんだかあなたとは仲良くなれそうな気がします」

「?……初めまして」

「今日は一緒に温泉に入りましょうね。勿論なのはちゃんも！」
「おんせん……?」

ortの字で落ち込んでいる私を尻目に、笑顔で挨拶するすずか。『仲良く』云々は同じ同好の士としてシンパシーを感じているのだろうか。

なのはラブのすずかとしては、なのはの弟子と言う地位に嫉妬すら感じてもおかしくは無いけど……まあ、見た限りフェイトは分かっ
てないから良いだろう。

可愛い容姿に天然の入った言動に琴線を刺激されたのか、年長組（月村忍、高町みゆき）はやいのやいのとフェイトを褒めたりからかったり大忙しだ。

私のその隙になのは腕をぐいと引いて、彼女から見えない位置まで引っ張っていった。

念話ではフェイトにはれる可能性があるから、面倒だけど口で会話しなきゃいけないのだ。

「……一体、どういうつもりよ」

「どうもこうも、彼女からお願ひしてきたんだよ。『母親を唸らせる旨いシュークリームを作って欲しい』ってね。」

一パティシエとしては、応えない訳にはいかないの」

「それがどうして、温泉につき合わさせる事になんのよ……」

「分かってないね」

そこまで言うと、なのはは天を指差した。いつものポーズにはいはいと思しながらも、どこか安心する自分がいた。

「おばあちゃんが言っていたの。食事は一期一会、毎回毎回を大事にしろ、ってね。ここで会ったのも折角の縁だ。」

これから付き合いも長くなりそうだし、ここで親交を深めておくのも悪くない」

「……もしかして私の言ったこと、考えてくれてんの？」

以前のなのはは、『攻撃してくるなら、迎え撃つだけだ』と、相手と取り合う隙も無い様子だった。

私にはあの娘は人殺しのできるような娘には思えない。まりなさんを救おうとしていたフェイトには。

だから、どうにか私たちの味方になるよう説得して欲しいところだ

けれど……。

「いや、それとこれとは別の問題だよ。彼女が襲ってくるのなら、倒す。それに変わりはない」

「ええ？それはあんまりにも……」

酷いんじゃない？、と続けようとしてこちらを見ているフェイトに気付いて口を噤んだ。

なのはの正体がばれた訳じゃ無さそうだけれど、なのはだったら積極的に隠そうとはしなさそうだ。

むしろいつもの言動でばれそうなものだけど……まあ、私が心配する事じゃないか。

「ど、どうしたの？フェイト……ちゃん」

「ううん、何でも」

『あなた……ZECTの人？』

なんでもない風を装いつつ、フェイトは私に念話で話しかけてきた。プロトコルはM D R S 4 8 5。少し通信方式が旧式なのが気になったけど、速度も耐ノイズ性も高い現行方式には変わらない。

私はいつも使っているM Z S B 2・0からプロトコルを切り替えて応答した。

「初めまして。アリサ・バニングスよ」

『……そうよ。2回目ね、仮面ライダー』

『……』

外面は笑顔。しかし念話はぶっきらぼうに。中と外のギャップは意図して出したものだったけど、どうやら困惑したのか返答は無かった。

私自身この娘にどう付き合っていけば良いのか……距離感を掴みかねているのが本音だ。

私をコテンパンにした憎い相手でもあるけど、同時にまりなさんを救おうとした優しい娘でもある。……そして、まりなさんをジェルシードモンスターにした張本人でもあるそうだ。

何を責めて何を褒めて……つまるところ彼女の意思と行動と目的がどの辺にあるのか、と言うのがいまいち掴みにくいのだ。

そのせいで私はこの娘と仲良くしたいと思うと同時に……どこか心にブレーキがかかったようなモヤモヤが晴れないでいる。

いつも親しくしている友人同士なら、こんなモヤモヤができたときは正面突破で晴らすのが私の常だ。

すずかしかり、なのはしかり。考えてみると、私の周りは拳で語る体育会系な人物ばかりな気がするが　まあ、それは閑話休題。

そう言うわけで、最近の私は心のストレスをジェンガのようにせつせと積み重ねながら生きていけると言うお話なのですよ。

「さて、辛気臭い顔してないで、そろそろ行きますか」

「え……」

「あ……」

軽くお見合い状態に入った私たちの手を、はつしと掴むのは。こ
ういう空気を壊す事にはホント、長けてるんだから……。

「どこに？」

「決まってるでしょ？温泉に来たんだから、温泉に入る。それから
メシ。」

馬鹿の考えは休むに似たりっつね」

「ちよ……！馬鹿っつてなによ馬鹿っつてっ！」

いつもの様にからかわれながら、私たちは温泉宿『葵屋』へと足を踏み入れたのでした。

「あゝ あゝ あゝ……生き返るわ……」

「アリサちゃん、おばさん臭いんだけど」

「うっさい。すずかも入んなさい」

「きやつ！……ちよつと熱い」

なのはに連れられて来た温泉だけど、入ってみたら私の日本人の心が疼くのか大変心地よい気分でした。

身体の隅々に染み込む様な熱さと、湯船に入っつてふわりと浮かぶ浮遊感は正に極楽。涅槃の如しよ。

しかしすずかのやつ、体つきは私よりスレンダーなのに出る所は出ている。何と言うか……成長が早いよね。

きめ細かく白い肌は白色人種の血を引く私よりも白いつてんだから、もう、なんか隣に居るだけで見た目損してるような気になってしまふのはどうしたことだ。

「日本人でよかったわ……」

「アリサちゃん、鏡はあつち」

「血ははどうでもいいのよ。要は心が日本人かそうじゃないかが重要な。すずかこそ見てくれは大和撫子なんだからわび・さびを身に付けなさいよ」

「わび・さびって身に付けるんじゃないよ。なくて感じるものだと思うけど……まあ、血は大切にされた方がよいよ。うん」
「……………」

良く分からない笑み（日本人特有の曖昧な笑い）を浮かべたすずかを不思議に思いながら、私は鼻の下まで湯に浸かり、肺に溜まった空気をごぼごぼ吐き出した。

マナー的にはアレなんだけど、私はこのごぼごぼ弾ける泡がなんとなく好きなのだ。ジューズ飲みながらストローでよくやってしまう。

「がぼがぼがぼ……………」

「汚い真似をしないでね」

「へぶしっ!？」

そんな私に隣で静かに湯に浸かっていた、なのはの手刀が頭に決まる。あれだけ鍛えているのはの手刀だ、威力が半端無く高いので叩かれた瞬間目の前に火花が散った。

しかも急所に入れたのか身体に力が入らず、どざえもんのようにぶかーと浮かぶ私。

「あ、あの……………なのはちゃん、隣行ってもいい?」

「構わないよ」

「あ、アリサちゃんちょっと向こう行つてね」

そして、非常にも湯に浮かぶ私をすずかがチヨイチヨイ突付いて移動させ、なのはの隣の空間をゲットするすずか。

……………我が親友ながら、そろそろ付き合い方と言つものを考えないといけないかもしれない。

きゃいきゃいはしゃぎながらなのはと喋り始めた二人を尻目に、私

は漸く痺れの取れてきた身体でもう一度なのはを見た。
肩下まで伸ばされた栗色の髪は今タオルに包まれて見えないが、黄色人種らしい健康的な肌色の身体は鍛えているせいか妙にがっしりとして見える。

シルエツトだけ見れば女の子だけど……その、非常に引き締まった筋肉を持つのかお腹が割れているし肩もがっちりしている。

背中に幾つか走る線のようなものは　　どうやら刀傷のようなものらしい。　　どんだけ修羅場歩いてんのよ小学三年生……。

「……………ん？」

そこまで観察して、そういえば誰か足りない事に気が付いた。保護者組ではない。彼女ら二人は時間をずらして入るそうだ。

鮫島は基から執事だけあってみんなの荷物整理をやったり料理の下見（できれば料理人として代わるつもりだろう）をしたりと、色々とやる事があるそうだ。

そう。あの娘。金髪の二号ライダーの裸をまだ観察していなかった。

『おーい……………今どこにいの？』

気になった私は、とりあえず念話で呼びかけてみることにした。なのはにも聞こえてしまいかもしれないけど、まあ、問題は無いだろう。

一応帯域を絞ってMDRS485で呼びかけたから、通信方式がばれるまではなのはに内容は分からないだろう。すぐに解読されるだろうけど、一応『秘密だよ』という私なりの意思表示なのだ。

『……………脱衣所』

『早く来なさいよ』

『……やっぱり、私はいいよ』
『はあ？』

煮え切らない態度のフェイトに、おせっかい熱が再燃した私は思わずざばりと立ち上がった、湯を出た。

そしてずかずかと脱衣所に戻って探すと、籠を入れる棚の陰に隠れる金髪を発見。なんだか恥ずかしそうにバスタオルで身体を隠している。

気持ちは分かるけど……ここに来てその態度は無いでしょ。これは是非ともひん剥いてその裸を拝　温泉に入れなければと、私はぐっと拳を握り締めた。

「温泉に来て温泉に入らないなんて罪よ。さつさと来なさいっ！」

「あ、えつと……いやです……」

「嫌って何よ嫌ってっ！ 私たちとの裸の付き合いもできないってーの？ アンタねー、そんな事言っているって世の中生きていけないわよ？ いい？ 一緒に風呂に入って汗を流してこそ、分かる人となりってものがあつたりするの。日本人は昔からそうやって結束を強めてきたのよ」

「私、日本人じゃないです……」

「『郷に入つては郷に従え』よ、私だつて見て御覧なさい。どっからどう見ても日本人じゃないでしょ？ でも、ここはそう言う文化がある土地なの。」

文化つてのは人間が生きてきた歴史なのよ。分かる？ 昔の人が思つたこと、感じたこと……その思いの集大成なのよ」

「歴史……」

どうやら押しに弱いらしいこの娘、私の屁理屈に目から鱗といった表情で何やら驚いている。後一步と言ったところか。

私は内心にやりと微笑みながら、天然娘の目を見て言った。

「そう、だからアンタも温泉に入ること考えるのよ。昔の人は何を思って温泉に入ったんだろう。どついう気持ちで生きてきたんだろうってさ。」

温泉は『湯治』って言つて、傷を癒す場所でもあったのよ。敵に負けて傷付いた侍はここに入って、癒されたんだろうか……とか考えながら入ると楽しいもんなのよ」

「……」

フェイトは考えるように暫く無を瞑る。そして、何かを覚悟した表情で私を見た。

そこまでの覚悟が必要だったのか……と、初めて買い物に行かせる子供の親のような微笑ましい気持ちで頷いた。

「……入ります」

「そう来なくっちゃ！さあ、そんな無粋なタオルは脱いで　　ッ
！」

ばさり、とまるであの時着ていたバリアジャケットの黒マントの様にバスタオルを翻すフェイト。

そしてぽやんとした天然娘の初雪のような白い裸身を期待した私は　　一瞬で凍りつくことになった。

「　　え？」

固まる私の隣を横切り、フェイトは温泉へ向かう。ガラリと仕切りを開けて、ぺたぺたと彼女が歩く音が遠ざかる。

彼女に気付いたなのはとすずかの嬌声が止む。急に静かになった温泉で、ちゃぷちゃぷと掛け湯をするフェイトの音だけが妙に高く響いた。

よると、私が温泉に戻ると丁度フェイトが湯船に浸かろうとしているところだった。ちゃぶ、ちゃぶんと。片足ずつ温度を確かめるように入るフェイト。

アレだけテンション高くなのはとお喋りしていたさすが、なのは手を握ってどこか怯えるような視線を向けているのは 流石に始めて見た。

「……どう？温泉は」

「……傷に染みて……なんだか痛い」

「そう、だったら喜んだ方がいい。その痛みは身体が治そうとしている証拠だから」

唯一何でもないように見える……此処にフェイトを連れてきた張本人であるのはだけが、フェイトに優しく語りかけていた。暫く何も言えないまま時が過ぎる。流石に天然娘も居た堪れない空気を察したか、寂しげに口を開く。

「……やっぱり、気になっちゃいます？」

そして、一時の衝撃からは覚めたものの、未だに怯えるた表情の私とすずかに向けて苦笑したように言うフェイト。

どう答えたものか窮した私たちは、救いを求めてなのは見るけれど……彼女はゆっくりと首を振って言った。

「気にしないでいいよ。温泉は身体の傷を癒す場所であると同時に、心の傷を癒す場所。昔から同じ温泉に入った者同士の事は詮索無用って相場が決まってるの。」

「ここであなたの事を深く聞く人間は居ないから、ゆっくり浸かりなさい」

「……ありがとう」

少し安心したように、肩を落とすフェイト。しかし、やはりなのは凄しい。あれを見て、此処まで平常で居られるなんて。

いや　　もしかしたら気付いていたのだろうか。だからフェイトを温泉に連れてきたのかも知れない。

フェイトの胸に走る異様な傷。真新しい、巨大な十字傷を見ても。毛ほども動じないのなら、それは気付いていたと言っことだ。

「……」

フェイトの身体自体は、その一転を除いて綺麗なものだ。少々栄養が足りないのかスレンダーと言っよりは痩せぎすで、少しあばらも浮き出て見えるけど……。

暖かい温泉の熱で上気した肌は桜色に色づいていて、とても綺麗だった。

そんなフェイトへの感想を吹き飛ばしてしまう、巨大な胸の十字傷。それはあまりにもこの少女には不釣り合いすぎて、違和感しか感じなかった。

縦傷は首の下からへその上にまで渡り、横傷は脇の下から心臓の上辺りを通るラインが走っている。

その二つの傷は乱暴に縫合したのか、まだ真新しい縫い目が柔らかかそうな肌をぶつぶつと貫いて縫い止められていた。

そして何の意味があるのか、その糸は何故か赤い毛のような色と質感をしている。

まるで縫いとめた際に染み出した血がが付いているようで……あまり気分のいいものではない。

その傷は素人の私が見てもまっとうな医者にかかったようには見えなかった。

縫い方や糸に至っては、どこか悪意すら感じられる禍々しさを放っている。まるで魔術的な意味さえ見出せそうな傷だ。

(……いえ、まさか意味があるの?)

そして、私は最初にカブトとザビーが対戦した時を思い出す。

あの時、クロツクアップした二人が現実の時間に復帰した時。二人には傷は見えなかったが、ザビーは胸を押さえて苦しげによるめいていた。

あの時は分からなかったけれど……その理由は恐らくこの傷。二人の戦闘では傷は無かったのだから、これは彼女が元から持ってきたということになる。

ならば……何かあるのだ。この傷には。

ほんわかしたフェイトの表情を見ながら、訊けぬもどかしさと、温泉の熱にぐつぐつと煮える頭をふり、はあ、と大きく息を吐き出したのでした。

さて、メシである。

今の所小学三年生である所の私アリサ・バニングスとその他一向はその立場に大いに甘んずることをよしとして、感情の赴くままに生きることを旨としている。(一部例外を除く)

つまり何が言いたいかというと、皆本能に忠実に生きていると言うことですよ。

特に　その金髪十字傷娘が。

「お、美味しいっ！！？」

と言いながら、用意された舟盛を顎が外れんばかりに詰め込むフェイト。ドンだけ欠食児童だよと突っ込みたくなる情景がそこにはあった。

今日の夕食は温泉宿らしく和食の宴会料理。定番の舟盛に、肉料理、揚げ物、酢の物、鍋物と一通り揃っている。

ちなみに、マグロの刺身を食べた私は一口でこれが鮫島が捌いたものだと分かってしまった。

噛み応えを重視する私に合わせて、刺身が少し厚めに捌いてあるのがその証拠だ。普通ならもう少し薄く捌かないと『とろける食感』というものにはならない。

マグロは少し口で噛んでこそ脂が溶けて味わい深くなるんだけど……まあ、無理に世の中の好みに合わせる必要はないと思っている。

まあ、私の感想は置いておき　　ばくばくと至福の表情でメシを平らげるフェイトはこの世にこんな旨いものがあつたのかと言わんばかりの食いつぶりだった。

食事に関しては煩いなのはこのこと、何か言つと思つたが予想に反してこの汚い食い方には何も言わなかった。

喉を詰まらせたフェイトをぼんぼん背中を押しながら、淡々と注いだお茶を渡しているだけだった。

「凄い食べっぷりね……よっぱど悪い食生活なのかしら」

「ちよつと気になるね……ふぁ」

忍さんと美由希さんはそんなフエイトを気にしながら、徐に酒を呷っていた。　　って、忍さんは兎も角、美由希さんは高校生では…。
まあ、忍さんも付き合う人が居ないと呑み辛いだろうから、ここは人柱になってもらおう。

「……いいの？なのは」

「何が？」

「あの娘。あんな食べ方されたら味も何もあつたもんじゃないでしょうに」

「大丈夫、おばあちゃんが言ったの。」

食べると言う字は人が良くなると書くってね。あの娘が元気になるためにはあれでも足りないくらいだよ」

「……そう」

「なのはちゃん、これ食べてみない？美味しいよ？……あ、アリサちゃんちよつとどいてね」

あの健啖ぶりを見せられて少々引きつつも、舌鼓を打つ私を押し返してさすががやってきた。

両手には小鉢とお箸常備で、これは明らかにカップルが行うと言う

『はい、あーん』狙いなのが確実だ。

しかし『退け』と言われて退くのも癪なのでそのまま居座っていたら、業を煮やしたのか正座した私の膝の上に乗ってきやがった。痛え。

「なのはちゃんっ！はい、あーん、して？」

「すずか踏んでるんだけど」

「もう、なのはちゃんたら……」

私の抗議なんかどこ吹く風、一人で盛り上がりながらなのはに料理

を食わせるすずか。

しかし手持ちの料理を全部食わせたら今度は目の前にある料理を掴んで食わせ始めた。それ私のなんだけど。

「なのはちゃん！これもどうぞ」

「それ私の焼き魚なんだけど」

「アリサちゃんはいこれ」

「え？ってこれがふっ！！？」

無視されるのを覚悟で抗議をあげたら、黙ってると言わんばかりに口に食い物を詰められた。

つてか、これさつき空いた刺身の皿の『ツマ』でしょっ！乱暴に皿から取ってるから横に残ってた山葵が入ってるしっ！

「辛ーっ！！つてか死ぬーッ！！水、水」

その存在を舌の上で認識した直後に、鼻につーんとクル憎いやつ。慌ててじたばた逃げ出す私の席にするつとすずかのやつが座りやがった。

宴会席を走り回ってどうにかこうにか飲み物飲みまくって舌を冷やした私は、まだ鼻の奥にズキズキと残る痺れを怒りに変え、すずか達の前に仁王立つ。

もう許しちゃおけねえ……戦いだっ！

「あー、そー、もーいーですよ。すずかっ！そしてなのはっ！！今日こそあんたらに何が何でも地面に縛り付けて髪の毛グイグイ引っ張ってやるんだからっ！！」

「食い終わったら勝負よっ！」

そして言っっちゃった。一部別の恨みが混じってたようで、まだばく

ばく食い続けている十字娘がピクリと反応したけれど。

「それはいいけど……何で勝負するの？」

「そんなに決まってるじゃない。温泉に来て勝負って言ったら……卓球よっ！」

しゅばっ！とマイラケットとマイボールを構える私に、なのはとすずか、そして十字娘はぼかんとした表情で見ていたのだった。ふふ……いくらこいつらは天才とはいえ、家に卓球台があり毎日のように練習していた私には敵うまい。

これからは復讐の時。絶望があなた達の……ゴールよっ！

16話

温泉の卓球場は、卓が二つあるだけのささやかな場所だった。普段あまり利用もされないのか痛みの少ないネットがかかっており、ゴム製ラバーのラケットがちょこんと置いてあった。

「うーし、やるわよっ!」

皆が思い思いにラケットを手に取る中、マイラケットをぐるんぐるん回しながら私はびしりとなのはを指差した。

「ルールはどうするの?アリサちゃん」

持ち方すら分からないのか、親指と人差し指でペンホルダーっぽく……と言うよりはスプーンでも持つような握り方ですずかが訊く。今日こそその澄まし顔を泣き顔に変えてやる、とまるで出会った時から成長していない感情に身を任せつつ、私は不敵に笑った。

「長いし、2ゲーム先取でいいでしょ。あ、11点取ったら1ゲームで、10対10ならデュースだから先に2点先取ね。OK?」

「構わないよ」

「私たちはいいけど……フェイトちゃんは?」

「あ……」

そつえば、この天然ぼやん十字傷ライダーは別世界の人なんだ。卓球なんか分かるわけ無いんだから、誰かが教えてあげなきゃいけないだろう。

最初はシングルスで見学してもらおうか、ダブルスと一緒にやってあげればおいおい覚えていくだろうか。

どうしようか考えているうちに件の本人が卓球場へと姿を現した時、私たちは揃って言葉を無くした。

フェイトは物珍しそうに辺りを見回し、卓球台を見て首を傾げながら何かをぼそぼそ呟いていた。浴衣すら着たこと無いのか、何故かマントの如く羽織って居るし、何を勘違いしたのか帯は頭に巻かれている。

今時駅のホームですら見ないような酔っ払いサラリーマンのネクタイ鉢巻と、大きく開いた胸元

羽織っているだけだから全開だから覗く大きな十字傷。

下着こそ白いシンプルなものだったが、その姿はどこからどう見ても痴女にしか見えなかった。

「?.....みんな、おまたせ」

「フ、フェイトちゃん.....」

「こりやまた.....」

なのはですらがくり、と無言ですっこける有様に私は頭を抱えた。そういえばなのはが風呂に夕飯に急かすもんだから、私たちは浴衣を持たずに風呂へ行ったのだ。そしてそのまま夕飯を食べ、卓球場へ行く時にそう言えば、と私たちは浴衣の存在を思い出した。

私は怒りのまま急いで着替えたもんだから周りを気にしてなかったけど.....フェイトに浴衣の着方を教えたりとかは.....やってなかったな。

「全く.....少しは女だって事を思い出した方がいい。少しの間動かないでね」

「私は女の子だよ?」

「女の子はエレガントに、てね」

うん？と何処かで訊いたようなデジャブを感じて首を傾げるフェイトに、なのははやれやれと首を振りながらフェイトに万歳をさせて浴衣を着せる。

頭に結んだ帯を解き、くるくると器用に蝶々結びで腰に括る。ついでに懐から櫛を取り出して乱れた髪を梳いた。

まるで長年やり続けてきたかのようなその流れに、熟練のメイドのような貫禄を感じてしまう。

「……………ありがとう」

「どういたしまして。お嬢様」

「あ、あのなのはちゃん、私もっ！」

その姿にピコーン！と目を輝かせたすずかはラケットを放り出し、ただだつと助走をつけたかと思えば高校球児のようなヘッドスライディングを決めた。

ズザザザーツ！と態と服と髪を乱しながらフェイトを押し退けてなの腕に納まるすずか。なのはは苦笑しながら服装を整えてやる。

「しょうがないね」

「えへへー……………あ、フェイトちゃんごめんね」

「ううん、すずか……………その、一緒に嬉しい」

「そう？じゃあ、もう友達だね」

「え？……………うん、友達」

しかしこの見た目はお嬢様　紛れも無くお嬢様だが　のすずかはこんなに甘えん坊だったっけ？

アグレッツシヴなのはいいが、テンションの上がるポイントが私と真逆（なのはの事だ）と言う点で相性は最悪と言える。

よく親友などやっているものだ和我ながら感心する。フェイトと打ち解け笑い合うすずかを見てると、嫉妬すらしてしまう。

だから、この見事にほんわかとした和み空間へと勝負の空気をぶち壊してくれたKYなのは一味を　　壊してしまうしかない。

「イライラするのよ……」

はあ、と私の怒気と苛立ちを含んだ息を吐き出し、私は徐にカウンターで預かったピンポン玉の袋を取り出した。

なんだか知らないけど大量の予備があるらしく、1000個入りのぎつしり詰まった袋を渡された時はどうしたもんかと思ったけど、こうなつてはありがたい。

弾薬は、多いに越した事はないんだから。

「……アリサちゃん、何してんの？」

「……」

怪訝に見つめる三人をよそに、私はにやりと口の端で笑いながらピンポン玉を持てるだけ鷲掴み、投げ上げるとシェークハンドにラケットを構えた。

直前で意図に気付いた三人が動き出すけど　　もう遅い。私が欲しいのはこのイライラをぶつけられる相手、そして這い蹲る姿。

もう丁寧にルールに従って戦う気はとうに失せた。3年間壁に向かって打ち続けた自慢のサーブで　　直接やつらを狙い打つのみっ！

「無駄よっ!!」

かかかかんっ！と小気味良い音を立てながら、豪速で打ち出される玉はマシンガンの如く。壁打ちで鍛え続けた動体視力と真芯に捉えるコントロールで打出されたピンポン玉が三人を襲う。

「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃーっ！！」

袋から玉を掴んでは打ち掴んでは打ち。脇目も振らずそれを反復することに怒りをぶつけるが如く、私は息が切れるまでそれをやり続けた。

いくらなんでもこれだけ連射すれば一個か二個は憎きなのはやつにも

「……………うそっ!？」

狭い卓球場に敷き詰められた様に広がるオレンジ色の玉が広がる中、一発も当たらなかつたのはがふわりと着地した。

むかつく事に丁寧に結ばれた腰帯や、動けば崩れるはずの胸元さえ一片の乱れなくそこに居た。……………ふん、と鼻で笑いながら。

「軌道が見え見えだよ。私に一発入れたいなら、せめてフェイントでも使って貰わないとね」

「こ、こ、この女……………っ!あ、でも!すすかなら!あの女はどこに行つたっ!？」

なのはには当たらなくとも、せめて親友を称する怪力色白娘をぼこぼこにできたなら少しは気が晴れるのに　　と見回しても姿が見えない。どこに行つた?

私はそばで全身の白い肌にピンポン玉の丸い痕をつけ、涙目になりながら立つフェイトを見て少し良心が咎めた。

この天然娘、戦闘訓練を受けている癖に、殺気の無い攻撃にはほとんど鈍い反応を示す。

そして『動かないで』と言われてるから、動いていいもんだか悩んで結局ぼこぼこピンポン玉を喰らい続けたんだろう。

「あー……ごめんね、フェイト。でもすずかの」

やつはどこ？と訊こうとして、どさりと急にフェイトが倒れた。いや、後ろから伸びてきた手に引き倒された。

そして現れたのは用済みとばかりにフェイトを退かし、どや顔で現れたすずかだった。

どうやら呆れたことにフェイトは動かなかったんじゃなく、すずかの盾にされて馬鹿正直に喰らい続けていたのだ。

「す……すずか……私たちおともだち、じゃあ……？」

だんだん状況を理解したフェイトが涙目ですずかに困惑と非難の混ざった視線を投げかけるが、すずかはこれまた悪そうな笑みを浮かべてフェイトを指差して言った。

「近くに居た。貴女が悪い」

そして台に置きっぱなしだったラケットを拾い上げると、徐に広がるピンポン玉を手を取った。

コンコンと2、3回感触を確かめるように跳ねさせたすずかは、実に嬉しそうな表情で私を振り返った。

ぞくり、と遅まきながら悪寒が背中を駆け巡る。

「じゃあ、アリサちゃん万歳」

「……ば、万歳？」

「うん。万歳して」

何をするの？と声に出す前に、恐る恐る振り上げた手はいつの間にか後ろに回ったのはにしっかりと掴まれた。

するするとフェイトの服を直すような自然さで帯を解かれ手を頭の後ろに組まされ、そのまま固結びで固定された。

そして浴衣の裾を持ち上げられてパンツ一丁の恥ずかしい裸身を大公開しながら、すずかに背中を向ける格好で私は動けない……て、え、え？何するの？

「アリサちゃん、私ね。あんまり卓球って知らないんだよね。確かこうやって　　こう打つんだっけ？」

「ちよ　　っ!?!?」

すずかは徐にラケットを野球のバットの如くぶんっ、とフルスイング。私の背中からどっと嫌な汗が噴出するのが分かった。

明らかにこれは　　死ねる。成人男性並みの怪力娘のフルスイングだ。背中に紅葉が咲くってレベルじゃねーぞっ!?!?

「んな訳ないでしょっ!?!?ちよ……ドんだけ頭悪いのよっ!?!卓球は卓球台の上で打つのよっ!」

「じゃあ、アリサちゃん卓球台ね」

「卓球台ラケットで打つちゃ駄目でしょーがっ!?!?」

「せーの」

「ちよ!?!?」

私の必死の抵抗虚しく、森林に囲まれた旅館に悲鳴が3回ほど響いたのです。

天の道を往き、総てを司る女

娘の姿を借りた人形の前から去ってから、世間では大魔導師と謳われていたプレシア・テストロツサはまず自室に戻る前にウォーターサーバーに向かった。

自らの工房には研究室にしながら生活できるようにと、このような施設が存在している。主に使い魔であったリニスのお節介であったが……今では無いと困るようにならなっていた。

変な言い方になるが、寝食を忘れて研究に没頭するには、生活が邪魔だからだ。それに何より、あのお人形とはできるだけ顔を合わせたくは無いのだし。

コップに注いだ水を一気に飲み干し、今食べた甘い味を必死に押し流そうとする。

しかし仄かに感じるほどであったその甘さは、いくら水で押し流そうとしても……いくら忘れようとしても消えない疼きのように舌の上に残った。

「……はあ、はあ」

できるだけ任務でしかそっけなく会わなかったはずのお人形は今日お土産と称してシュークリームを買ってきた。

実質的にはなにも慕われるような事はしていない筈の、お人形に。お人形が見ているのは、過去の自分。過去に生きた娘の記憶を見た、私の姿。それは正しく母であり、優しく心地よい記憶なのだろう。

だからどれだけ今の私に痛めつけられても、なじられても……耐えてゆける。それは昔の記憶があるから。その姿はまるで

「……どうしてそんな所だけ、そっくりなのよ」

自嘲の笑みだけ浮かべて、私はうな垂れるより他に無かった。

お人形の姿はまるで、今の自分の鏡写し。過去の娘の姿を夢見て今のお人形に辛く当たる自分そのままだ。

お互いに、過去に生きている。過去の優しかった時間を見ながら、辛い現実を耐える生き様。

あのお人形が、娘よりも私に似ていると言つのも皮肉だから……

「もう……やめよう」

おままごとは終わり。あのお人形と戯れている時間は無い。はやく……本当の娘を取り戻さなければ。

そのための力は……そのための方法は既にできている。私一人の力では到底届かなかつたけれど……『ZECT』の力がそれを可能とした。

彼らの技術には未だに謎の部分が多いけど、まあ、そんな事はどうでもいい。大切なのは娘を取り戻す事だ。

そしてその為には　ゼクターが、それも『計画』の中核たる『カプト』か　『ゼクターを調べないと。』

今、丁度カプトは『ZECT』の管理下を離れて在野の魔導師の手に渡っていると言う。チャンスは今しかない。

「せめてこのぐらいは……役に立ってもらいましょうか」

私はポケットから青く輝く石　ジュエルシードを取り出した。お人形が封印し、契約の元『ZECT』経由で私の元へ齎された一つだった。今となっては殆ど価値の無い代物だけれども……カブトを誘き出すぐらいはできるだろう。

「行きなさい……そして、私にゼクターを持ってくるのよ」

右手に杖状に展開したデバイスから転移魔法を起動し、ジュエルシードを転送。タイミングを見て発動させるように、タイマーを仕込んでおいた。

これで戦場はこちらで決められる。後は、お人形が戦いやすい環境を整えてやれば……スペックはザビーが上だ。早々負けはしないだろう。

これで負けるようであれば

「……次の手を、考えておきましょうか」

ふらつく身体を推して、研究室へ歩く。支えてくれるものは、今は誰も居なかった。

「んふふ……誰も居ない」

さて、またもや温泉だ。食って遊んで風呂入って……寝る。なんて健康的な生活サイクルだ。

遊んでかいた汗を流して、ゆっくりするにはやはり一人がいい。皆で入る風呂も楽しいけど、一日の疲れを癒すにはやはり一人でゆっくり入るのが一番だと思う。

「……傷に染みて……なんだか痛い」

そして浸かる温泉は最高だったが、一回目に比べ引きつる痛みが追加されて思わずフェイトの台詞を言ってしまった。

背中にはすずかにつけられた真つ赤な紅葉　いや、ラケット跡がひりひりと痛む。

DSの上に容赦の無い腕力から繰り出されるすずかの三撃に撃沈した私は、こうして傷の静養にと皆が寝静まった夜にもう一度温泉へと入り直しに来たのだった。

あの混沌と化した卓球大会は、結局後から普通のゲームが開始される運びとなった。

最初こそ長年の経験と技で背中中の激痛と言うハンデを抱えつつもリードをもぎ取った私だが、2ゲーム目に突入した時点で既に戦いは別の次元へとステップアップしていた。

最下位と目されたフェイトはその持ち前の学習能力と運動センスで私でさえ目で追うのがやっとな速度で圧倒された。

なのはに至っては柳のような引いては押す、押しては引く絶妙なラリー展開を見せ、最後は私の必殺速攻サービスを余裕の表情のまま後ろ向きで返された。

そして有り余る腕力でスマッシュを決めるすずかには「顔面セーフだよな？」と言われながら顔に何発も入れられ（なぜかバウンド後

どこに居ても私の顔目掛けてホーミングしてきた)。

……なんだ、これ。

気が付けば、私は最下位。3位が僅差でフェイト。2位わずか。1位なのはで落ち着いた。

……。

「およ」

やるせない気持ちを『ほあ』、と溜め息に乗せてぱーっと夜空を眺めていた私は、脱衣所でこそこそ誰かが着替える音を拾った。

この心地いい空間を独り占めしたい気持ちはあるけど、誰か来るのならそれでもいい。丁度話し相手も欲しかった所だ。

私はそのまま何もせず空を見上げると、やがてガラリと戸を空けて入ってきたのは……意外にも天然十字傷ライダー、フェイト・テスタロッサその人だった。

「珍しいじゃない。気に入ったの？」

「……うん。気持ちいい、かも」

どことなく弾んだ口調で微笑すら浮かべつつ、フェイトはざばざばかけ湯をすると隣にちやぽんと入ってきた。

相変わらず胸の気味悪い痕が痛むのか、ぐぐぐと身を縮めるようにした後はお、と筋肉を弛緩させる。

あれだ、最初に入ったときは痛いけど……だんだん慣れてくると気持ちよくなるやつ。痛みも熱さも、結局慣れて気持ちよくなった者勝ちなのだ。

そこんところが分かってるとは……やるじゃない、フェイト。アンタは正しい楽しみ方を会得してるよ。

「そう。それは良かったわ」

「うん……アリサ、ちゃんも……気持ちいい？」

どこと無く恥ずかしそうに話すフェイトは、まだ私との距離がぎこちない。少し接すれば分かるけど、多分この子は同年代と話したことなんて無いんだろう。

妙に丁寧な口調は大人としか話したことが無い子供に良く見られるあれだ。パパの関係でパーティとかに出ると偶に居るのだ。こういう子が。

考えている事はしっかりしているが、妙に大人ぶった考え方のせいでどうにも同じ年の子と馴染めない子が。自分がどんなにお子ちゃまか気づいてない癖に、ね。

「そうねー。さっきの傷が痛むわ……」

「あ、それは、その……ごめんなさい……」

「なんでフェイトが謝るのよ？」

「それはだって、その……」

そしてどこまでも優しいこの娘は、他人の傷を執拗に気にする……いや、違うか。初めてできた『友達』と言える存在が傷付くのが怖いのだろう。

こんなおふざけの傷にすらあたふたされたら、この先彼女の人生は波乱万丈なんて言葉じゃ表せられないくらいの荒波に揉まれる事だろう。

「いいのよ、こんなの睡付けとけば治るわよ」

「……でも痛そうで」

「気にしなさんな。こんなのいつもの事よ……って言っちゃえる自分に無性に腹が立つけど　まあ、いつかあの二人にはキツッー

いお返しをしてやるから。そのときは協力して頂戴？」

「ええ？うん……いや、でもさすがとか師匠を傷つけるのは……だめ」

「あの二人を庇う必要なんか無いわよ。私が何時もどれだけあの二人に苛められてるか知ってる？この前だって　　って、そういえばこの前アンタも色々やってくれたわね」

「あ……」

具体的には髪をグイグイ引っ張られたりとか。

そう言つとこの間のことを思い出したのか、急にアワアワしだしたフェイトがなんだか面白くてつい笑ってしまった。

「あれは……その……」

「別にいいわよ。言うほど気にしてないし。それよりも　　そーだ、聞きたいことがあったのよ。」

あなた……まりなさんにジュエルシードを渡したのってホント？」

「……っ！」

温泉に入っているせいが、不思議と穏やかな気持ちのまま私は訊いた。自分でさえ驚くほど、自然な感じで。

言つてからはつとしてフェイトを見ると、湯で火照つた顔が青ざめていくのが分かつて少し焦ってしまった。

「あ、いや、言いたくなければ言わなくていいって言うか……な

カブトがそんなことを言つてたからちょっと気になったって言うか」

「……」

はあ、とやってみしまった後悔とどうしても余計な事を言い出してしまつ私の性を恨みつつ、それでも私はフェイトから目を逸らさな

った。

彼女は悲しげに俯きながら水面に映る自分を見つめ続ける。さつきまでの楽しいな雰囲気はもう何処かに行ってしまった。

「……ごめん、こんな時に言う事じゃ」

「……本当のことだよ」

ない、と言おうとして新たな声が響いた。え、と驚いてフェイトを見ると彼女自身、何故か驚愕して自らの口を押さえていた。

彼女の声音は、いつもと違いつつどこか力強く、凜とした声だった。

「あ、駄目だよア　いいじゃないか、フェイト。この娘なら信用できるよ。なにせあの女を庇う為に管理局の命令にだって背いた根性のある子だ。」

少しは友達を作った方が　駄目だよアルフッ！勝手に喋らないで　なんだい、ケチだね」

「……は？」

フェイトが混乱したように、一人芝居を始めた……ようにしか私は分からなかった。

突然立ち上がったフェイトは、誰かに向けて怒ったり諫めたりしていたが　その矛先は総て自分。自らに向けて喋っていた。

「今ならあの鬼ババアも見てないんだ。好きに　母さんを悪く言わないでって何度っ！　フェイトはもう少し世間を知った方がいいんだよ。」

あんなの自分の娘に対する態度じゃ　だから母さんは本当は優しいんだよ。今は照れてるだけで」

啞然として口をあけたまんまの私を置いて、フェイトは一人怒ったり跳ねたりと忙しく動き回った。

その、まるで一人の身体に二人が入っているかのような狂態は暫く続き、それから漸くして動き始めた私の頭が理解できない事象を無理やり理解しようと回り始めた。えーと。
なんじゃそら。

「……はあ。もう何がなんだか、さっぱりだわ」

「ごめんね、アリサ。この事はナイショに　　なんだい、もっと喋らせてよ　　ダメ！アルフは大人しくしてて」

何がなんだか分からないけれど……どうやら信じ難い事にフェイトには二つの人格のようなものがあるらしい。

これまでの言動から演技してる訳じゃないとは、思っけれど……俄かには信じられない事だ。

「それで、その……言い難い事だったら、無理に忖えなくてもいいしさ。　　そうだ、昔、なのはと始めてあった時の話しようか」

「……師匠と？」

フェイトに話させたらなんだか厄介そうだと思ったので、こちらから少し話す事にする。

どうやら大人しくなったらしいフェイトが聞く体制で湯に浸かりなおしたのを見て、私は懐かしい記憶を紐解いた。

「昔、私さ。結構やんちゃしてたのよ。気に入らないと言えば殴って、泣いて、脅して。」

友達でも親でも使用人でも。何でも私には与えられる。何でも言えば貰える。そんな境遇に天狗になって、ふんぞり返ってたの。

……甘えてたんだよね」

「……………」
「でもある時、友達の力チューシャ取るうとしたの。……まあ、す
ずかなんだけど。」

「そしたら横から行き成り私の手を取った奴がいたの。それが……
なのは」

「それはある意味今の私が『私』であるきっかけで……私の原点。あ
の出来事で私は生まれ変わったと言っても良い。
だから大切な記憶……むかつくけどね。」

「なのはは言ったのよ。『たとえ世界を敵に回しても、守るべきも
のがある』ってね」
「…………ツ！」

「驚愕の表情で目を見開くフェイトに、私は露天風呂のへりに頬をぺ
たんとつけながら言った。」

「私、自分の狭い価値観でしか物を見て無かったわ。私にとっては
単なる力チューシャでも、すずかにとっては命の次ぐらいに大事な
ものかもしれない。」

「そしてそれを取られた人がどんな思いをするかなんて……正直、
怖くなった。今まで思い至らなかった自分に」

「たとえ世界を……敵に回しても」

「そう。だから……フェイト、あなたにはあなたの理由がある。」

「そしてそれは、世界を敵に回しても守るべきものだった。……私
は、そう信じてる」

「……………アリサ」

「ゆっくりと流れる時間の中、フェイトは今までに無く穏やかな表情
でいるように感じた。」

少しづつで良い。こんな風に『友達』と触れ合えていけるのなら、彼女も変われるのかも知れない。

「……え」

「これは……っ！」

そして事が起こるときには、立て続けに物事が動くと言う何処かで訊いたような言葉どおり、急に私たちは近くで膨れ上がった魔力の残滓を捕らえた。

連鎖的に反応が拡大し膨張するような独特の魔力の気配。これはジユエルシードの反応に間違いない。

ふらふらと一人芝居をしていたフェイトも押し黙り、魔力反応の先を見つめて何やら複雑な表情で押し黙った。

「こうしちゃ居られないわ。すぐに行くわよっ！早く来なさいっ！」

「……」

「どうしたのよ、置いて行くわよっ……!!」

私は慌てて湯から上がり、更衣室に向けて走りながら黙りこくるフェイトから目を前に向けざるをえなかった。

まずは封印が先だ。被害が広がる前にジユエルシードを封印しなければならぬ。もう、あんな悲しい出来事は二度とごめんなのだから。

慌てて浴衣に着替え、言われた通りこんな時も肌身離さず持って来ていたストレージデバイス『RS02B』を引っ掴むとつかげのまま玄関を通るのさえもどかしく裏口から飛び出した。

走りながら『ZECT』に通信を繋ぐといつもの様にオペレーターであるエイミーさんが『はいはい』と軽い声で応答した。ちなみにクロノは不在のようだった。

かいつまんで場所と状況だけ伝えたと、エイミーさんは少しだけ難しい顔をして『んー、そうかあ』といった。なにがそうかじゃ。

「で、早く応援を頂戴よ」

『実はそのエリア、内の管轄外なのよ。一応部隊に呼集はかけたけどもしかしたら遅くなるかも』

「……はあ？なにそれ、ふざけてんの？」

ジュエルシードを封印しなきゃならないって言う大切な時に、『管轄が違うから行けません。てへ』なんてお役所仕事をやられる何て思っても見なかった。

一瞬で沸騰しそうな怒りがこみ上げてきたけれど、我慢我慢と左手に10回書いて飲み込んだら落ち着いた。

『ごめん、言葉が足らなかつたね。私たちは毎日ワームを搜索する為にローテーションを組んで集中探索してるんだけど、そのエリアはついこの前搜索し終わった場所なの。』

だからこの時間の搜索チームは今そこから50Km以上離れた地域に現れたワームに対応中で、少し時間がかかりそうなの。』

「……そう」

ついこないだ搜索したと言う事は、そのときはジュエルシードもな

かったと言つ事だ。まさかZECTの連中があの魔力を見逃すまいなら、最近新たにジユエルシードが運ばれてきたのだろうか。だとしたらキャリアは動物　それか人間と言つ事もありえる。もしそうなら、非常に危険な状態である事は間違いない。

「とにかく、急がないと……っ！」

『そうね……アリサちゃんにはごめんだけど　お願い』

しかし悪い時が重なったものだ。態々『ZECT』の部隊が遠いタミングで発動するなんて……まあ、仕方が無い。起こってしまった事にくよくよしていても、何にも変わらない。今は目の前のジユエルシードを封印することを考えないと。

「なのはに連絡は……マズイか。まあ、あの女なら嗅ぎ付けるでしょう」

魔導通信のログは常にRS02Bに取られている。なのはに連絡してしまつてはカブトが誰だと教えているようなものだ。

まあ、なのはは何処かからワームの気配を嗅ぎ付けて飛んで来るような女だ。放つて置いても気付くでしょうと考えて頭から締め出した。

あまりなのはばかりにも頼りたくは無い。今回は純粹にジユエルシード単体の発動のようだから、私だけで封印するのが筋つてものでしようし。

私は、急いで発動地点の雑木林に向けて走り続けた。

数分後、到着した雑木林。何の変哲も無い様に見えて、決定的に異常なその場所。

さわさわとそよ風が草木を揺るがす音以外何も存在しないようなそ

の場所は、まるで何かに怯えるかのような途方も無い静けさだった。

「……………うあっ！」

虫の音すら響かない静けさから、急に伸びてきた触手が勢い良く巻きついて首を締め上げる。

その先に居るのは虫のような人のような……………首筋から伸ばしている触手を巧みに操る様はワームともジュエルシードモンスターとも取れる。

そのどちらかは分からないが、人間離れた驚異的な力でずるずると私は奴に引きずられて行く。

「くっ！……………このっ……………放しなさい……………よっ！」

急激に酸素が足りなくなつて霞む視界の中、私は持つてきたRSO 2Bにカードを差し込むと、バックルから伸びたベルトが自動的に巻きついた。

そしてポーズすら取らないまま、バックルのレバーを引く。

「変身っ！」

『Turn up』

ベルトから転送魔方陣が放たれる。絡まった触手を断ち切りながらスピードの紋章を輝かせた扉のように四角く展開されたそれに、勢い良く飛び込むと私は甲冑を装備した姿へ変身していた。

修復の完了したライダーシステムにより、バリアジャケットの数倍の防御力を持つ『ヒイロノカネ』の装甲を持つ蒼と白の甲冑。

『ZECT』内コードネーム『ライダーシステム二号 ブレイド』と呼ばれる姿へ変身した私は、左腰に提げられた剣型デバイス『ブ

レイラウザー』を左手で逆手に抜き、右手に持ち直して正眼に構える。

その先には、断ち切られた触手を戻した緑色の怪物が鎮座していた。肩口から4対生やした触手をくねらせ、ギチギチと鋸のような口を動かすその姿。蠅螂のような前足と、飛蝗のような足。頭から伸びる二対の角はクワガタを髣髴とさせる。

まるでそこらの昆虫を合成したかのような奇妙なその姿は、何処かで親近感を覚えるような姿をしていた。

……いや、触手がどうかじゃなくて、このライダーシステム2号の外装モチーフがカブト虫ってだけなんだけど。

一瞬ワームかと見紛うその姿に警戒したけれど、そこから感じられる魔力は純粹にジュエルシードのものだけだ。

どうやら複数の昆虫が寄り集まってジュエルシードを発動させたのだろう。どの個体から発せられる共通の願いを増幅させるような形で。

「……このぐらいなら、私だけで十分よっ！」

私は意を決し、地を駆けてジュエルシードモンスターに飛び込んだ。ジュエルシードを封印するには、まず反応を弱める必要がある。魔力攻撃などで反応を弱めた後、封印する流れになる。

「っえいっ！」

ブレイラウザーを振りかぶり、袈裟気味に振り下ろす。しかし昆虫の後敏性は並ではない。かすりすらせず、後ろへ避けた奴にもう一撃と下ろしたラウザーで切り上げる。

「でやつ！」

当たらない。余裕を持ってジャンプされ、無防備な背後から蠅螂の前足で切りつけられた。そのまま押し掛かれる。

「キャツ！」

甲冑は傷付いただけで何とも無いけれど……そのまま梃子の様な怪力で押さえ込まれた私はギチギチと歯を鳴らしながら迫る口に恐怖した。

いくら暴れようと、びくともしない。力だけならワームすら凌駕しそうなその怪物の腹目掛けて……私は渾身の『魔力』を込めて蹴りを打つ。

ぼこん、といくらか陥没したように見えたその腹。いくらか痛みを感じたのか、即座に私を放すとジャッキのような足で後方宙返りで飛びずさった。

私は何とか身体を起き上がらせると、再びラウザーを拾い上げて構える。だが……

「……強い、わね」

本来私の仕事は『ZECT』の隊員が弱めたジュエルシードを封印するだけである。だから、RS02Bには攻撃用魔法が一つも搭載されてはいない。

今RS02Bにコンフィグレーションされている魔法は『封印』と、『メタル』（身体の硬化魔法）、そして私自身が使える『サーチ』だけだ。

魔導師見習いの私が高望みしてもきりは無いけど、せめてレイジングハートがあればもっと多くの魔法を使えたのに。

今の私は……何もできない。

「まあ、愚痴言ってもしょうがない、か」

だけど、此処で逃げると言う選択肢はない。此処でこいつを逃せば、恐らく食欲を増幅させられているこのジュエルシードモンスターは町で暴れ出すだろう。

一人の犠牲も出さないようにするには、此処でこいつを足止めする他はないのだから。

「く、この……ッ！」

言ってる傍から、その俊敏な足で跳ねたジュエルシードモンスターから横合いに大きく吹き飛ばされる。

木の枝や茂みを利用し、三次元的に動く奴は非常に相手をし辛い。ここは奴にとってテリトリーであると言う事だろう。

苦し紛れに振り下ろしたブレイラウザーを軽々しく避け、その口や前足でがしん、がしんと的確に攻撃をしてくる。

「ぐ……ッ！がは……ッ！」

避けられずに何撃も貰うが、流石にヒイロノカネの装甲は破れないのか私に致命傷はない。

しかし装甲の強度を上げるために必要な魔力がガリガリと削られて行く様は、私の恐怖心を喚起させる。

そして恐怖で心が鈍った一瞬。大降りの一撃を避けられた隙に、大きな魔力の籠った前足が私目掛けて振り下ろされた。

あれは、避けれない。あれは、防げない。

「……危ないっ！」

スローモーションのように広がる視界の中、何処か心強い声と共に緑色の鎖がジュエルシードモンスターを拘束するように絡みついた。懐かしい緑色の魔力光、もしやと思って振り返った先に居たのは、何処か悲しみを湛えた様な目をした一人の少年だった。

「遅れてすまない。僕も戦うよ」

「アンタ……もしかして、ユーノ？」

「そうだけど……ああ、人間の姿で会ったのは初めてだっけ」

「ふーん……」

民族衣装のような何処かオリエンタルな服と、長いマントを着たその姿は正に魔導師と言った雰囲気醸し出している。

金髪で何処か西欧の血の入ったような顔つきに親近感を感じて

直後気恥ずかしくなってその先を考えるのをやめた。

「こいつが完全に暴走するまで、あまり時間はない。悪いけど、僕が倒させてもらうよ」

「アンタ、傷は治ったの？」

「ああ。それに今は……こいつもある」

そう言つて、ユーノは懐から私のバツクルに似たストレージと一枚のカードを取り出した。

そのカードをバツクルのスリットに差込み、バツクルから自動生成されるベルトで固定される。

右足を引いて左手を顔の横まで上げ、ぐっと握りこんだユーノは右手を大きく回してバツクルのレバーを引いた。

「変身っ！」

『Turn up』

バックルから生成された転送魔方陣に描かれる紋章は、ダイヤ。そこを通り抜けたユーノは、赤い装甲を身に付けたライダーへと姿を変えていた。

緑の複眼と先の割れた角を持つその頭は、ジュエルシードモンスターと同じくクワガタをモチーフとした姿だからだろうか。

変身するなり、ユーノは右腰に提げた銃型ラウザー、『ギャレンラウザー』を構えて未だ身動きの取れないジュエルシードモンスターへ向けて引き金を引いた。

ドン、ドン、ドンと撃ち出される緑色の魔力弾で釣瓶打ちにされるジュエルシードモンスター。

「ギャツ！」

漸く悲鳴らしい悲鳴を上げた敵は、身体中から体液を流しながらも、どこか怒ったように身構えると魔力の鎖を引きちぎってユーノ

ギャレンへ向けて突進した。

「くッ！」

咄嗟に飛び退くも、体勢を変えずに横へ繰り出された前足の一撃がユーノを捕らえた。

装甲のお陰でそれほどの致命傷ではないが、結構堪えているはずだ。

「ユーノ、大丈夫ッ!？」

「大丈夫だ、このぐらいは問題ない……ぐわッ！」

ユーノにとって不幸だったのは、病み上がりで魔力が減少していた事。そして装備した『RS01G』こと『ライダーシステム1号』

ギヤレン』が銃撃戦メインの仕様だった事だろう。ギヤレンラウザーに搭載された銃撃魔法は、攻撃魔法資質にあまり関係なく装備に印加された魔方陣に魔力を注げば起動する。しかしあまり資質が悪いと変換効率が悪く、10の魔力を注いだのに1の結果しか引き起こさないと言う事態を引き起こす。今のユーノが、その状態だった。

ふらつくユーノを、地を這うように接近したジュエルシードモンスターの鎌が装甲を削る。身体を噛む。構えたギヤレンラウザーを弾き飛ばされ、蹴られたユーノはそのまま木に衝突してずると倒れ込んだ。

「くそ、力が抜ける……魔力が、吸い取られる……ッ！」

「ユーノ、変身解除して、ユーノっ！」

「うあああああっ！」

「ユーノっ！」

倒れるユーノに襲い掛からんとするジュエルシードモンスターに対し、破れかぶれで突撃した私はぎよろりと奴の複眼が私の方を向いたのを見た。

そしてぶつかる瞬間にさっと身を引かれ、たたらを踏む私は同じように蹴りつけられて林を転がった。

「ユーノ、危ないっ！」

「くっ！」

それからユーノに向き直ったジュエルシードモンスターは、未だぐったりとするギヤレンへ向けて歩みを進める。

私は気力でユーノへ叫んだけれど、もそもそするだけで満足に身体も動かせないようだ。

……ごめん、ユーノ。ザビーに襲われたあの時、何で助けられないのか
って怒って。
ユーノは知ってたんだろう。ギャレンをまともに使えない自分に。
そして、戦っている私を助けられない自分を。

手助けできない事に苛立って、理解してくれない私に怒られて……
私なら逃げ出したくなる状況ね。

ごめん、本当に……ごめん。

だから私は　　ユーノに証明しなくちゃいけない。

「……ユーノ、一分」

「な、何？」

「一分頂戴。それで何とかする」

「……分かった」

そう宣言した後、ユーノはバツクルのレバーを引いてギャレンを変
身解除した。

まともに身体を動かせないほどでは、邪魔にしかならない。そのま
ま素早く両手で印を切ると、お得意の結界魔法を展開した。

「ギャウっ!」

「ぐうっ!」

ユーノが残る魔力で死力を尽くして生み出した六角錐のような緑の
壁が、ジュエルシードモンスターを取り囲み、拘束せんと迫る。

しかし振り上げる鎌の一撃で障子紙のように破り捨てられる。死力
を尽くした結界が一撃で破られる事に恐怖はしたが……しかし、そ
れでも後『五枚』ある。

「アリサ、頼むっ！」
「任せてっ！」

ユーノの声を受けて、私はブレイラウザーから一枚のラウズカードを引き抜いた。

ラウズカードは、ジュエルシードの封印専用で作られた大容量ストレージデバイスだ。

……逆に言えば、封印魔法以外の回路は印加されていないまっさらなロジックセルを持つデバイスなのだ。

封印魔法の変わりにメモリ空間から別の魔法をコンフィギュレーションしてやる事ができれば

「まったく、もつと魔法を勉強しとけばよかつたわ」

これを発見したのは、2日前。カードに使われていない仮想コネクタが存在する事に気付いて何だろうと探っていた時の事だ。

開発用のコネクタが残っているのはまああることだけど、メモリ空間さえ確保すれば書き換え可能なのは甘いと言わざるを得ない。

まあ、今はそれに救われているのだから痛し痒しって所かな。

「……コンフィギュレーション、スタート」

目の前で2枚の目の結界が吹き飛ばされるのを見ながら、私は何処か冷静に処理を開始。

必死に逃げ回るユーノを目で追いながら、ラウズカードを書き換えてゆく。

残念な事に、私に複雑な魔法を記述する事はまだできない。なのはのような砲撃魔法や、フェイトのような斬撃魔法なんかは手の届かない領域にある。

「アリサ、後3枚だっ！」

また一つジュエルシードモンスターの攻撃がユーノを捕らえ、結界を切り飛ばす。もう残りカスも出ないほど魔力を搾り出したユーノは、結界を総て破られれば後がない。

それでも後を私に任せ、時間を稼ぐ作戦に身を投じてくれた。なら、私はそれに応えないといけない。

印加する魔法は、実は以前から試していてまだ成功していない魔法。それは、『飛行魔法』だった。

あの時空を自在に翔るザビーに私は手も足も出なかった。空を飛べる者と飛べない者は決定的な違いを持つ事を、思いつきり骨の髄まで叩き込まれたのだ。

だから、私は必死になって飛行魔法を勉強して練習した。そして答えが出た。

私は、『飛行魔法』適性がない。

考えれば簡単な事だった。空を翔るには速度に比例して遠い距離の大気を操作する魔法をかけなきゃいけない。

そして、私の魔力は距離に二乗して減衰すると言つ厄介な性質がある。

結果として、私は空を飛ぶには魔力の消耗が激しすぎて飛べないと言つ事態になる。

「後2枚っ！」

流石に血相を変えた表情のユーノが、決死の表情で叫ぶ。私は内心の焦りを握り潰し集中。

カードに表示された絵柄が変化し、モヤモヤとしたものから私の記

憶にあるイメージを映し出してゆく。

私にできる事。それは、身体を硬化すること。そして、突撃する事だ。

なら、やる事は簡単。それに乗せて

「後1枚ッ……全部破られたっ！アリサっ！」

「……ッ！」

両前足の二連櫛で総ての結界を破られたユーノの絶叫にあわせて、私は書き込み終了したラウズカードを構えた。

書き換えたラウズカードを左手で逆手に持ったブレイラウザーのスリットに通して、外部接続でラウザーに回路をセツト。

『Kick』

カードから発動した魔法が私の体内を駆け巡り、温度を上げる。私の魔力特性のせい、熱量を持った魔力が湯気のように吹き上がる。ラウザーの発声に併せて左手で大地に突き刺し、魔法の発動した身体で大地を蹴る。

一蹴りで軽々と十数メートルを越すジャンプ力を発揮する足に軽く恐怖しながら、空中で一回転すると右足を突き出してそのまま突撃した。

「うええええええいつ！！」

「ギッ!？」

飛行魔法の失敗の元に生み出された、『敵に突っ込んで蹴るだけ』のシンプルな魔法はジュエルシードモンスターの反応力すら上回りその胸に突き刺さった。

そしてインパクトの瞬間に、魔力を込める。私の魔力は距離に二乗して減衰する特性があるのなら……距離が近ければ近いほど無限に大きくなるという事だ。

事実、衝撃が身体を突き抜けたと思った瞬間にジュエルシードモンスターは吹き飛び、そのまま大地に突き刺さった私は雑木林の一部を大きく陥没させ辺り一帯に軽い地震を引き起こした。

「……はあ、はあ」

「アリサっ！大丈夫かっ！」

「何とか、倒したみたい……ね」

そして浮かび上がる青い石、ジュエルシード。主を失った悲しみのような弱弱い波動しか発しないそれに向けて、ラウザーから引き抜いたラウズカードを投げる。

疲れ果てた私はその結果を見る事もせず、バックルのレバーを引いて変身解除すると仰向けにどろりと倒れこんだ。

「ジュエルシード、封印」

カードに吸い込まれるようにジュエルシードが消え、『??』のナインバーが表示された。

封印を終え自動的に戻ってくるラウズカードを取る事もせず、こつんと肩に当たったカードを確認し、ただ荒い息を整えるように空を見上げる。

隣には同じく疲れ果てたユーノがばたりと仰向けに倒れこんだ。

「……」
「……」

遠く響く雑木林の喧騒が、さっきの騒ぎで忘れていたかのような賑

わいを見せる。

何かの吼える声、木々のざわめき、動植物の動く音。それら一体となった音は、戦いで磨り減った心と身体に安らぎを齎してくれた。

目の前に、カブトが現れるまでは。

「えっ!？」

どさり、と、現れた赤いカブトの装甲は所々が罅割れ、煤けている。まるで幾度も斬撃や砲撃を受け止めたかのような 普段のものはからは考えられないような傷。

倒れこんだ拍子にベルトからカブトゼクターが離れてゆき、転移門を開いて飛んでいってしまった。

気絶した事で魔力供給が絶たれて変身解除してしまったのだろう。

『Clock over』

白のブラウスとニットのスカートという姿に戻ったのはを慌てて抱き起こした矢先に、黄色い装甲のライダーが姿を現した。

仮面ライダー、ザビー。フェイトだ。

「フェ、フェイト……これは、一体……」

「……どいて。私はカブトに用がある」

私は必死になのはを後ろ手に隠しながら、疲れた身体を鞭打って庇う。

まだ、フェイトはカブトの正体は知らない。だから 彼女には見せられない。

「……あなた達、戦ってたの？どうして？」
「カブトには抹殺命令が出ている。カブトを倒すのは私の仕事だから」

私は出掛けに見たフェイトの表情が曇っていたのを思い出した。そうだ、ジュエルシードモンスターが出れば、カブトも出る。そして、カブトを倒すのは……フェイトの仕事なのだ。

「……」

「さあ、そこを退いて。アリサ……貴女は傷付けたくない」

「……良いわよ。でも、一つだけ質問に答えて」

「……何？」

どうあがいても、ザビーと私の力量差は明らかだ。なのはが目覚めているなら兎も角、勝ち目なんてない。でも、彼女には迷いがある。だからその彼女の本音を聞いておかないことには気がすまないのだ。

「カブトを　　なのはを殺す。それが、貴女にとって『世界を敵に回しても守るべきもの』なの？」

「……！！」

ゆっくりと身体をどかし、カブトの正体　　眠るなのはの顔を見せる。

黒い戦斧を構えたまま、彫像のように固まるザビー……フェイトへ向けて、私は続けた。

「もしその通りなら　　世界を敵に回しても守るべき事なら……理解はするわ。納得はしないけどね。」

それが貴女の理由、信ずるべきものなんだもの。そこを責めても

しょうがない。

でもね　　「

私は地面に手を突きながら立ち上がり、フェイトを見やる。

動揺したのかバルディッシュをガシヤリと取り落とす姿に少し心配になる。この娘は基本的に強い子だけど……芯が折れるととても弱い。

初めての『友達』が『敵』になるなんて……少し残酷が過ぎるかもしれない。

でも、私には私の理由がある。だから　　ここは抗わなくちゃいけない場面なんだ。

「たとえZECTを……友達を敵に回しても、守るべき人がいる。

ごめんね、フェイト。これが私の　　『理由』だから」

変身、と呟きと同時にバックルのレバーを引き、展開される魔方陣を潜り抜けてもう一度ブレイドの鎧を着る。

まだ自己修復が終わってないのか所々煤けたその姿は、実に弱弱しく情けない。

でも、なのはの前で立っているには　　十分な姿だ。

「……そんな。アリサ　　それに、師匠が……カブト」

私はなのはの前で大の字に手を開いて庇う姿勢を見せると、ザビーは動揺したように左右に揺れ動いた。

「でも……でも……私は、母さんに……ッ！」

くぐもる声は泣いているせいだろうか。ふらふらと危なっかしくバルディッシュを抱え上げ、振り上げる。

腰も入っていない振り上げ方だけど……ザビーの強化と魔力は私と
なのはを両断して余りある威力だろう。

「母さんが欲しがってるんだっ！母さんを喜ばせたいんだっ！！そ
れだけなのっ！！！」

「……フェイト」

そう叫ぶフェイトはただの泣いている子供と同じだった。だから、
私も動かない。

フェイトの憤りを総て受け止めるように手を広げ……ただザビーの
フェイスにあるフェイトの瞳だけを見つめていた。

「うあああああああっ！」

終にその一撃が、振り下ろされる。両断するかと思っていた魔力の
刃は、直前で動きを止めていた。

そして、ザビーの胸が紅く十字に光る。そう、あの傷があった場所
だった。

「……友達を殺すだなんて、アタシにはさせられないよ」

そして発せられる、フェイトじゃないフェイトの声。ザビーは胸の
十字傷を発光させたまま、ゆっくりとバルディッシュを下ろした。
思わずふう、と息を吐き出す私は、フェイトじゃないフェイトに語
りかけた。

「……貴女は、誰ですか？」

「アタシ？アタシは……使い魔だよ、使い魔。まあ、元使い魔かな。

今は
」

そう言うと、ザビーは変身を解除した。ザビーゼクターが転移門を開いて飛び去り、中からフェイトの姿が現れた。

しかし、その出で立ちはいつもの彼女ではない。流れるような黄金の髪は赤く染まり、頭からは犬のような耳が生えている。しかも臀部からは尻尾すらゆらゆら揺れているのが見えた。そして、あの特徴的な胸の十字傷が紅く発光している。

「フェイトのもう一つの制御中枢。リンカーコア。ゼクターを制御する為だけに融合した人格ってとこかな。」

結構、無茶苦茶な合体なんだけどね」

そう言うと、長い犬歯が生えたフェイトは人懐っこそうな笑みを浮かべたのだった。

17話

アリサ達がジュエルシードモンスターと戦う少し前。

彼方から湧き上がるジュエルシードの気配は、当然なのでもキャッチしていた。

そしてアリサが飛び出してゆくのを横目で見つつ、彼女 フェイトの動きを観察していた。

彼女はジュエルシード反応が出たのに、特に動くことはせず何かを探るように視線を彷徨わせていた。

「……もしかして」

そして、展開される結界。今回はアリサしかいないから、フェイトが張ってやったのだろう。しかし良くその結界を観察すると……気になる術式が追加されている事が分かる。

『サーチ』等の探索魔法に使われる3〜30GHzの帯域は基より、長距離通信用の30MHz〜0.3GHz、それに加えて通常通信の30〜300KHz帯域まで遮断されている。

これでは結界内の状況は外からはまるで分からないだろう。幸い閉じ込めるタイプの結界ではないので物理的な強度は無い。

彼女は何を意図してこんな結界を張ったのか。これではまるで……『遠くにいる誰かに、これから自分がすることを見て欲しくない』かのような結界。

「誘っている……のかな？」

中の様子が分からなければ、中に入って確かめるよりない。そして

中にあるのは、世界を破壊するかもしれない危険なロストロギア。ならば、世界を守るべき者が取る行動は　　1つしかないのだから。

私は納屋に仕舞ってあったベルトを取りにゆき、それを腰に巻くとその場でカブトゼクターを召還した。上空に展開される次元転送門を通り、赤いカブトムシ　　カブトゼクターは現れる。

空を切り裂いてやって来たゼクターを右手でキャッチし、私はそのまま腰のベルトへ装着した。

「変身」

『Henshin』

納屋から立ち上る巨大な魔力の奔流の中、大人の姿へと成長した私は鎧に包まれてゆく。ヒイロノカネの鎧。ZECTが開発した、ワームと戦う為の戦装束。

白銀のマスクドフォームに身を包んだ私は、同時に納屋に隠してあったカブトエクステンダーに跨ると、急加速し一気に林へと飛び込んでいった。

恐らく、此処から待ち受けてるであろうザビー。この明らかな誘いは、罠が張ってあると公言しているようなものだ。

しかし、だからと言って飛び込まない手はない。なぜなら　　私は『天の道を往き、総てを司る女』なのだから。　　私

天の道を往き、総てを司る女

「封時結界、展開」

私はアリサと管理局の通信が終了したのを確認して、封時結界を展開した。

通常であれば管理局員が展開するものだけど、どうやら暫く来れないらしい。なので代わりに私が展開する事にしたのだ。

「……展開波長、これでいいの？」

『いいよいいよ。これでカブトを誘き出せるからさ』

そして、展開した封時結界は、いつもと違い多くの帯域を遮断する結界だ。この中だと外からの『サーチ』や通信は遮断され、中の様子は外から探る事ができなくなる。

アルフが言うにはそうする事でカブトを誘き出す事ができる、ってことなんだけど……。

「……ホントに、大丈夫なの？」

『何を疑ってるのさ。アタシがフェイトの損になるような事、した事あつたかい？』

何処か肩を竦めた様に言うアルフは、ぎこちない雰囲気を感じる。嘘は言っていないみたいだけど……。

まあ、最早自分の半身とも言える存在になったアルフが言うんだ。それは信じないといけないし、私が信じたい。

「別にそう言うわけじゃないけど……こんな事しなくても、カブトは来る様な気がして」

『そうかも知れないね。あれだけ自信家だったしね。でも、来なかつたらそれはそれで面倒だよ。』

だから確率を上げておくのは悪い事じゃない。だろ？』

「そう……だね」

だから、少しの疑念を押し潰して私はその作戦に賛同する事にした。外から中が伺えない結界を張ることで、カブトが中に来ざるを得ない状況を作る。そして、ジュエルシードを狙っているカブトがきた所を仕留める。

論理としては間違っていないけど、あのカブトの言動から考えるとこんな事をしなくてもやってきそうではある。

でもカブトゼクターを奪ってくるのが母さんの望みだから……その確立を上げるのは別に悪い事じゃない。

眼下でアリサが発現したジュエルシードモンスターに飛び掛ってゆくのを見ながら、私は右手を掲げてゼクターを呼ぶ。

黄色い閃光を引きながらザビーゼクターは虚空より転移門を通って現れる。それを掴んだ私は、大地を蹴って結界内に身を躍らせながら左手のザビーブレスに取り付けた。

「変身」

『Henshin』

ヒイロノカネの装甲に身を包まれながら、飛行魔法を発動。即座

に空へ飛び上がった。
そこで躊躇いなくゼビーゼクターの羽を持ち上げて反転させ、装甲を脱ぎ捨てる。

『Cast Off』

白無垢の装甲を脱ぎ捨て、蜂の本性を顕にしたライダーフォームとなった私は、そのまま空に浮かびながら期を待つ。

『空を飛ぶ事』は、今の所アルフを取り込んでデュアル・コア制御している私にできて、カブトができない優位性がある。

クロックアップしていないのならばカブトとて飛べるだろうが、空中でクロックアップされてはカブトは地面に落ちるほか無いのだから、実質飛べないのと一緒にだ。

だから『空からの攻撃』に『奇襲』と言う戦術を加えたとき、カブトは打つ手が無い。必殺にして必勝。磐石の一手。

彼女が如何に魔導に冴えていたとしても、どんなに武に長けていたとしても。発達した『技術』の前にはひっくり返す要素が無い。

現代の戦いとは、そう言うものだった。如何に優位から先手を取り、一撃の下に相手を葬り去る戦い。

「アルフ、広域探索開始」

「あいよ」

二人のリンカーコアが揮え、魔力の波が世界を満たす。一人では負担の大きい広域探索魔法だが、今はアルフがいる。

二人分の潤沢な魔力に支えられて、広域探索の網は結果中に張り巡らされた。後は、得物がかかるのを待つのみ。

(……………)

母の命令を遂行する使命感に私が心躍らせる中、知らない所でアルフは何やら考え込んでいた。流石にその心の中まで盗み見る事はしないけど……まあ、戦いになったらアルフも邪魔はしないだろう。そう言い聞かせ、私は何処からか現れるであろうカブトへの対処へ頭を切り替えた。

そして果たして、カブトは現れた。

「……随分と余裕だね」

「狙いやすくて良いじゃないか」

エキゾーストノートを響かせ、専用装備のエクステンダーに跨って現れたカブトは正に自分の位置を暴露しながら現れたに等しい。森林地帯を巧みに操作してバイクで現れたカブトの技術には賞賛するものがあるけれど、これではいつでも奇襲してくれと言わんばかりの格好だった。

「畏……の気配も、無いね。じゃあ、悪いけれど……そのゼクター、頂きます」

マスクドフォームではあったが、余りにも無防備なその姿はあの自信満々な姿を想像するのに容易であり、また滑稽でもあった。その程度軽く打ち払って見せるという自信か、それとも奇襲なんて私ほしないうある種の願望か。

もし仮に、これが今日始めてできた『友達』なら……後者だろう。

彼女　アリサ・バニングスは純粋だ。悪く言えば単純だ。

世間知らずの私から見て『純粋』と言える彼女は、多分貴重な存在

なんだろう。彼女は、自分の意見に躊躇しない。正しいと思い込んだ事を曲げず、挫けず、突き進む。

だから酷い目にあわせた私を笑って許し、私と仲良くしようとした。そしてそんな彼女を……私は嬉しく思う。

何も事情を明かさず、こんな頑固な私に笑って手を差し伸べてくれる『友達』なんて……できないと思ってた。

でもね、アリサ。私は……悪い子なんだ。

ふわりと降下した私は左手を構え加速し、カブトの背中を狙い打つ。待つ間チャージされた魔力はヒビロノカネの装甲を打ち破れるほどまで凝縮されている。

この一撃で総て終わり、その確信の一撃。クロックアップこそしなかったが、その速度は反応する暇を与えないだろう。

人のものを奪う、人を傷つける悪い子。でも、これが終わったら……せめてこれが終わったなら、一緒に。

カブトの背が迫る。私はザビーゼクターのプッシュスイッチを押し込み、システムを稼働させる。魔力がタキオン粒子に変換され、波動化したエネルギーが一度頭頂の触覚状の突起に集まった後に左手に集まった。

溢れるエネルギーがザビーゼクターの針先一点に集まると、後はその左手で貫くのみ。カブトのライダーキックに比べ、リーチこそ短いが接触面積を大きく絞り込んでいる分針先一点に掛かる力は大きく凌駕する。

現時点に限って言えば、何者をも防ぐ事不可能な一撃。それは正に、必殺の一撃。

「ライダーステイングっ！」

『R i d e r S t i n g g .!』

そして音速を超える速度で迫る中、私は見た。左手の魔手が向かう先、カブトが僅かに振り返るのを。そしてその手に斧が握られているのを。

「はあああつ!」

「つ!?!」

がきん、と。手にしたカブトクナイガンが痺れる。それは、ザビーの渾身の一撃を受けたせいであり、またその速度に反応できた証拠。ザビーの一撃は重く、鋭かった。恐らくこの間見せたタキオン粒子で強化した必殺技なのだろう。

しかし、生憎と一度見た技が私に通用するとは思って欲しくない。

あの一撃、『ライダーステイング』とやらは確かに一点の威力だけ見ればライダーキックすら凌駕する。

しかし、逆に言えばその一点さえ『逸らして』しまえば致命傷は喰らわない、と言い換えることもできる。

不意を付いたその一撃は確かに速かったが、予めアリサにくっ付いて置いた『サーチャー』からザビーの位置は割れていたし、奇襲が来る事は分かっていた。ならばタイミングのみ。クロックアップされては流石に反応し切れなかっただろうが、御神流の剣士と鍛えた動体視力、侮ってもらっては困るのだ。

開戦の合図もなく不意の一撃を受けた事でエクステンダーから振り落とされたカブトは、山林の傾斜で転がり木に激突した。

山林と言う事でスピードを落として走行していなければ、如何にカブトとはいえ致命的なダメージを貰っていただろう。

「……口上もなしとは、随分焦っているね」

「……」

話す気はないとばかりに、手にした魔導の杖『バルディッシュ』を構え腰のスイッチをスライドさせる黄色のライダー『ザビー』こと、フェイト・テストロッサ。

それを見て取ったなのは 『カブト』は自らのゼクターの角を持ち上げ、右側に倒す。

『Clock up』

『Cast Off』

その時間差は、致命的。カブトがマスクドフォームを脱ぎ終える前に、ザビーはクロックアップ状態へと入った。

通常ならば、0.1秒と満たない小さな隙。しかしそれは通常の何千、何万倍の速度で活動するライダー達にとっては致命的な隙となりえるのだ。

それが、カブト……「高町なのは」でなければ。

渾身の一撃は空を切った。カブトのいなしにより直撃はできず、エクスレンダーから振り落とすにとどまった。

結果から見れば、奇襲は失敗。作戦は失敗した。そこに悔しさはある。だが、私は魔導師だった。優秀な魔導師は同時に10以上の並列思考を展開するという。

だから後悔と同時に次善の手は既に決まっていた。何のことは無い。私の十八番、速攻である。私は腰のスライドスイッチを引きシステムを稼働させた。

『Clock up』
『Cast Off』

カブトがキャストオフした瞬間にクロックアップできた時点で、既に勝敗は決したと言っている。

通常空間ならカブトがキャストオフしてからクロックアップ可能になるまで0.1秒あるかないか。でも、既にクロックアップした身から0.1秒は余りに長い隙だった。

だから、一時混乱に陥りかけた思考は落ち着きを見せ、もう一度必殺の一撃を見舞うべく左手を掲げた。

「フェイト、飛んでくるパーツに気を付けな。何か細工してるよ」
「うん、分かってる」

そして改めてカブトへと進むが、ここでカブトがパージしたマスクドアーマーを避けなければならない。

どういう訳かこのクロックアップしている空間において、なおスピードが乗っているそれは何か人為的に加速されている様だった。

芸の込んだ小細工ではあるが、それでもザビーにとっては草野球のピッチャーが投げる山なり弾道の球より避けやすい。

ひよいひよい、と身をかかわして突撃しようとした私の目に映ったのは大量の光。それも30発以上に渡る誘導操作弾の嵐だ。

「……これは」

あの一瞬で自分の周りを張り巡らすように展開したそれは、勿論このクロックアップ空間において極低速の空飛ぶ存在でしかない。

しかしカブトを守る鎧のように隙間無く飛ぶそれらを処理しなければ、少なくともダメージを受ける。私はカブトの思考に多少イラつきながらも並列思考で直射魔法を準備した。

時間的にはこれらを処理してまだ時間はある。問題ない。

「……フォトンランサー」

『Fire』

バルディッシュから発射される4発の直射魔法が誘導操作弾を蹴散らし、キラキラと光る桃色の光に変える。

処理すると同時に駆け出し、魔力を込めてザビーゼクターのプッシュスイッチを押す。波動化したタキオン粒子が再び先端に収束し、必殺の一撃を見舞う準備は整った。

『Change Beetle』

そしてその左手を突き出す前に、カブトのキャストオフが完了した。だが、もう遅い。既に私は左手を振りかぶっている。後は、この手を突き出すだけ。それだけでこの戦いは終わる。

「ライダースティ……ッ!？」

左手を突き出した直後に、がしんと何か壁のようなものに当たる感覚で、その一撃はカブトの脇をすり抜けた。驚く事は無い。単なる防御結界だ。だが、ライダースティングは並みの防御なんか紙の様に抜ける威力があるはずだ。

しかし現に一撃は弾かれた。意味が分からなくて数瞬立ち止まるも、すぐに気持ち切り替えて己の分身に呼びかけた。

カブトの右手は腰のプッシュスイッチへ向けて動いている。だが、まだ数秒残されている。まだチャンスは逃してはいない。

「バリアブレイク……ッ!」

「了解!」

叫んだ直後に右手の制御がアルフに渡り、防御結界への割り込む術式が描かれた右拳が突き刺さるとその鎧はガラスのように魔力光となって飛び散った。

見え辛かったそのバリアは、どうやら丸みを帯びた楕円状の防御膜らしい。避弾経始の観点からするとザビーゼクターの先端から直角に入射しないと、その運動エネルギーを弾いてしまいう形になっている。

何処までも小賢しい限りの時間稼ぎをする。だがキャストオフしたパーツも、誘導操作弾も、防御結界も最早無い。

私は脇を締めて、今度こそ確実に仕留めるべくアッパー気味のボデイブローでカブトの頭部を狙う

「ライダーステイン……ッ!?!」

『Break』

瞬間、私の目は光の洪水に押し潰された。

貴重な時間は網膜に焼きついた桃色光で埋め尽くされ、折角の一撃はまたしても空を切る。

『Clock up』

……そして、カブトが腰のプッシュスイッチを押し、その身を加速させた。カブトは構えすらせずに、最初の位置から動いていない。時間は十分過ぎるほどあった筈だ。多少カブトを侮って掛かっていたとしても、十分に巻き返せるだけの時間が。だが結果は惨めなものだった。

奇襲は完全に失敗し、こうしてライダー二人は無傷でクロックアップした空間で対峙しているのだから。

「どうやら、間に合ったようだね」

「……今のは」

カブトは持てる総ての手段で持って、キャストオフからクロックアップまでの隙を埋めた。

キャストオフしたマスクドアーマー、大量の誘導操作弾、防御結果、そして……謎の閃光。妨害魔法程度なら自動で弾くライダーシステムが反応し切れなかったのだから、尋常な手段ではない。

一体どうやったのか見当もつかないが、その答えはカブトがあつさりとして出してくれた。

「おばあちゃんが言っていたの。料理の味を決めるのは下準備と手際の良さだつてね。

難しい事をしたわけじゃない。この周囲に漂う魔力を爆発させただけだけ」

「周囲について……まさか、あの大量の誘導弾とバリアは」

元々周囲に漂っているだけの魔力を、システムが妨害魔法と感知するわけが無い。ならば予め撒かれていた魔力が爆発すれば……その閃光の直撃を受けた私はぎり、と唇を噛んだ。

全部考えれば分かる事だ。何も常識から外れる事は……最後を除いてカブトはやっていない。遅滞戦闘の教科書を諳んじているような対処だった。

だから予想できたはずだ。こうなる事は。ライダーシステムも魔法戦闘も特別に訓練をつんできた自分ならばなおのこと。ならば何が悪かったのか……。

「フェイト……」

噛み過ぎた唇から血が流れるのも構わず、痛いほどの後悔でもってカブトを睨む。だがむしろカブトへ対する憎しみよりも、自らに対する怒りが渦を巻いてフェイトを押し潰さんとしていた。

どうして最初からクロックアップして攻撃しなかった？

あの速度で防がれるとは思わなかった。

どうして牽制射撃を予想して、こちらも牽制魔法を準備しておかなかった？

あの一瞬で放つてくるとは思わなかった。

どうして防御魔法を予想して、バリアブレイクを準備しておかなかった？

ライダーステイングならどれほどの結界でも貫けると思ったから。

どうして……最善を尽くさなかった？このどれかでも行っていれば今頃カブトは地に倒れ伏していたのに。

……十分、倒せると思ったから。

『十分』だって……？自分で考えて、私は心が寒くなった。それは……母さんの命令なんて『十分』としか考えてない　　ってことなの？

私は今まで母さんのために総てを捧げて来た自負はある。いつも厳しいけれど、研究が終われば昔の優しい母さんに戻ってくれる。草原に出て、花を摘んだり、頭を撫でたりしてくれて、良くできたね、偉いよア　　あ？……フェイト、って呼んで貰えたのに。

だから……私は母さんが一番なのだ。母さんを一番に考えなきゃいけないのに。今の私は何だ。母さんの命令なんて……母さんのことなんて、『十分こなせる』としか考えて無いのか？
そんないい加減な心構えで、事に当たってたのか？私が？

「……ふ、ふふ」

どこか目が覚めた思いで、私は笑った。怒りは未だ渦巻いている。でも、頭は冷えた。もう迷わない。もう躊躇しない。

私が大切なのは『母さん』だけ。だからその命令には　　全力を
尽くす。

「……フェイト、どうしたんだい？大丈夫なのかい？」

「……アルフ、あれを使うよ」

え、と躊躇するアルフを無視して、制御システムのリミッターを外す。途端にアルフのコアとの制御バスラインが12本も増え、二人の記憶が交わった。

「「……ぐうっ！」」

……胸が、熱い。

アルフのリンカーコアを移植した傷が赤く発光し、『私』を埋め尽くそうと襲い掛かってくる。

一瞬『私』がどつちなのか分からなくなったが、すぐに頭を振って意識領域を確保するとバルディッシュに眠る一番大きな術式を起動させた。

天空から稲光が響き、大量の制御魔方陣が空中に現れては、消える。それは私の切り札にして、未完成の術。

「無茶だよフェイト！あれはまだ……完全に制御できて無いじゃないかっ！　　アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ」

様子を見るつもりか、動こうとしないカブトに対し、淡々と術式は進む。私を中心にして巨大な円状に広がった魔法陣からは大量の魔力と……『タキオン粒子』が行き渡る。

時を操る粒子が飛び交う影響か、私のいる空間はまるで壊れたテレビのように時間の不連続面が露出して砂嵐が混ざる。

段々と迫る不気味な魔法陣を警戒したか、カブトが後ろへ飛びずさろうとするが……もう遅い。

「……残、念」

ライトニングバインドは恙無く発動し、カブトの四肢を拘束した。カブトはその拘束魔法を不思議そうに見ながら、やがて術式進入を始めた。

だが、もう遅い。アルフの警告を無視して、私はそれを打ちおろした。

「フェイト、止めてっ！……バルエル・ザルエル・ブラウゼル……。ライダーステイング……『フアランクスシフト』っ！」

『Phalanx Shift』

カブトを包み込むように現れた38基のスフィアから生えているのは、波動化したタキオン粒子の槍。

そう、計38発からなる、ライダーステイング飽和攻撃である。

38もの死神のアギトが、カブト目掛けて駆ける。そして制御を離れた幾つかが、見当違いの方向　アリサがいる場所へと進むとは知らずに。

(頼むカブト、何も言わないでこっちの言う事に従ってくれっ！)

その声は、フェイトの声帯ではなく念話を使って直接語りかけてきた声だった。緊急通信波長帯で平文のまま無差別に送信されたそれは、送信者の焦りをそのまま如実に表していた。

フェイトのようできて、フェイトではない。恐らく度々現れる彼女のデバイスか人格の様なものだろうと私はあたりをつけた。

(フェイトのあれは、まだ未完成なんだ！今も12基以上が制御を外れて暴走しかかっているっ！)

どうやらライダーシステムを無理やり拡張したらしい術式は、クロックアップ空間が歪むほどの余剰タキオン粒子を生んでいる。

ここまで変換効率が悪そうな術は見たことが無い。確かに、未完成と言えるだろう。

(……私に、どうして欲しい？)

(友達……この子が初めてできた友達なんだ。彼女達だけは守ってやってくれ！)

敵である私が言うのも、おかしいって分かってちゃいるけどさ……頼む、あんたしかいないんだ！)

ふと後ろを見やると、そこにはいつの間にかジュエルシードモンスターを封印し終えたのかどこか充実した表情のアリサとユーノが倒れこんでいる。

あれだけいい加減な術では流れ弾も多く発生するだろう……彼女達の方に。

(なかなか、厳しい注文だね。小豆シュークリームよりも甘さ控えめの注文をされた時ぐらいには)

(……アンタ、もしかして)

私はそれきり通信を切り、集中した。計38基のライダーステイング。一発でも致命傷を受ければ終わりだ。そして、『彼女達』に怪我をさせては、この温泉旅行主催者としての責任が問われる。だけど……乗り越えてみせる。それが私、高町なのはなのだから。

「レイジングハート、軌道解析開始」

『All right my master. Numbering is done from the direction of the direction elevation 0 degrees perpendicular to the first guarded sets the priority level.』

(分かりました。0時方向仰角0度の方向よりナンバリングを行います。優先順位は護衛対象の完全保護第一に設定します)

「ちゃんと私の言いたい事を汲み取ってくれる貴女は好きだよ」

『It is grateful』

(恐縮です)

私は生まれ出ようとしている38の槍を見据え、レイジングハートに軌道解析と迎撃シミュレーションを行わせる。

その間にライトニングバンドを解除し、自由の身となったのは地を駆ける。少しでも確率の高い未来へと。

そして幾重と重ねられるシミュレーションの結果を睨みながら……なのははレイジングハートとカプトクナイガンを構える。

圧倒的に時間が足りない。シミュレーションなどいくら重ねても総

てを救うには足りない。だから なのは自分のカンにかける。

やがて、放たれる砲撃。

『Seven heads for the guard target contact course!』

(七つが護衛目標接触コースへ向かっています!)

一斉と言つに相応しい飽和攻撃には、逃げる隙は無い。しかし、まかり間違つてアリサの方へとかつとぶ不届き者は……7つもあった。まったく、となのはは笑う。厳しい時ほど笑みは濃くなる。これほど笑つたのは、久しぶりだった。

「ラウンドシールド、部分多重展開7時方向、仰角23度、領域パターンB7つっ!」

『All right my master』

全身を覆うシールドを展開してしまつたら、一度破られた時に終わつてしまつ。だから小さいラウンドシールドを両手の先に7つ多重展開。

それを構えながら、私はアリサの前で立つ。何も考えて無さそうな馬鹿面だけれど、この顔が苦痛に歪む姿は見たくない。だからわたしは立つ。

そして

水の音は、私の音。ゆらゆら揺れる顔は、あなたの顔。私はいつの間にか、いつかの夢を見る。

そこに映る人は、何時も顔を歪めて私を見ていた。

そのときの私には、それが何を意味しているのか分からなかった。私を見ているその人は、そう言う顔なのだと思っていた。

私に何を見ているか、私が何を思っているのかすら分からないまま……私はそれをぼんやりした目で見ていたのだった。

そう……それが

「お……母、さん」

ふと目が開いた先に、ふわふわと飛び込む暖かい光。ふとした時に感じる匂いは、何処か懐かしい。

何時だか分からない遠い昔に抱かれた感覚は、昔から変わらない。それを話すまいとするように、いい匂いの元をぎゅっと抱きしめる。それが逃げてしまわないように。それが、また何処かへ行ってしまわないように。

まどろむ頭が、まだ起きてしまう事を拒むように。まだ、心地良い場所にいたいと願う心のままに。

何の疑問もなく、何の躊躇もなく。だからそれは、私の願望を映し出し、母さんの姿で。

「あ……」

そして、私の頭は動き出す。母さんなら嬉しい。だが……母さんからこういう風に抱きしめてもらった事なんて無かった。だから。それは初めての感覚であって　とても心地よい体験。

「起きた？」

「……」

私の髪を撫でながら微笑むブルネットの女性は、そう言いながら微笑んだ。

倒れたなのはを庇う私の前で、赤髪の姿となったフェイト　いえ、今はアルフさん、と呼んだ方がいいか。

アルフさんはもう私達に危害を加えるつもりもないし、フェイトにもさせないと約束して武装を解いた。

一緒にいたユーノはまだ警戒していたけれど、どうせ魔力も残っていない私たちでは抵抗もできないと諦めてこちらも武装を解いた。助けてもらった……と言う事だろう。私はなのはを抱き上げ、一旦宿へと引き返す事にした。皆傷だらけ、泥だらけの酷い格好だから何某かの言い訳が必要かもしれない。

特にすずか。あのいつも自信満々の完璧超人であるのが傷付いて倒れているなんて、よほどの事じゃないと納得しないだろう。私

ならしない。

宿に着いた頃には『ZECT』の部隊も遅ればせながら到着しており、事態の掌握に動き出していた。

中の情報が分からない結界が張られていたせいで、彼らには事情は伝わっていない。今は伝えるべきではないと判断し、私はアルフさんと結託して偽のストーリーをでっち上げた。

駆けつけたクロノ達にはフェイトと協力し、ジュエルシードモンスターと戦い、封印。カブトは現れず、代わりになのはが巻き込まれて怪我を負ってしまった……と言う次第だ。

一般人が巻き込まれたこと、なぜ不可解な結界を張ったなどと不審の目を向けてきたクロノだが、ZECTの展開の遅さを言及すると口を紡んだ。

「部隊が間に合わなかった点は、こちらの落ち度だ。申し訳ない。それにより、民間人に被害も出してしまった訳だし……」

人に厳しく、自分にも厳しいクロノは性格的にまず自身の落ち度を責める。フェイト　いや、耳と尻尾を仕舞ったアルフさんはそれを見て取って、ここぞと畳み掛けた。

「そうそう。で、アタシとしてはこれはZECT内の情報が漏れていると考えたわけよ」

「……なんだと？」

「考えても見なさい。つい数週間前にローラー作戦で搜索したエリアに現れるジュエルシードモンスター……と、なれば、誰かが持ち込んだと考えるのが自然だ。」

そして此処にはライダーであるアタシとこの娘　アリサがいる。もし、この二つの情報を得たワームが得たのなら……」

「……ライダーの力を測る為に、ジュエルシードを発動させた、と

「？」
「そ。だから、ZECTから情報が漏れている可能性を考えて中の情報が見れない結界を張ったのさ」

何故かどや顔で説明するアルフさん（顔はフェイトだが）に違和感を感じつつも、一応筋の通った説明に渋々ながら納得するよりないと結界の件についてはクロノは黙り込んだ。

しかしなのはの治療をする隊員からの情報を見たクロノは、その傷が魔力攻撃である事を知った。

「高町なのは　　彼女は、身体の数箇所に魔力の乱れ、つまり魔力弾の被弾痕が散見される。」

ジュエルシードモンスターが高度な魔力制御を必要とする魔力弾を使った……と、言うのは無理があるな。これについて言いたい事は？」

「そうさね、それは言い辛いけど……流れ弾だよ。今日はちっとすばしっこい奴が相手だったんで、大量の魔力弾を使ってたせいで流れ弾も沢山出ちまったよ。」

現場を見てもらえばその後が分かるはずだね」

「結界は機能していたんだろう？なぜ、彼女に流れ弾が当たるような事態になった」

「結界は正常に機能してた。でも、彼女の高い魔力資質が結界を抜けて侵入してしまっただようなんだ」

「ふむ……確かに彼女は、少し、いや、かなり高い資質を持っているな……」

一緒に付いていた彼女についてのレポートを読み上げながら、魔力測定の結果の項を見たクロノは軽く頬を引きつらせた。

傷付いて運ばれて来たにも拘らず、彼女の保有魔力量はAAランクに匹敵すると言う内容だった。彼女が今後どういう生き方を選択す

るかに関わらず、管理局としては既に見過ごせないレベルである。これだけの魔力量を持つだけに、ちゃんとした教育を施さなければ今後次元犯罪に手を染めてしまう可能性（自覚あるなしに関わらず）もあるし、運用法を知らないせいで暴走してしまう事も考えられる。まあ、私はあの正体（天上天下唯我独尊）を知っているが故に、それはある意味大丈夫だと確信しているのだが。

「……分かった、この件についてはもういい。何れにせよ、彼女には一度ちゃんと話をした方がいいようだな」

「そうね。彼女は今……あら、もういいの？」

「当然です。私は……天の道を行き、総てを司る女ですから」

「……え？」

そうやって一同が纏めに掛かろうとした時、ZECTが借りた大広間の襖を開けてなのは姿を現した。彼女は堂々と浴衣を翻すその姿にはもうダメージは残ってないように見えた。

なのはZECTが借りた一室で治癒魔法を受けていたようだが、流石に回復が早い。不敵な笑みで司令官と見られるクロノを見つけると、つかつかと歩み寄って言い放った。

「それで、あなた達が『ZECT』とやらの組織なの？」

「ちよっ!？」

「……どこで、その名前を？」

開口一番、それを真顔で聞くのはに部屋の空気が一瞬凍りついた。彼女がその瞳を細め、俄かに緊張の色を帯びたクロノが彼女に正対した。

僅かな躊躇いを見せたクロノがデバイスの入った懐に手を伸ばそうと動かしした時、なのははぴたりと隣で凍り付いていたスタッフを指差した。

『破天荒』をこねくり回して型に詰めて、出店で売り出してそんな性格を持つ彼女の事だ。

ここで自らがライダーであると宣言すらしてしまいそうな気がして、思わず何か叫びだしそうだった私は彼女の指差す先を見て、安堵の息を漏らした。

彼女はなのはの回復を担当していたまだ年若い魔導師の一人で、私と同年代ぐらいに見える。そして彼女が着るバリアジャケットの袖口には、でかかど『ZECT』のロゴが入っている。

「どこでも何も、皆同じようなロゴがあるじゃない」

「……そういえば、そうだな」

「あなた達がまともな組織でない事は、見ていれば分かる。巻き込まれて傷を負った身分としては、納得のいく説明を要求してもいいかな？」

「いいだろう。君の疑問には、極力答えると約束する。だが今は傷の回復に努めた方がいい。無理をしないで布団に戻ってくれ」

どうやら自ら正体を披露する気はないと判ってそつと胸を撫で下ろした私は、それからふとフェイト　　いや、今はアルフさんに振り返った。

彼女はなのはの方を見ながら、何やら難しい表情をしている。そりゃー、まあ、そうだろう。なのはがいくら正体を隠したとして、フェイトがばらしたら一発ではれてしまう。

アルフさんとしては、ZECTと距離を置いた味方として、そしてフェイトの友達としての私となのはがいてくれた方にメリットを感じているらしい。

なのでZECTに正体をばらす気はないが、フェイトは別だ。アルフさんによれば、彼女は母親の命令でジュエルシード、そしてカブトゼクターを狙いに来たそうだ。

自らの娘を進んで戦いに送り出すとは中々いい根性をしているとは思うが、どうもその人はZECTではなく元々フリーの魔導師なのだそうだ。

今回はZECTから要請を受けて『ゼクター』の開発に関わり、そしてあの黄色いゼクター『ザビーゼクター』を完成させた。

しかし調整を受けたザビーゼクターは娘のフェイトしか扱えず、彼女はZECTの承認を受けてある程度自由に飛び回れる遊撃隊のよくなポジションを貰ったと言う。

彼女はZECTからのワーム殲滅要求をこなしつつ、そして同時に母親からの命令も遂行していた。……即ち、ジュエルシード収集とゼクター奪取である。

後者は正式にZECTから要請が出ているので独断という訳ではないが、どうやらその母親は自分の所へゼクターを持つてくるよう命令しているので、中々きな臭い雰囲気もある。

「それには及ばないよ。もう傷は癒えた。だから……準備しなきゃ。あなたたちに、一つお願いがあるの」

「準備？何か必要なものがあるなら、言ってくれば調達するが…

…」

「ちょ、ちょっとなのは、まだ何かするつもりなの？さっさと帰らないと皆が心配するでしょ」

ZECTに囲まれた居辛い雰囲気を早く脱したかった私は、なのはの袖口を掴んで振り向かせるとぐいと出入口へ向かって引っ張ろうとしたけれど、そっと足を引っ掛けられてばーんと顔面から畳へ落とされた。

引きつる顔の痛みと草の香りに包まれながら、どすんと倒れた私の上に腰を下ろしたなのはは私に鼻フックを仕掛けながら言った。

「じゃあアリサ。私がこの温泉旅行を企画した目的をもう一度言うてごらん」

「ほりゃー、ハイス食へそほなったほ詫びに……って、ほひかひて」
「そう。まだメインイベントが終わってない内に中止になっては困るの」

「つは、手ーはなしなはいよ」
「嫌」

突然修学旅行の学生のようなノリでじゃれ始めた二人に周囲は呆気に取られた（特にクロノ）が、隣にいたエイミさんが携帯デバイスでクロノの変顔を撮影し始めると我に返り、慌ててごほん咳をした。

「ま、まあ、そこまで元気ならいいだろう。帰る事を許可しよう。でもこの旅行が終了したら、高町なのはさん。

貴女にはこの組織、そしてあなたの力について説明と教習を受けてもらおう事になる。一応形式なので、住所と連絡先を教えてください」

「女の子の誘い方としては、赤点だね。クロノ君」

「初対面で友達に馬乗りになって鼻フックを仕掛ける女の子の誘い方は、マニュアルには載ってないからな」

多少照れくさそうにしながらも、そう返すクロノになのはは少し面白そうな顔を向けて、私への鼻フックを解いた。

「つか私への扱いについて少しも優しさが無い。クロノやエイミさんも見ているだけだし、アルフさんはなんだか良く分かってない困惑顔だ。」

「なのはの仕打ちには慣れたが、周りの連中は……まあ、後でよく言うて聞かせておこう。」

「で、何が必要なんだ？」

「あなた達には、場所を準備して欲しい。そう、大きなステージを、ね」

「ステージ？……何の、だ？」

そこで、なのははばさりと浴衣を翻して背を向けた。同時に天を突く指。最早見慣れたその光景だったが、ほぼ初見であるZECTメンバーは呆気にとられて見ていることしか出来なかった。

私はそつと溜め息をつきながら、胡坐をかいてその背中を見た。どうやら私はこの背中に相当弱いらしいのだ。馬鹿な事を言っているも、許してしまいそうになるほどに。

「決まっているよ。そこで行うのは、デザートバトル。世界一のシークリームを決める戦いだよ」

天の道を往き、総てを司る女

「で、どこ行ってたの？アリサちゃん」

「……えーと、その、ちょっとお風呂入ったらテンション上がりちゃいまして、そこでファイトと遊んでたらフェイトがのぼせちゃったって言うか、そんな感じですよ……」

漸く解放された私たち（私、なのは、フェイト）が部屋に戻ってきたのは、既に夜の10時を回っていた。ぐったりとしたフェイトを担いだのはと私が部屋に入ると、心配した表情の月村姉妹と神妙な顔をした美由紀さんに出迎えられた。

そしてファイトを布団に寝かせた後、事情説明を求められた私たちは正座しながらそれを話していると言うわけなのです。はい。

ちなみにアルフさんはフェイトに主導権を任せて引っ込んだけど、フェイトが起きた時暴れださないように抑えると約束してくれた。

起きた時なのは顔を見たら「ゼクター寄越せ」と言いそうだけど……なのはがそこは何とかすると言った。

私はまだ不安だけど、彼女が私を見たときに見せた躊躇い。それが彼女を止めると信じるしかない。

「ふーん……で、なのははそれを探しに行ってた、と」

「ちょっと心配になって。連絡を入れなかったのは悪かったね。ごめんなさい」

「もう、あんまりお姉ちゃんを心配させるな」

「……気をつけるよ」

神妙な表情を崩した美由紀さんは、ぎゅつとなのはを抱き、こつんとおでこに拳を当てた。一人っ子の私としては何とも羨ましい光景に見える。

それをぼーっと見てたら、さすがが両手で私の顔を掴んでぐいと前を向かせた。ぎゅつと細められた目がまるで『私、怒ってます』と言ってるようで、直視できずに目を逸らす。

そしたら思いっきりぱちんと両頬を叩かれてぐぎゅうと掴まれた。

こいつは普段大人しいのになんでこう、スキンシップが痛いんだろ
う。

「アリサちゃんも。あんまりフェイトちゃん弄りが楽しいからって、初心者なんだから自重しないと」

「何の初心者なのよ……」

「何事も程々が一番ってことだよ。生かさず殺さず？」

「それ何に対して言ってるのか分ないんだけど、妙にム力つくわ」

そんなこんなでお説教を受けた私達。暫く正座だったのだけど、夜も遅いしもう休む事になった。

いつの間にか部屋は置かれていたテーブルは脇に立てかけられ、人数分の布団が敷かれている。ちなみに鮫島は別室。

ふかふかしたその6つ布団には、既にフェイトが一人だけ寝かされていた。寝ている表情だけなら幼い子供なのに……今は何を夢見ているのだろうか。

さて、私達も寝るとする。こう雑魚寝タイプの寝方はつい『枕投げ』したくてウズウズするんだけど、今日はフェイトが寝ているから自重することにした。

それに私も魔力を消耗して身体もくたくただ。布団に入ったらすぐ寝てしまう自身があった。

「……もう寝ましようか」

「珍しいね、アリサちゃんが大人しく寝るなんて」

「流石に疲れたわ。じゃあ、おやす……み……」

ばたり、と倒れるように寝入った私に、すずかがそっと布団をかけてくれたのだけは微かに覚えていたのでした。

全く。普段Sな癖に偶に優しくなるんじゃない。怒りきれないでしようが……。

翌朝。お嬢の癖に妙に寝相の悪いすずかに顔面ニードロップを喰らい、散々な気分が目覚めた私は意外な人物が枕元に立っているのを見てまだ寝ぼけているなと悟って布団に入りなおした。しかし無理やりばさりと布団を剥ぎ取られ、朝の寒さにぶるりと身体を震わせる私にひっしと抱きつく感触で、これは否応なしに現実なんだと懐かしい匂いに包まれて知った。

「やつほあー、アリサグモニー」

「なっ……!!」

金髪のショートボブ。青い瞳ながらどう聞いても日本訛りを隠そうともしない英語しか話せないこの女。

ブラウンのストールを巻いたその女性は、わしゃわしゃと私の髪を撫でながらほっぺをぐりぐりと摺り寄せてきた。猫か。

「急な旅になっただけど、どう？ベリインタレスティ？」

「下手な英語止めなさいよ……」

そして寝ぼけ眼で周囲を見ると、何処か驚いた表情で見る月村姉妹とフェイトが居た。高町姉妹はすでに布団には居ない。姉は稽古でなのはは厨房だろうか。

折角の旅なんだから楽にしたらいいのに。まあ、なのはがぐうたら

しているとこなんて想像できないから、それはそれでいつもどおりなんだろう。

「アリサちゃん、そちらの方は？」

いつの間にか浴衣の乱れを直し（家族、それに私となのは以外には妙に猫を被る）怪訝そうに訊くすずかに、私は重い溜め息を吐きながら答えた。

「私が聞きたいんだけど……どうして来たの、ママ？」

この『私が数年経ったらこうなる』と言うような容姿をしたこの女は、何を隠そうマイマザー。

商談でアメリカに飛んでいるパパに付き添って居るはずだが……どうやら密かに戻って来てたようだ。

「初めまして。メリッサ・バニングスですっ！アリサちゃんの母親やっていますっ！」

どっから持ってきたのか無駄に百合の花をばさりと背景に咲かせ、麗しき母親の登場などを少女漫画的に表現してみせるマイマザー。どうでもいいけど、後でそれを片付ける鮫島の苦勞を思うと涙なしには考えられない。どや顔で振り返る母に二度目の溜め息を吐きながら、私はやってられんとまだ暖かい布団へ舞い戻ろうとすると、首根っこをぐいと持ち上げられた。

「まだ眠いんだけど」

「珍しいじゃない、元気ないアリサちゃんなんて。折角の旅行なんだから楽しみなさい」

「強制的に連行されていただけだね」
「でも、楽しいでしょ？」

そう言う答えが決まっている質問をされると、非常に返答に困るの嫌なのだ。なのはと言い、ママと言い、『私』を理解している人間は皆こうだ。

私が何をして欲しくて、何がたくて、何すると喜ぶのか分かっている。まるで飼い犬のように。

だからいつも私が喜ぶ事を知っていて、それをしてくれたり、くれなかったりする。その反応を見て楽しむのだ。

そしてひっじょーに癪なのだが……私はそう言う関係を好ましく思っている。決してMなのではないぞ。勘違いしないでね。

何と言うかこう……『分かり合っている人たち』っていうのが、いいのだ。私がここに居る。私との絆は此処にある。なーんて思ったりして、ね。

「……悪くは、無いわ」

「んっもー、素直じゃないんだから。じゃあアリサちゃん起きて顔洗って朝ごはん食べよう。次のイベントまで時間無いから、早く準備しなきゃっ！」

「次の、イベント？」

「そうだよ、パティシエの朝は早い。早く準備してきなさい。はい、これ」

頬をぐいと掴んで右を向かせられると、何故か白いパティシエ姿のなのはが腕を組んで立っていた。

朝から怒涛の展開に些か付いて行けない私は何がなんだか分からないまま、なのはが放るパティシエ服を受け取った。

「それで、貴女にも」
「……」

そして、同じ服をフエイトにも手渡した。彼女はなのを見て驚き、そして複雑そうな表情で私となのはを交互に見た。

彼女の唇が聞き取れない小声で動いているのは、アルフと話しているからだろうか。彼女はたっぷり三十秒ほどそうしてまごついた後、しぶしぶと言った表情でそれを受け取った。

彼女の中でどういう話し合いがあったのだろうか。気にはなるが、とりあえず暴れてくれなくて何よりだ。

最悪、ここで彼女を取り押さえないといけないかと思っていただけに、ひとまず胸を撫で下ろしたのでした。

んで朝食。旅館の朝食は和食と洋食の選択性で、私は和食を選択。

和食はのり、納豆、味噌汁とご飯、おかずはししゃもと何だか見様によっては粗食のようなメニューだったけど、目が覚めるくらい美味しかった。

米の一粒一粒が立っていて、味噌汁は風味高く、ししゃもの塩加減は最高だった。昨日の疲れも吹き飛ぶような美味しい朝ごはんでした。

そして、なんだかそれを不思議な表情で口に運ぶフエイトを見やる。彼女にとつちや和食なんぞ食った事無いだろう。(アルフさん含む) それでもばくばく食べている所を見ると嫌いではないようだ。これが納豆なんぞ出た日は目も当てられなかったかもしれないが。

ふと厨房に目をやると、そこには予想通りなのはが鮫島と話しながら心なしか楽しそうに皿を洗っているのが見えた。やはりなのはが作ったのか。

癒ではあるが、おいしいものに恨みはない。私はそこは素直なのだ。うむ。

「んで、アリサちゃんどうなのよ」
「なにが『どう』なのよ」

心なしに楽しそうな雰囲気でも語りかけてくるマイマザーは、ふふんと訳知り顔で見渡してからそつと私の耳元に囁いた。

「『ライダー』って、面白い？」
「ぶっ！」

思わずぱくついた白米を盛大に噴射しそうになり、慌てて両手でガード。何とか事なきを得たが、また皆から怪訝な表情で見られてしまった。

「……いきなり、何言うのよ」
「だって、魔法だのライダーだの、楽しそうなことしてるそうじゃない。で、どうなのよ？」
「……」

好奇心という言葉が服を着てコサックダンスを踊っているわが母のことだ、恐らく自分もやってみたくてしょうがないんだろう。でも、期待させて悪いがこちらとら魔法やライダーに関わってから碌な目にあつてないのだ。マイナスがでかすぎて、既に母のような純粋な楽しさを連想することはたぶん、もうない。だから、私が微妙な表情で顔を歪ませたのを見て取ったママは、ちよつと残念そうな顔をしながらもその後追求はしなかった。

「もう、変な顔しないでよ」
「これは生まれつきよ」
「そんな風に生んだ覚えはありまっせーん」

ぐに。強制的にほっぺを持ち上げられた私は、お多福のような不自然な笑顔でママを見上げた。

考えてみれば、ママはどうしてやってきたのか。起きてからこっち、驚きすぎて回転してなかった頭がようやく回り始めたようだ。

私はほっぺを掴む手を跳ね除けてから、ママに聞いた。

「で、なんでママはこっちに來たの？」

「ん？呼ばれたからよ」

「誰に？」

「高町さんに」

「なのはにっ！……って、そりゃそうか」

なのははこの会の主催だ。企画も仕掛けも彼女次第だ。私へのサブライズとしては、十分に過ぎる。

でも気になるのは、あまりに『あっさり』に過ぎる事だ。朝起きたら普通に合流してたなんて、なんだかインパクトが弱い。

彼女ならもつとここぞ！つてときに『アリサの母登場！じゃーん！どや』みたいに、溜めて焦らして転がして、それから登場させるような気がする。

なのはの演出にしては、どうにも手落ちな印象を受けるのは、私だけなんだろうか。

「アリサちゃんか、お菓子作ってくれるって言うんだから。そりゃー來ちゃうでしょ」

「お菓子？……ああ、そういう趣旨だっけ」

そういえば、ずーっと忘れてたがこれはなのはがシュークリーム奢ってくれてただけの会だったのだ。最初は。

それがなぜか皆でパーティシエバトルすることになってるのは、なぜ

だろうか。

「ねえねえ、アリサちゃん。食べ終わった？着替えてみたんだけど似合う？」

「げ、すずか、丈ぴったりじゃない。揃えたの？」

「なのはちゃんの手作りなんだって」

「えー……」

そこへ朝食を済ませたすずかが跳ねながら白いパティシエ服を見せびらかしにやってきた。オーダーメイドのようにぴったり揃えられたその服は正しくなのはお手製だそうだ。

ここまで器用だともう逆に引くしかないが、すずかはうれしそうに飛んだり跳ねたりするので苦笑しておくことにする。にまー。

しかしあの娘も感情豊かになつたもんだ。人形のように殻に籠っていた昔からは想像がつかない。

「おねえちゃん、どう？」

「うん、似合ってる。すずか」

はしつと抱き合い、笑いあう月村姉妹を見ていると、それがどこかに忘れてきた物であるかのように尊く思える。何でか知らないけどふと目を戻すと、そこには厨房を手伝う高町姉の姿があつた。

「はい、これで最後」

「了解。じゃー、これからは料理教室の始まりだね。楽しみだよ」

「くれぐれも邪魔しないように」

「はい。どうせわたしやー、食べる専門ですよ」

笑いあう姉妹の姿は、いつもの厳しさはなく。そこにはただの親し

い家族の姿だけがかった。彼女たちのこういう姿は始めてみたけれど。悪くない。

いつもの我侭俺様してるのはじゃなく、生意気な妹と姉のじゃれあい。彼女も人の子なのだと、思えた。

「なんか、いいわね」

「そうよ。人生は楽しく生きなくちゃ、ね？」

自然と、楽しい気持ち湧き出てくる。私はママの手を握り、はしつと抱きついた。特に意味はない。

でもなんとなく、そうしたくなつたのだ。子供っぽい？いやいや、私は私に素直なだけなのだ。だから今は、久しぶりの母の香りに包まれて心から笑うことができたのだ。

……このところ、辛い事ばかりだった。

突然現れたワームに、殺された人たち。助けられなかった人たち。

そして、まりなさん。

出会いと別れは一瞬で、私の日常をいとも容易く打ち壊していつてくれた。

このところ、心から安心して笑ったことは無かった。そばにあったのは試練と決意と、そして恐怖。

私はようやく、そう、ようやく安心して笑うことができたのだ。この暖かい腕の中で。

「ママ……」

私はしばらく、その心地よい空間でまどろむのであった。

*
*
*
*
*

18話（後書き）

忙しすぎて時間ナス・・・

次話完成率50%ほどだけどなかなかしっくりこない。

こんな話でも読んでくれる人がいたら、気長に待ってちょよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5477s/>

天の道を往き、総てを司る女

2012年1月12日02時47分発行